

平成27年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

平安期における小野小町享受

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻日本文学専門

服部友香

平成28年3月

目次

凡例	4
序章	6

第一部 『小町集』の研究

第一章 『小町集』の成立とその享受

はじめに	18
一、歌仙家集本系統と神宮文庫本系統	19
二、異本「小町家之集」と静嘉堂文庫（一〇五・三）本	29
三、唐草裝飾本について	32
四、唐草裝飾本の検討	40
五、『小町集』の「基幹部分」と十一世紀における享受	47
おわりに	54
表	59

第二章 『小町集』の増補と展開 — 「あま」の歌を例にして —

はじめに	4
一、『小町集』の「出所不明歌」— 真作か他人歌か —	6
二、『古今集』『後撰集』の小町詠と「出所不明歌」	7
三、「あま」の詠まれ方— 小町以前 —	9

四、『古今集』所収の小町の「あま」の歌	7
五、「あま」の歌の増補	7
六、歌仙家集本系統における展開	2
おわりに	4

第三章 『小町集』における「山里」―屏風絵の「山里の女」との関わりから―

はじめに	8
一、閑居する小町―歌仙家集本系統の『小町集』―	9
二、屏風絵の「山里の女」	1
三、小町と「山里の女」の接点	3
四、「荒れたる宿」と「山里」と「月」	4
五、出所不明歌の内の山里関係歌	7
六、井手の歌	9
おわりに	2

第二部 物語・説話の中の小野小町

第一章 『住吉物語』と小野小町―引用された小町詠のはたす機能を中心に―

はじめに	5
一、長歌における小町引用―父を恋う表現として―	5
二、「照応」する小町詠引用	8
三、「心から」歌と姫君の流離	1
四、同化と差異化	3
五、小町詠引用の背後―海辺に漂泊する小町のイメージ―	5
おわりに	7

第二章 小野小町髑髏説話の展開・変遷―『江家次第』を中心に―	
はじめに	121
一、『江家次第』の髑髏説話の内容	122
二、独詠型から短連歌型へ	124
三、業平が小町の「尸」を「求」めるということ	127
四、十三世紀以降の展開―「恋」の要素の希薄化―	131
おわりに	133
結語	138

凡例

一、本論第一部第一章および第二章は拙稿『小町集』における「あま」の歌の増補について（『三重大学日本語学文学』一五、二〇〇四年六月）に大幅な加筆修正を行い、二論文に分割したものの、第一部第三章は同『小町集』における「山里」―屏風絵の「山里の女」との関わりから―（『名古屋大学国語国文学』九九、二〇〇六年一月）、第二部第一章は同『住吉物語』と小野小町―引用された小町詠のはたす機能を中心に―（『中古文学』八三、二〇〇九年六月）に加筆修正を加えたものである。序論および第二部第二章、結語は今回新たに発表するものである。

一、引用本文には適宜句読点などの記号を付加するとともに、必要な部分については傍線を附した。

一、『小町集』の引用本文については以下のものに拠った。

唐草装飾本：冷泉家時雨亭叢書 第二〇巻『平安私家集』七（朝日新聞社、一九九九年）の影印を私に翻刻した。

神宮文庫本：『私家集大成』第一巻 中古（和歌史研究会、一九七三年）

静嘉堂文庫本：『静嘉堂文庫新収古典籍』マイクロフィルム（雄松堂書店、二〇〇一年）の影印を私に翻刻した。

承空本：冷泉家時雨亭叢書 第七一巻『承空本私家集』下（朝日新聞社、二〇〇七年）の影印を私に翻刻した。

書陵部乙本：『新編 国歌大観』第三巻 私家集編（角川書店、一九八五年）

正保版本：平田喜信、新藤協三、藤田洋治、加藤幸一『合本三十六人集』（三弥井書店、二〇〇三年）

一、『小町集』の引用のさいには、引用した伝本名を引用本文の下に略称で記すとともに、四系統六類本の歌番号を添えた。なお、伝本名の略称は以下の通り。唐草装飾本：唐草 神宮文庫本：神宮 静嘉堂文庫本：静嘉 承空本：承空 書陵部乙本：書乙 正保版本：正保

一、『住吉物語』の引用本文については以下のものに拠った。

・成田本、契沖本系、筑波大本系、千種本系：武山隆昭『住吉物語の基礎的研究』（一九九七年、勉誠社）

・京都本系、横山本絵巻系：横山重『住吉物語集』（大岡山書店、一九四三年）

・徳川本系：磯部貞子『尾州徳川本住吉物語とその研究』（笠間書院、一九七五年）

・鈴鹿本系：田村憲治『愛媛大学古典叢刊三〇』（愛媛大学古典叢刊行会、一九八一年）

・正慶本系：武山隆昭校注 有精堂校注叢書『住吉物語』（有精堂、一九八七年）

- ・白田本系…白田甚五郎『はつしぐれ』（古典文庫、一九六五年）
- ・多和本系…友久武文「多和文庫蔵『住吉物語』―翻刻と解説―」（広島文教女子大学国文学会『国語学国文学論攷』一九七八年）
- ・住吉本系…桑原博史『中世物語研究―住吉物語論攷』（二玄社、一九六七年）
- ・晶州本系、大東急本系…鎌倉時代物語集成4（笠間書院）
- ・小学館本系…中世王朝物語全集十一（笠間書院）
- ・白峰本系、陽明本系…高橋貞一『住吉物語』（勉誠社、一九八四年）
- ・真銅本系…徳田和夫、他『真銅本「住吉物語」の研究』（一九九六年、笠間書院）

一、そのほか、本論において用いた引用本文は以下のとおり。

私家集は全て『私家集大成』、八代集、『源氏物語』『伊勢物語』『更級日記』『袋草紙』は新日本古典文学大系、歌合類は『平安朝歌合大成』『狭衣物語』は新潮日本古典集成、『大和物語』『平中物語』『和泉式部日記』『浜松中納言物語』『無名抄』『無名草子』は新編日本古典文学全集、『江家次第』は『神道大系』、『和歌童蒙抄』『和歌初学抄』『八雲御抄』『は日本歌学大系による。そのほかの引用本文は以下の通り。

- ・『玉台新詠』―鈴木虎雄 岩波文庫『玉台新詠集』上〜下（岩波書店、一九五三〜一九五六年）
- ・『萬葉集』―佐竹昭宏、木下正俊、小島憲之『改訂版萬葉集 本文篇』（塙書房、一九六三年）
- ・『前十五番歌合』『三十六人撰』―樋口芳麻呂 岩波文庫『王朝秀歌撰』（岩波書店、一九八三年）
- ・『新撰朗詠集』―川村晃生、佐藤道生編『新撰朗詠集校本と総索引』（三弥井書店、一九九四年）
- ・『袖中抄』―橋本不美男、後藤祥子『袖中抄の校本と研究』（笠間書院、一九八五年）
- ・『風葉和歌集』―中野荘次・藤井孝『校本風葉和歌集』（友山文庫、一九七〇年）
- ・『古事談』―浅見和彦、伊東玉美『新注 古事談』（笠間書院、二〇一〇年）
- ・『弘安十年古今集注』―片桐洋一『中世古今集注釈書解題』二卷（赤尾照文堂、一九七三年）
- ・『冷泉家流伊勢物語抄』―片桐洋一『伊勢物語の研究 資料篇』（明治書院、一九六九年）

序論

一、小野小町という人物

平安期の歌人の中には、実際の事跡をほとんど辿ることができない者が少なくない。高い官位にあつた男性の経歴は『公卿補任』などに記されるが、さほど身分が高くない人物、ことに女性については記録が残されないからである。そうした歌人については詠作の詞書や内容、当時の資料に見られる記述から断片的な事跡を拾い集め、その全容を推測するほかない。そして古くからそのような試みが繰り返されながらも、いまだその実像に肉薄することが叶わない歌人のひとりが小野小町である。

小町は九世紀の女性歌人であり、『古今集』仮名序では「近き世に、その名聞こえたる」六人の歌人、いわゆる「六歌仙」のひとりに数えられている。その作とされる歌は『古今集』に十八首、『後撰集』に四首、『新古今集』以降の中世の勅撰集に計四十一首採られている。また小町の家集として、三十六人集の一に数えられる『小町集』がある。しかし小町の出自、生没年、宮仕えの有無や職掌、子孫などについてはほとんど信頼できる記事が残されていないのである。

出自については『群書類聚』所載の『小野氏系図』に、小野篁―出羽守良真（一本当澄、又常澄）―小町という系譜が見られるが、ここに記された小町の父の名は、片桐洋一氏（注一）が指摘するように中世歌字の伝承以前には遡りえないものである。

またその職掌については従来采女説（注二）、上臈女房説（注三）、仁明天皇更衣説（注四）、氏女説（後述）、命婦説（注五）が提出されており、現在優勢なのは更衣説と氏女説である。更衣説の根拠は小町という名の「町」字にある。『古今集』には小町の他、その名が「町」字で終わる女性が二人見える。紀名虎の娘で惟高親王の母である三條町、及び三国氏出身で仁明天皇更衣の三国町である。彼女たちの「町」の呼名の出所は、「常寧殿を一名后町と稱したことにより、この更衣達がこの御殿の内に局を賜つて居た」（注六）事に由来するのであり、そのような事から同じく「町」字をその名に持つ小町も更衣であろうとするのである。角田文衛氏（注七）は、『続日本後紀』承和九年正月八日の条に見える「小野朝臣吉子並」正六位上。」という記述を引用し、小町をこの小野吉子であるとす。

いっぽう、氏女とは、『類従三代格』所収の大同元年十月十三日付の太政官符によれば次のようなものである。

諸氏々別貢女。（中略）氏之長者擇氏中端正女。貢此。其一三已上之徒。心神易易。進退未定。宜採女年卅已上卅已下時無夫者。

すなわち、諸氏から貢進された三十から四十歳までの女性で、容貌は端正で夫がないものである。この氏女を小町の職掌と捉える

研究者として代表的なのは山口博氏（注八）である。山口氏は、『古今集』仮名序の六歌仙評が以下のようにはじまっていることに注目する。古の事をも、歌をも知れる人、詠む人多からず。今、この事を言ふに、官、位、高き人をば、容易き様なれば、入れず。その外に、近き世に、その名聞えたる人は、即ち、僧正遍昭は、：

この箇所は「官、位、高き人」の他に、「近き世に、その名聞えたる人」が六歌仙であるというように読むことが出来る。実際、六歌仙のうち僧正遍昭と喜撰法師は出家の身であるので省くにしても、在原業平、文屋康秀、大友黒主の身分はさほど高いものではない（注九）。そのようなところから山口氏は小町の身分をもこれと相応のものと考え、また小町の名を、更衣をさすものではなく本名とする。そして『古今集』において実名で書かれている「久曾」「寵」「乙」と同様に下級の宮人であったとし、しかし「久曾」「寵」「乙」が氏姓を伴わぬのに小町だけが「小野」という姓を伴って表記されている理由を小野氏の氏女であったことに求めている。

山口氏は氏女の年齢や夫をもたないという点と、嘆老や愛の拒絶といった『古今集』の小町詠の姿勢を関係づけており、その点については検討の余地がある。だが、同様に氏女説を唱える研究者として、目崎徳衛氏（注一〇）、横田幸哉氏（注一一）、小林茂美氏（注一二）がおり、ことに小林氏は氏女を女房の前段階に位置する存在としたうえで、小町を「後宮文化の担い手が“氏女から女房へ”と推移する平安初頭の、過渡期かつ広義の「女房（↑氏女）」という範疇」で捉えておきたいと述べる。この説はまだしも可能性が高いが、小町がそのような立場にあったことを明確に示す資料がない以上、安易に従いがたい。

ただし『古今集』によれば、小町は安倍清行、小野貞樹、文屋康秀と以下のように歌の贈答を行っている。
下出雲寺に人の業しける日、真静法師の、導師にて言へりける言葉を、歌によみて、小野小町がもとに遣はせりける

安倍清行朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの涙なりけり

（『古今集』恋二 556）

返し

小町

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我は塞きあへずたぎつ瀬なれば

（同、恋二 557）

今はとてわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり

（同、恋五 782）

返し

小野貞樹

人を思ふ心の木の葉にあらばこそ風のまに／＼散りもみだれぬ

（同、恋五・783）

文屋康秀が、三河掾になりて、県見には、え出で立たじやと、言ひ遣れりける返事に、よめる

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思

(同、雑下・938)

藤原仲実の『古今集目録』によれば、安倍清行は承和三(八三ち六)年に文章生、貞観二(八六〇)年に従五位下、寛平七(八九五)年に従四位上に叙せられ、昌泰三(九〇〇)年に七十六歳で没している。また小野貞樹は嘉祥二(八四九)年に東宮少進、貞観二(八六〇)年に肥後守。文屋康秀は貞観二(八六〇)年に刑部中判事、元慶三(八七九)年に縫殿助に任じられている。すると、この三名はいずれも九世紀の半ばから後半に活躍した、さほど高貴な身分にはない男たちである。こうした男たちと交流をもち、また恋愛関係にあったことを鑑みれば、小町もまた彼らと同時代に活躍した、さほど身分の高くない存在であったと想定されるのである。

二、平安期の小町評価

さて、先に小町の勅撰集採歌状況についてふれたが、その中でも『古今集』における十八首という採歌数が群を抜いて多く、女性歌人としては伊勢の二十二首に次ぐ第二位となっている。しかも紀貫之の手になる『古今集』仮名序は、小町を六歌仙の紅一点として挙げ、「小野小町は、古の衣通姫の流なり。哀なる様にて、強からず。つよからぬは女の歌なればなるべし。」と評している。こうしたところから、『古今集』撰者たちが小町を高く評価していたことが窺われる。また『古今集』に「小町姉」の歌として以下の一首が掲出されていることも、当時の小町についての評価を考える上で重要であろう。

あひ知れりける人の、やうやく離れ方になりける間に、焼けたる茅の葉に文を挿して遣はせりける

小町姉

時すぎてかれ行小野のあさちには今は思ひぞ絶えずもえける

『古今集』恋五⁷⁹⁰

この作者表記を信じるならば、小町には姉がいたことになる。だが、『古今集』をはじめとする勅撰集の作者表記を見渡してみると、このように特定の女性の姉妹であることを示す例はひじょうに少ない。基本的には「藤原因香朝臣」「伊勢」のように、その名や宮中での呼称が記されるか、息子や父、男きようだいの名を軸とした「藤原後生が女」「右大将道綱母」「藤原真忠がいもうと」といった表記が行われている。

例外としてはここに挙げた「小町姉」のほか、『続拾遺集』以降の勅撰集に九例見える「平親清女妹」、『続千載集』恋五・一五八八に見える「大江政国女妹」があるが、これらはいずれも姉妹である「平親清女」「大江政国女」の詠作との区別のために行われた処置である。妹の名のみに焦点をあてた「小町姉」という作者名表記はきわめて異例であるといえよう。こうした作者表記は、『古今集』成立時において、和歌の名手としての小町の名が人口に膾炙していたことを浮かび上がらせる。

そして、十一世紀初頭の『拾遺集』から十二世紀後半の『千載集』までの五つの勅撰集に小町の歌は一切採られていないが、この時期にも小町への注目・評価は継続していた。『拾遺集』の撰者である藤原公任は、三十人の歌人の秀歌を一首ずつ選び出して歌合形式で配列した『前十五番歌合』、三十六人の歌人の秀歌を十首、あるいは三首選び出した『三十六人撰』において小町とその詠作を取り上げている。また十一世紀半ばに藤原明衡によって著された『新猿楽記』には、柿本恒之という架空の歌人の歌才が「不恥於猿丸大夫、衣通姫等、不在所愧於躬恒、貫之、小野小町等」と評されている。ここから、小町を躬恒・貫之と並び立つ存在と位置付ける言説も存在していたことが見て取れる。

なおこの時代には、能因法師の家集である『能因法師集』に、「小野小町夢にわかをかたる」という体験と、夢中で小町が詠んだ「まてといふ時よりかねてあかなくにかへらん君となげきしものを」という歌が記されてもいる（第一章で詳述）。詳しくは後述するが、これは藤原兼房が和歌の上達を願って柿本人麿を念じていたところ、夢に人麿が現れたという「人麿影供」の起源譚に近似した記述である。ここから小町が人麿同様、歌聖として尊崇されていた可能性も見えてこよう。時代は下るが、順徳院は『八雲御抄』において小町への深い信仰を記している。その萌芽が、すでに『能因法師集』にあらわれていたと見るべきであろう。

三、小町の「虚像」の展開

①小町の伝記をめぐる「虚像」

しかしこのような小町の伝記は、冒頭で述べたような事情から比較的早い段階で不明となってしまう、推測や伝承ばかりが横行していた。小町の伝記について言及した現存最古の資料は承保二（一一〇七五）年の成立と目される異本系『三十六人歌仙伝』（注一三）だが、そこには「小野小町 承和〇（比）人麿。出羽国郡司女也。別傳云〇（篁）中女也相違」とある。小町の活躍時期を承和（八三四〇八四八）ごろかとした上で、出自については出羽国郡司の娘、小野篁の娘という「相違」する二説を示しているのである。この時点で、小町の出自についての信頼に足る資料が失われてしまったことが知られる。

また藤原仲実（一一〇六六—一一二二）の作とされる『古今集目錄』では、小町の出自が「出羽郡司女。或母衣通姫云々。／号比古姫云々」とされる。「出羽国郡司女」という出自は『三十六人歌仙伝』を踏襲しているが、ここで新たに加えられた小町の母の名前「衣通姫」は、先に掲げた『古今集』仮名序の「衣通姫の流」という文言に拠った可能性が高い。だが「衣通姫の流」とは小町の血筋ではなく歌風についての評言であり、また「衣通姫」とは『日本書紀』では允恭天皇の皇后の妹、『古事記』では允恭天皇の皇女とされる軽太郎女の別名とされて

いる。『古今集』撰者たちが「近き世」に生きた存在として把握していた小町と、古代の衣通姫の間に親子関係は考えられない。『古今集』仮名序の誤った解釈から生まれたのである。小町の出自が、『古今集目録』の記述に強く影響を及ぼしていることが知られる。翻つていえば、そういった信憑性に乏しい伝承を呼び込んでしまうほどに、小町の伝記の空白部分は大きかったことになる。

さらに十二世紀に入ると、小町が死後に野晒しの髑髏となったという話が歌学書や説話集を中心に取り上げられるほか、漢詩文『玉造小町子壮衰書』（以下『壮衰書』）が小町の晩年の貧窮落魄を伝える資料と見なされるようになる。『壮衰書』は駢儷体の序と長編の五言詩から成っており、以下のような内容である。すなわち、「予」と称する人物が路傍で疲弊、貧窮した惨めな姿の老婆に出会う。「予」が老婆に身の上を問うと、彼女は次のように語った。自分は倡家の子、良室の娘であり、若く美しかった時分には奢侈驕慢を極めた。家族の愛情を受けて大切にされ、錦の衣や宝玉に飾られた美しい姿で日々を送り、食卓には山海の珍味が並んだ。四季の風流を愉しみ、折に触れては和歌を詠じ、また管弦の遊びに興じた。そのような自分に多くの男たちが求婚したが、両親兄弟は王宮の妃に奉ろうと考えるばかりでそれを受け入れなかった。だが家族が相次いで亡くなり、家が没落して貧窮孤独の身の上となった。ある獵師の妻となり、先妻との諍いや夫の態度、貧しい生活やなまぐさもののばかりの食事に苦しみつつも一人の男の子を産み、育てた。そうした生活の中で出家の望みが強くなっていった。息子にも夫にも先立たれ、嘆きはますます強くなるばかり。今は仏に縋り、ただ極楽浄土に導かれることを願う、と。「予」は仏道を讃嘆するために筆を取り、彼女のことを詩に作った、というのである。

その作者は空海とされることが多く、濟暹（一〇二五—一一一五）の『弘法大師御作書目録』に「玉造小町書一卷」、覺鑿（一〇九五—一一一三）の『高祖御制作書目録』にも「玉造小町子壮衰記一卷」とある。空海の没年は承和二（八三五）年であり、先述したように九世紀の半ばから後半にかけて活躍したと考えられる小町の老年期を目的の当たりにした可能性はきわめて低い。そのことを根拠に、十二世紀の半ばに成立した藤原清輔の歌学書『袋草紙』は「諸集人名不審」という項目の中で以下のように述べている。

小野小町 衰形伝の如きは、その姓玉造氏なり。小野はもしくは住む所の名か。ただしある人云はく、件の伝は弘法大師等の作る所なり。小野は貞観比の人なり。かの衰形は他人か。

だが平康頼『宝物集』（十二世紀後半）は「小野小町がおいおとろへて貧窮になりたりしありさま、弘法大師の玉造といふ文にかき給へるこそ、あはれにかなしく侍るめれ。」と述べており、これ以降、小町と『壮衰書』の老婆は基本的に同一人物と考えられるようになってゆく。そして、恐らくは実像から大きく乖離しているであろう小町の「虚像」があたかも実伝のような重みを持って流布し、中世にはそれを素材として小町物の謡曲や小町を主人公とする御伽草子が生み出されることとなるのである。

② 真作歌と非真作歌

こうした小町の「虚像」の流布と関わって注目すべきなのは、小町の名を冠して流布する歌の中にも、真作とは見なしがたい歌々が少なからず混入しているということだ。小町の家集として伝来する『小町集』もそうした小町に結び付けられた歌々を多分に含んだテキストである。

香川景樹は『小町集』について以下のように述べている。

小町集、これも猿丸集にて、撰集のうちなるよみ人しらずの歌をとり集めて、これが集となせるもの也。此の人のとられたる限りもひとつにふさねたる也。それもはし書などはみないつはりそへたるものなり。

〔桂園遺稿〕

『猿丸集』は『古今集』真名序の大友黒主評に「古猿丸大夫之次也」とその名が挙がっている伝説上の歌人猿丸大夫の家集で、『小町集』同様に三十六人集の一に数えられている。だがこれは高市黒人妻の歌を冒頭に置き、『萬葉集』所収歌と『古今集』詠人不知歌から構成されたもので、猿丸大夫の真作を集めたものではない。そもそも猿丸大夫の歌と称されるものが『古今集』『後撰集』には見えず、猿丸大夫は架空の人物である可能性が高い。景樹はそのような、明らかに虚構性の高い家集と『小町集』とを同列に置いている。

景樹が見ていた『小町集』は、おそらく近世に版本として出回っていた歌仙家集本系統の一一五首本であったろう。この系統の伝本は、いずれも『古今集』や『後撰集』から抄出された小町詠を核として構成された他撰の抄出家集で、それらの歌に加えて『小町集』以外の平安期の資料に見られず、小町の真作か否かを定めがたい歌——石橋敏男氏（注一四）いうところの「出所不明歌」のほか、『古今集』『後撰集』『古今和歌六帖』の詠人不知歌や他人の歌として伝来する歌を数多く収めている。しかし、小町の自撰と見られる『小町集』は現段階では発見されておらず、歌仙家集本系統より小規模で、より古態をとどめている可能性が考えられる伝本についても、『古今集』『後撰集』の小町歌と「出所不明歌」、詠人不知歌や他人歌から構成されているのである。

私家集、ことに後人の手になる他撰家集が他人歌をも含み込んで成長・増益してゆく例は『小町集』の他にも見られる。たとえば小町同様に『古今集』仮名序で六歌仙として名が掲げられている僧正遍昭の家集『遍昭集』にも、息子の素性法師をはじめとした他の僧侶の歌が入集している。また『人麿集』の歌仙家集本系統の巻末には「柿本人麿あからさまに京近き所にしはすの廿余りくだりけるをとうのぼらむと思ひけれど、いささかにさはる事ありてえのぼらぬに……」から始まる長文の詞書を附した上で、藤原輔相の詠と見られる六十七首の国名隠題歌が附されている。そして『人麿集』が輔相の作と考えられる歌々を、あたかも人麿の真作であるかのような詞書を附して集中に組

み込んでいったように、『小町集』においても「出所不明歌」や詠人不知歌、他人歌があたかも小町の真作であるかのように『古今集』『後撰集』の小町詠に混ざって掲げられることとなった。

そしてこれらの歌は、『新古今集』以降の勅撰集において「小町の歌」として取り上げられてゆく。これは、『新古今集』以下の勅撰集には『伊勢物語』で昔男の歌とされる「出所不明歌」や、虚構性の強い『篁集』において篁が詠んだ歌がそれぞれ業平詠、篁詠とされて収められているのと同様の現象であろう。小町、業平、篁といった『古今集』時代の歌人は、歌仙として権威化される一方で伝説や虚構にまみれ、『新古今集』時代にはその実像は甚だ不確かなものとなる。そのような中で、ストイックに実像に肉薄する事が放棄され、虚像をも含み込んだ形で積極的にその歌人たちを享受してゆく事が行われたのであろう。こうした意識の高まりは『物語二百番歌合』や『風葉和歌集』といった、物語中に登場した和歌をあたかも実在の人物の詠作のように扱う文芸作品の成立とも無縁ではないに違いない。

四、近代以降の小町研究の方向性―平安期における小町像―

さて、近代以降の小町研究は小町の伝記の空白部分に深く食い込んでいたこのような小町の「虚像」を切り離し、「実像」に肉薄するため資料を精選した上で、小町の伝記研究、真作である蓋然性が高い歌々の解釈を行ってきた。そして「実像」研究からは排除された、小町に結び付けられた他人の歌、小町についての説話・伝承の数々もまた、「虚像」としての小町を論じるための材料として取り上げられ、「虚像」の成立背景や担い手、時代による変化について考察が加えられることとなった。

そうした試みの中でも古いものとして、黒岩周六『小野小町論』（一九一三年、朝報社）や関谷真可禰『小野小町秘考』（一九三三年、雄山閣）、前田善子『小野小町』（一九四三年、三省堂）が挙げられる。

黒岩氏は小町を「一夫だにも見えず」という貞女として捉え、交渉材料として『古今集』『小町集』および「一般に典拠とするに足ると認定せられている史籍」を用いるが、『小町集』については「杜撰の点」が多いため、「小町の歌に相違ないと見込みの附いた歌、又は他人の歌と認むべき理由を見出さぬ歌」のみを用いたと述べる。そしてこれらの歌を手掛かりに小町の実像に迫るとともに、髑髏説話や『壮衰書』のような「作り話し」の成立経緯にも触れている。

関谷氏の研究はこのような黒岩論への疑問・批判から出発したもので、三百三十冊余りの文献を参照しつつより実証的に小町を捉えようとしている。そして『小町集』所収歌の中でも明らかな他人歌は除外するが、『古今集』『後撰集』『拾遺集』に詠人不知歌として入っている歌々は真作として扱っている。

そして前田氏は『小町集』の諸伝本を検討した上で、その所収歌を①勅撰集に撰入せられた小町の歌、②他人の歌の混入したもの、③詠人不知の歌の混入したもの、④他人の歌集中にも見える歌、⑤小町集にも見える歌に分類する。そして関谷論が小町の真作として扱っていた『小町集』中の勅撰集の詠人不知歌をも小町の真作から除外し、厳選された歌から小町の容貌、性格、思想、境遇などを浮き彫りにしようとしている。また小町の出自やその晩年にかかわる伝説の成立・展開についても、紙幅を割いて論じている。なお前田氏が『小野小町』で取り扱っているのは歌仙家集本系統と、二〇〇〇年に公開された静嘉堂文庫（一〇五・三）本と同系統の異本『小町家集』のみなのだが、のちに「異本小町家集について―神宮文庫所蔵異本三十六人家集・及び架蔵異本三十六人家集1・2中の小町集に就て―」（『国語と国文学』二三・八、一九四六年八月）において、六九首から成る神宮文庫本系統の存在を報告している。

だが片桐洋一氏は『小野小町集』考（『言語と文芸』四九、一九六六年六月）『古今和歌集以後』二〇〇〇年、笠間書院）および『小野小町追跡』（一九七五年、笠間書院）においてこれらの研究を批判する。『小野小町追跡』によれば、これらは「皮肉な言い方だが、いずれも新しい小町説話を形成するに功あったと称すべき」もので、「学問的自覚に乏し」という。そして自らは『古今集』に小町詠として掲出された十八首のみを小町を考える上での根本資料と位置付け、『後撰集』の小町詠四首については説話的な性格が色濃いことを根拠に真作とは断定できないと述べる。また歌仙家集本系統および神宮文庫本系統の『小町集』の大半を占める「出所不明歌」については、六歌仙時代というよりも、十世紀後半ごろの歌壇の流行を反映した歌枕が見出されることから、後の時代に小町に結び付けられた歌ではないかとする。そして両系統の『小町集』の成立を十世紀のごく末期、あるいはどんなに遅くとも十一世紀のごく初期と考え、『後撰集』の小町歌や『小町集』の「出所不明歌」、他人歌が小町に結び付けられた背景に、中世の説話集や謡曲などに見える説話的な小町像の成立を見ている。それは「弱い小町、哀れな小町」「美しすぎるほど美しく嬌慢で男を寄せ付けなかった小町が、年若い、男に捨てられて、孤愁に泣き、落魄したというストーリー」「美人嬌慢説話と衰老落魄説話の組み合わせ」であり、その淵源に以下の二首の『古今集』の小町詠が存在するとする。

花の色はうつりにけりないたづらに我身よにふるながめせしまに（『古今集』春下¹¹³）

文屋康秀が、三河掾になりて、泉見には、え出で立たじやと、言ひ遣れりける返事に、よめる

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思

（同、雑下⁹³⁸）

容色の衰えを「花の色」が「うつ」ることにとえた前者は「美しく栄えたものが衰え枯れ果てるという小町の説話的一生」を十分に感得できる内容であり、また卑官である康秀について地方に下ることを承諾する後者は「落魄説話の形成に大いなる役割を果たした」というのである。

こうした片桐氏の見解はその後の小町の和歌研究に引き継がれ、小町の「実像」を伝える資料を『古今集』の十八首に限定して、その一首一首に真摯に向き合おうとするムーブメントをつくりだした。そしてこうした風潮の中で、特に『古今集』の小町歌に見られる漢籍や仏典の受容についての大きな成果が挙げられている(注一五)。ことに後藤祥子「小野小町試論」(『日本女子大学紀要 文学部』二七、一九七三年三月)や山口博『閨怨の詩人 小野小町』(一九七九年)は、六朝時代に隆盛をみせた閨怨詩、すなわち男性詩人が愛を失った閨中の美女を客観的に描き、その思いを代弁する詩が『古今集』の小町詠に影響を及ぼしている可能性を示しており、注目される。

後藤氏は、小町の「夢」の逢瀬を詠む歌が『古今集』に少なくないことに着目し、閨怨詩の中にも「夢」を素材にしたものが散見されることを指摘する。そして小町は、みずからを「閨怨詩の女主人公に擬して新しい歌の世界を開いた」とする。また山口氏は、閨怨詩は平安期の勅撰漢詩集、ことに嵯峨朝の『文華秀麗集』にも取り上げられ、また道真によって編まれた『新撰万葉集』でも、『寛平御時后宮歌合』の中の恋歌に、その内容を漢訳した閨怨詩が附されている。そしてこの時代の和歌においても、男性歌人が女の立場になって歌を詠むという閨怨詩手法が見られる、と指摘する。そうした和歌と閨怨詩がきわめて近い位置にあった時代の中で作歌活動を行った小町は、閨怨詩の題材や表現をその詠作に取り入れているというのである。そして我が身の衰えを嘆く「花の色は」歌、後藤氏も指摘する夢にしか結ばれない恋の歌、我が身を「うき草」になぞらえる「わびぬれば」歌などを、閨怨詩由来の歌々と見ている。ただし山口氏の論は、そのような小町の和歌表現と「氏女」という境遇を深く関連付けている点で、小町の夢歌に虚構的な性格を見る後藤氏とは異なる。

さて、小町の歌に虚構的な性格を見るならば、そこから小町を圍繞する文学的状況を知ることができて、歌とその実人生、ことに恋愛関係とのあいだに積極的な関係を考える必要はなくなる。これは、おびただしい虚像に覆われていた小町を、その虚像も含み込んだかたちで享受してきた歴史をふまえて提示された、小町研究のひとつの「回答」といえるだろう。そして片桐氏が小町を考える上での根本資料とした『古今集』の十八首にも疑いのまなざしを向ける論もまた、そのような「回答」のひとつとみてよい。藤平春男「小野小町」(『国文学』一二・一、一九六七年一月)は、『後撰集』の僧正遍照との贈答のみならず、前掲した『古今集』の清行・貞樹・康秀との関係を記した歌もまた事実か否かあいまいであるとする。また田中喜美春『小町時雨』(風間書房、一九八五年)は『古今集』所収の小町詠とされる歌々の中にさえも他人歌が混入している可能性を想定し、六二三、六五六、六五七、六五八、七二七、一〇三〇、一一〇四の七首を真作にあらざと断じている。

しかしながら、片桐氏が『小町集』を素材として論じた平安期の小町享受の実態や説話的な小町像については、それ以降さほど積極的な検討が行われてはこなかった。ただし、上岡勇司「小町歌の伝承」(『説話伝承研究』二五、一九八一年四月)『和歌説話の研究 中古篇』笠間書院、

一九八六年）や明川忠夫「小町伝説の構造」（『日本文学』三一・五、一九八二年五月）やが、『古今集』の小町歌、ことに片桐氏の挙げる「花の色は」歌や「わびぬれば」歌がどのように中世の小町伝承にまで繋がってゆくのか、という問題を論じるなかで、物語の引歌に触れている点、興味深い。平安期の物語における「わびぬれば」歌の引歌は、『源氏物語』の浮舟、『狭衣物語』の飛鳥井姫君、そして『浜松中納言物語』の吉野姫君によってなされている。上岡氏はこのような不幸な女性による「わびぬれば」歌の引歌の背後に小町説話が介在している可能性を示し、明川氏は平安期から御伽草子の時代までの『古今集』の小町詠引歌を取り上げ、「花の色は」歌の説話化の断片が平安期の引歌表現からは見出せないこと、それに対して本来は本心からのやりとりではなかったろう「わびぬれば」歌は、引用の中で「誘われればどこにもついていく女」へと変容し、時代が過ぎると「好色、放浪」という小町のイメージを増幅するものになったという。そして「わびぬれば」歌を核とした小町の一代記的な説話が形成された中世においてはじめて「花の色は」歌が注目され、そこに容色の衰えの意までもが詠み込まれていったと考えている。個々の指摘に検討の余地はあるが、平安期の小町像を考える上で引歌表現をも資料としている点は興味深い。」

また片桐氏が説話的な小町像の追跡のために用いた『小町集』については、従来知られていた歌仙家集本系統と神宮文庫本系統以外の伝本が存在が報告され、研究が進められている。その中でも一九九九年に公開された冷泉家時雨亭蔵の唐草装飾本『小町集』は、『後撰集』所載の小町歌が一切見えない点で注目すべきものである。この唐草装飾本『小町集』の公開により、『小町集』所載の「出所不明歌」のより古態をとどめた本文を推測すること、「出所不明歌」や他人歌がどの段階で小町に結び付けられたのかということをより詳細に見てゆくことが可能となった。この唐草装飾本を含めた『小町集』の総合的研究としては、近年角田宏子が上梓した大著『小町集』の研究』（和泉書院、二〇〇九年）があり、その成果をふまえてさらなる検討が求められよう。

五、本論の方向性

さて、本論ではこのような研究状況をふまえつつ、『古今集』より後の、平安期における「小町」という存在に焦点を当て、その歌や人物像がどのように享受されていたのかという問題を究明する。

第一部は、主に『小町集』について論じる。まず第一章では、唐草装飾本も含めたかたちで『小町集』の再検討を行い、唐草装飾本が『後撰集』の小町歌と接触する前の古い『小町集』の姿をとどめている可能性について考察する。次に第二章では『小町集』に多く含まれている「あま（海人）」を詠む歌を、『古今集』初出のもの、『後撰集』や唐草装飾本に初出のもの、それ以降に成立した伝本に初出のもの、というように段階的に見てゆき、時代とともに「あま」の歌を詠む小町像がどのような変化を遂げたのかを考察する。第三章では、歌仙家集本

系統の『小町集』に三首含まれている「山里」の生活を詠む歌を取り上げ、『古今集』『後撰集』の小町詠には見られない「山里」という要素が『小町集』に導入された理由や、『小町集』中における「山里の小町」のイメージの変化について論じる。

次に第二部では、『小町集』以外のテクストにおいて小町の歌やそのイメージがどのように享受されていたか、という問題を扱う。第一章では、『小町集』から離れて、小町詠の引用が三例見出せる短編物語『住吉物語』を取り上げる。また第二章では、野晒しとなった小野小町の髑髏が歌を詠み、それを聞きつけた人物に発見、供養される、という説話——いわゆる小町の髑髏説話の変遷について検討を加える。

注

注一：片桐洋一『小野小町追跡』（笠間書房、一九七五年）

注二：黒岩周六「小野小町論」〔淑女かぐみ〕第五号（一九二二年九月）と『婦人公論』第二卷第八号（一九一三年四月）

注三：前田善子『小野小町』（三省堂、一九五三年）

注四：注一前掲書。

注五：熊谷直春「小野小町の真実」〔国文学研究〕四七、一九七二年六月）

注六：注三前掲書。

注七：角田文衛「小野小町の身分」〔国文学〕二八・九、一九八三年七月）

注八：山口博『閨怨の詩人 小野小町』（三省堂、一九七九年）

注九：『古今和歌集目録』によれば、在原業平は右馬頭、右近衛権中将、藏人頭を勤める。文屋康秀は刑部中判事、後に縫殿助。黒主は近江国の豪族であり、地方の勢力者であったと考えられる。

注一〇：目崎徳衛 日本詩人選6『在原業平、小野小町』（筑摩書房、一九七〇年）

注一一：横田幸哉『小野小町伝記研究』（風間書房、一九七四年）

注一二：小林茂美『小野小町攷—王朝の文学と伝承構造—』（桜楓社、一九八一年）

注一三：新藤協三「異本三十六人歌仙伝—翻刻ならびに解説—」〔国文学研究資料館紀要〕八、一九八二年三月）

注一四：石橋敏男「小町集成立考」（東京教育大学国語国文学会『國語』四・一、一九五五年八月）

注一五：後藤論、山口論のほか、藤原克巳「小野小町の歌のことば」〔古今集とその前後〕風間書房、一九六一年）、久富木原玲「夢歌の位相―小野小町以前・以後」〔万葉への文学史 万葉からの文学史〕笠間書院、二〇〇一年）大塚英子『古今集小町歌生成言論』（笠間書院、二〇一一年）など。

第一章 『小町集』の成立とその享受 —唐草裝飾本を中心に—

はじめに

『古今集』真名序には、『古今集』の撰歌資料についての以下のような記述がある。

爰詔大内記紀友則。御書所預紀貫之。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。

各献家集并古来旧歌。…

ここでの「家集」は家門の和歌の「集」を指すものである(注一)。小野小町の伝記は不明であるが、『古今集』中には「小町姉」という作者名が附された歌が一首入集しており、また小町同様に小野の姓を名乗る人物の詠作も少なくない。すると小町の一族の「家集」が『古今集』の撰歌資料として用いられた可能性は否定できないだろう。だが小町の家集として伝来し、三十六人集の一に数えられている『小町集』の現存伝本はいずれも『古今集』や『後撰集』から抜き出された小町詠を中心とする他撰の抄出家集である。その大半を占めるのは『小町集』以外の平安期の資料に見られない、おそらくは小町作として伝承されてきた歌々であろう。「出所不明歌」であり、また「序」でも述べたように勅撰集に詠人不知歌、他人の歌として入集する歌々や、小町以外の人物の家集に見られる歌も存在している。

このような『小町集』はいつ、どのような状況を背景として成立し、現存伝本に分かれていったのか。また、それを享受していたのはいかなる人々なのか。そのすべてを明らかにすることは難しいが、本論では一九九九年にその存在が報告された冷泉家時雨亭文庫蔵の唐草裝飾本『小町集』を含めた以下の四系統を検討し、この問題の一端に肉薄することを試みる。(ここに掲出した諸本分類は、本論の結論をふまえて私に行った)

- (一) 冷泉家時雨亭文庫蔵唐草裝飾本……………四五首
- (二) 神宮文庫本系統……………六九首
- (三) 静嘉堂文庫(一〇五・三)本系統(本体)……………六八首
- (四) 歌仙家集本系統(流布本系統とも)
- (a) 冷泉家時雨亭文庫蔵承空本系統……………一二五首

- (b) 書陵部(五〇六・八) 乙本系統……………一一六首
- (c) 正保版本系統……………一一五首

具体的には、まず従来研究の対象とされてきた歌仙家集本系統、神宮文庫本系統の二系統の配列・構造について概観した上で、部分的に歌仙家集本系統の古態をとどめている可能性のある静嘉堂文庫本系統についても触れ、最後に唐草裝飾本を見る。そして、唐草裝飾本が現存諸本の中では古態をとどめた本文を有していることを示す。

また、それをふまえて『小町集』諸伝本の形成・展開の様相を検討し、『小町集』所載の『古今集』『後撰集』の小町歌以外の歌々が、比較的古く——『後撰集』が成立した十世紀半ばごろから小町の作として伝承されてきたものと、それ以降に小町に結び付けられた可能性があるものに分けられることを指摘し、前者が十一世紀に、『後拾遺集』初出歌人のあいだで『小町集』というテキストを介して「小町の歌」として享受されていた可能性をも示してみたい。

なお、本章の末尾に、歌仙家集本系統の宮内庁書陵部蔵(五〇六・八)乙本を柱とした諸伝本の歌番号対照表を附した。適宜参照されたい。

一、歌仙家集本系統と神宮文庫本系統

①片桐洋一氏以前の先行研究

『小町集』については長らく、一一五首以上の歌から成る歌仙家集本系統(流布本系統とも)と、六九首から成る神宮文庫本系統(異本系統とも)の二系統のみが研究対象とされてきた。

前者は『古今集』春下・一一三番歌の題不知の小町歌「花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに」に「花をながめて」の詞書を附して巻頭歌とするもので、一一六首から成る伝本が『群書類聚』に収載されているほか、一一五首の伝本が正保版歌仙家集、絵入版本『小町集』といった版本として出回った。近世以降、人々の目に触れることの多かった系統の伝本であり、『国歌大観』や『私家集大成』『和歌文学大系』にも入っている。この系統の写本は、一一六首本に限定しても宮内庁書陵部(五〇六・八)乙本、西本願寺補写本、内閣文庫(二〇一・四三四)本、陽明文庫(二二二)本、静嘉堂文庫(一〇五・一二)本など数多く見られる。その前半部では『古今集』所載の題不知の小町詠に作歌状況を記した詞書を附しているほか、後半部では『古今集』『後撰集』の詠人不知歌や他人歌をも数多く入集させている。小町をめぐる歌語りのな世界を多分に反映した集といえよう。

後者は前田善子「異本小町家集について―神宮文庫所蔵異本三十六人家集・及び架蔵異本三十六人家集1・2中の小町集に就て―」（『国語と国文学』二三・八、一九四六年八月）において報告されたもので、「五月五日人を／あやめ草人にもたゆと思ひしはわか身のうきに思ふ成けり」という「出所不明歌」を巻頭歌とする。その配列は部分的に歌仙家集本系統の配列と一致するものの、詞書や明らかな他人歌が少なく、また歌仙家集本系統の後半部の歌を一切有していない点特徴的である。この系統の慶長十（一六〇七）年の奥書を有する神宮文庫（三・一二〇四）本の翻刻が『私家集大成』に、寛永年間の写とされる醍醐家旧蔵の志香須賀文庫本の翻刻が久曾神昇『西本願寺本三十六人集精成』（風間書房、一九六六年）に掲出されており、写本としてはほかに宮内庁書陵部（五一・一二）本、高松宮家旧蔵国立歴史民俗博物館本、蓬左文庫本、大和文華館本、中院通茂写本、島田良二氏蔵の豊前本がある。これは久曾神昇氏（注二）により、天永三（一一一一）年に白河上皇六十賀の後宴の贈り物として制作された西本願寺本三十六人集所収の『小町集』から出た本文であることが明らかにされている。

さて、『小町集』がこの二系統しか知られていなかった時点での研究としては先に挙げたもののほか、石橋敏男氏（注三）、片桐洋一氏（後述）、島田良二氏（注四）、橋本不美男氏（注五）、藤田洋治氏（注六）、杉谷寿郎氏（注七）、室城秀之氏（注八）のものがある。その中でもことに特筆すべきは、片桐氏の研究であろう。片桐氏はまず『小野小町集』考（『言語と文芸』四九、一九六六年五月）『古今和歌集以後』二〇〇〇年、笠間書院）の中で歌仙家集本系統の一六首本と神宮文庫本系統について検討を加え、『小町集』所収歌を①『古今集』によって小町作と考えられる歌、②詠人不知を含めて他人の歌と考えられる歌、③『新古今集』以降の勅撰集に採られている歌を含めて小町作とも他人の詠とも断定できない歌 に分類する。そして歌仙家集本系統と神宮文庫本系統を比較すると、歌仙家集本系統が他人歌を多く含むのに対し、神宮文庫本系統には冒頭から六二番歌までの箇所詠人不知歌を含めた他人の歌が存在しない。また歌仙家集本系統の詞書が人間関係を明らかにするところが多く、物語的气氛を感じさせるのに対し、神宮文庫本系統の詞書は『古今集』などの原資料に近く簡単であるとする。そしてそこから、神宮文庫本系統のほうが『小町集』のより古い形をとどめているとする。

そしてこれにつづき、『小野小町追跡』（笠間書院、一九七五年）のなかで『小町集』の構造や増補の方法、成立年代について検討を加え、『小町集』の伝本について以下のような見解を示している。

- ①歌仙家集本系統の一六首本は、本体部分（二〇〇）と他本からの増補部分「他本歌十一首」（一〇一〜一一一）、「又他本五首」（一二二〜一二六）に分けられる。ただし本体部分も段階的に増補を繰り返して成立したもので、第一部、第二部、第三部に分けられる。第一部（一〜四五）は、『古今集』『後撰集』の小町歌やその贈答歌を中心に構成された部分で、四十五首のうち半数以上の二十四首がそれらの歌々によって占められている。

②歌仙家集本系統の第二部(四六〇七〇)は、ほとんど「出所不明歌」から構成されており、『古今集』『後撰集』の小町歌は一首しか含まれていない部分である。この部分の配列は、いくつかの例外を除くと神宮文庫本系統のそれと一致する。これは第一部の享受過程で、神宮文庫本系統に近い系統の『小町集』との対照が行われ、第一部に存在しない歌々がその別本の配列に従って抜き出され、付加されたものである。

③歌仙家集本系統の第三部(七一〇一〇〇)は、『古今集』『後撰集』によって小町以外の他人の歌であると知られるものを中核にしている。また神宮文庫本系統に出ている歌は一首もなく、この系統だけに付加された歌が並んでいる。

④歌仙家集本系統の二度にわたる増補部分に存する歌々は、他の資料から小町の歌ではないと断定できるものばかりで、これらの歌々もまたいっさい神宮文庫本系統に見えない。

⑤神宮文庫本系統は、一〇六二番歌までは小町作ではないと断定できる歌は採歌しない方針であった。しかし六三番歌以降末尾までの部分には『馬内侍集』『斎宮女御集』に見られる歌や『拾遺集』の詠人不知歌が含まれている。また小町の死をめぐる伝承と関わる歌(六七〇六九)も取り入れられていて、次元を大きく異にしている。この部分は後の増補、第二部だと考えねばならない。

②以後の歌仙家集本系統、神宮文庫本系統研究の展開

以降の研究は主にこの片桐論をふまえて進められてきた。そして、歌仙家集本系統が『古今集』『後撰集』の小町詠を中心とする第一部に神宮文庫本系統に近い本などからの増補が行われ、段階的に形成されていったという見方じたいは継承されてゆくもの、どこからどこまでを形成段階上の一つのまとまりとして扱うか、という点については異論も提示されている(注九)。また片桐氏は歌仙家集本系統の一六六首本のみを対象としているが、より細やかに歌仙家集本系統の諸伝本を検討することも行われてきた。その結果、歌仙家集本系統の伝本は以下の三種類に細分類されることが明らかにになった(注一〇)。

- (a) 冷泉家時雨亭文庫蔵承空本系統……………一二五首
- (b) 宮内庁書陵部蔵(五〇六・八)乙本系統(注一一)……………一一六首
- (c) 正保版歌仙家集本系統……………一一五首

この三系統の配列はほとんどの部分において共通している。まず(a)と(b)を比較してみると、歌数じたいは(a)のほうが(b)よ

り九首多い。しかしそれらのうち七首は集中に二首以上重出する歌であり、(a)にあつて(b)には見えない歌は以下の二首のみである。
ミヤコイデ、ケフミカノハライツミガハカハカゼサムミコロモカセヤマ (承空)

『古今集』羈旅⁴⁰⁸ 詠人不知／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹¹⁴、書乙、正保なし)
ヲミナヘシオホカルノベニヤドリセバアヤナクアダノナヲヤタチナム (承空)

そして(b)と(c)の形態的な差異は、(b)の四二番歌であり、『古今集』一八九番歌に詠人不知歌として掲出されている「いつはとは時はわかねどあきの夜ぞものおもふことのかぎりなりける」を(c)が有していないという一点のみである。これらの歌はいずれも『古今集』において小町の作として扱われていない歌で、真作である可能性は低い。そのようなことから藤田洋治氏(注一一)は、(a)の重出歌や他人歌を削除して本文を整えたものが(b)であり、さらに「いつはとは」歌が削除されるか脱落した結果(c)が成立したと見ている。さて、(a)の承空本は次のような奥書を持つ。

建長六年七月廿日重校合令于九／条三位入道本了 彼本哥六十／九首^云 頭家三位自筆／本也 安元二年十一月八日^云

正応五年十二月九日令侍中／詹事丞成尚書之即之校了／藤資経

永仁五年三月十五日於西山房／書写畢／承空／承空上人／寄進之

すなわち、承空本は安元二(一一七六)年に筆写された「頭家三位自筆本」を基幹とするもので、建長六(一二五四)年に神宮文庫本系統の一伝本と推定される「九条三位入道本」と校合された。そして正応五(一二九二)年に藤原資経によって書写され、更に永仁五(一二九二)年に承空によって書写されたというのである。

この承空本の転写本が書陵部(五一〇・一一二)本で、同様の奥書を持っているが、これは片仮名と漢字交じりで書かれた承空本とは異なり、ひらがなと漢字を用いている。本文と書き入れは基本的には承空本と同一であるが、部分的に欠脱、誤写なども存在する(注一三三)。

また杉谷寿郎氏(注一四)や角田宏子氏(注一五)によってこれと同系統の伝本と認められているのが、神宮文庫蔵(一一一三)本と、一五首本である中田光子氏蔵本に加えられている富士谷成章の異本注記からその存在が知られる「小」本、「甲」本(ともに現在所在不明)である。前者は承空本の二七、四六、八一、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇八、一〇九番歌を有していないが、それ以外の部分の配列は承空本と同様で、「ミヤコイデ」歌と「ヲミナヘシ」歌をも含んでいることから、同系統の伝本と認められるものである。なおこの本は承空本、書陵部(五一〇・一一二)本にはない「おほかたの秋くることに我身こそかなしき物とおもひしりぬれ」という『古今集』一八五番

歌の詠人不知歌を一一五番歌として載せる。富士谷成章の見た「小」本でも、この歌を「みやこいで」歌の次に置いており、本来承空本はこの歌を含んでいた可能性があるという。

次に神宮文庫本系統だが、これについては角田氏がその諸伝本を字母のレベルで細かに検討してその先後関係を明らかにしている。そしてその中でも古態を保つと見られる書陵部蔵(五一・二)本では、冒頭から五三番歌までと、五四番歌以降では仮名の字母に相違が見られ、五三番歌と五四番歌の間に形成段階の区切れがあるとする。そして以下に掲げる神宮文庫本系統の巻末三首について、

おなじ比、みちの国へくだる人に、「いつばかり」ととひしかば、「けふあすものぼらん」といひしかば
(唐草なし、神宮 67、静嘉 85、承空 78、書乙 77、正保 76)

などいひてうせにけり。のちを、いかにもする人やなかりけん、あやしくてまろびありきけり。あはでかたみにゆきてける人の、思ひもかけぬ所に、歌よむこゑのしければ、おそろしながら、より、きけば
(神宮 68 / 他本なし)

秋風のふくたびことにあなめくをのとはなくて薄おひけり
ときこえけるに、あやしとて、草の中をみれば、小野小町がすゝきのいとをかしうまねきたたりける。それとみゆるしるはいかゞ有けん。

冬、みちゆくひとの、いとさむげにてもあるかな、よこそはかなけれといふをきゝて、ふと
手枕のひまの風だにさむかりき身はならはしものぞざりける
(『拾遺集』 9 詠人不知 / 神宮 6、他本なし)

これらは小町の陸奥国における落魄流離と死を語る一連の歌物語的部分と解されることが多かったが(注一六)、書陵部蔵(五一・二)本では、六九番歌の詞書の「冬みちゆくひとの」以下がそれ以前の部分から一行空けて独立したかたちで記されていることを指摘する。これは六九番歌の詞書「冬、みちゆくひとの」以下が前の部分とは内容的に連続していないこと、あるいは時代が下ってから一首のみ巻末に増補されたことを示している。

③歌仙家集本系統、神宮文庫本系統の構造

以上の成果を踏まえたうえで、歌仙家集本系統の構造を示せば以下のようになる。

第一部 承空本系統一〇四六番歌、書陵部乙本系統一〇四五番歌、正保本系統一〇四四番歌

『古今集』『後撰集』で小野小町の作となっている歌、及びその贈答歌を中心として構成された部分。『古今集』で題不知となっている小町詠にも詞書が附されており、歌物語的ともいってよい部分である。四十六首中三十二首に詞書が附され、小町をめぐる恋の状況が描き出

されている。その例を以下に掲げよう。(以下の二例の引用はいずれも、もつとも古態を示す承空本による)

人ト物イフトテアケシツトメテ、「カバカリナガキヨニナニゴトヲヨモスガライヒアカシツルゾ」トアイナウトガメシ人ニ

秋ノヨハナノミナリケリアヒトアヘバコトゾトモナクアケヌル物ヲ

〔古今集〕恋三⁶³⁵小町／唐草³⁶、神宮¹⁰、静嘉¹⁸、承空¹⁰、書乙¹⁰、正保¹⁰

返事

ナガシトモオモヒゾハテヌムカシヨリアフ人カラノ秋ノヨナレバ

〔古今集〕恋三⁶³⁵凡河内躬恒／唐草なし、神宮¹¹、静嘉なし、承空¹¹、書乙¹¹、正保¹¹

この贈答は神宮文庫本系統にも見え、そこには詞書が附されていない。『古今集』恋三、六三五・六三六番歌として連続して配列された題不知の小町詠と躬恒詠を組み合わせたもので、二者の活躍年代や『古今集』の記述から虚構的な贈答と知れるが、歌仙家集本系統では長文の詞書を附し、この二首が交わされた状況を詳しく説明している。

次の例を見よう。

夢二人ノミエシカバ

オモヒツ、ヌレバヤ人ノミエツランユメトシリセバサメザラマシヲ〔古今集〕恋二⁵⁵²小町／唐草³³、神宮¹⁹、静嘉²⁸、承空¹⁶、書乙¹⁶、正保¹⁶

コレヲ人ニカタリケレバアハレナリケル事カナトアリシ御返事ニ

ウタ、ネニコヒシキ人ヲミテシヨリユメテフ物ハタノミソメテキ〔古今集〕恋二⁵⁵³小町／唐草なし、神宮²⁸、静嘉²⁹、承空¹⁷、書乙¹⁷、正保¹⁷

返事

タノマムトオモハジトテモイカゞセンユメテフホカニアフヨナケレバ

(唐草¹⁴、神宮²⁹、静嘉⁵¹、承空¹⁸、書乙¹⁸、正保¹⁸)

「オモヒツ」、「ウタ、ネニ」の二首は『古今集』恋二に連続して配列された小町詠だが、いずれも題不知で、本来連続していたものかどうか不明である。だがここでは二首が、夢に恋人が見えたというできごとの際して詠まれた、連続性を持った歌であることが示される。また「ウタ、ネニ」歌の成立に介在した「人」とのやりとりについても言及しており、小町を圍繞する人間関係も垣間見えるような仕組みになっている。

なおこの箇所に掲出された他人歌の可能性がある歌は、承空本七番歌(書乙七、正保七)の『古今集』の三国町歌、承空本三七番歌の『後撰集』の詠人不知歌(書乙三六、正保三六)、承空本三八番歌の『古今和歌六帖』の詠人不知歌(書乙三七、正保三七)、承空本四三〜四五番

歌として連続して配列された『古今集』の詠人不知歌（書乙四二～四四、正保四二、四三）のみである。

第二部 承空本系統四七～七七番歌、書陵部乙本系統四六～七八番歌、正保版本系統四五～七七番歌

そのほとんどが「出所不明歌」によって占められている部分であり、神宮文庫本系統の巻頭歌「あやめ草」歌から始まる。『古今集』所収の小町歌は次の一首しか含まれていない。

カギリナキオモヒノマニマヨルモコムメヂニサヘヤ人モトガメン

（承空）

〔古今集〕恋三⁶⁵⁷、小町／唐草³⁹、神宮²、静嘉^{8・20}、承空⁷²、書乙⁷¹、正保⁷⁰

この箇所は配列に神宮文庫本系統との共通性が見え、第一部に比べて詞書も少ない。詞書が附された歌は三十首中十一首にとどまる。異なる性格の資料からの抜き書きが付加された箇所と考えるべきであろう。その資料がいかなるものであったかは即断しがたいが、片桐氏以来指摘されてきたように、小町の歌として伝承されてきた歌々、ことに「出所不明歌」を、神宮文庫本系統やあとで見る唐草裝飾本と近似した配列で並べる『小町集』の一伝本であったと考えられる。

『古今集』『後撰集』所収歌を中心として構成された私家集に、方向性の違う資料からの抜き書きを増補するという構成は、平安期において他にも見られるものである（注一七）。藤原伊尹の私家集である『一条撰政御集』では、一～四一番歌までは伊尹を「くらはしのとよかげ」という「くちをしきげす」の色好みに仮託し、『伊勢物語』に影響を受けた詞書を附して歌物語的に構成している。そして四二番歌詞書「おなじおきなうたとてほかにみえしを、さかしらにつましけれどとて」以降は、一条撰政についての記述に敬語が用いられており、明らかに編集意識が異なる。「ほかにみえし」歌、即ちそれ以前の部分とは異なる資料からの増補と考えられる箇所である。

また冷泉家時雨亭文庫蔵の『小野宮殿集』は、一～六七番歌までの詞書の書き方は「おとこ」と第三人称化されており、内容は歌物語的である。そして、六八～七六番歌までの中務との贈答、元輔関係歌の後、七七～八四番歌までの部分は『清慎公集』の祖本から歌を増補している。七七番歌として『清慎公集』の巻頭歌を置き、それ以前の部分に見えない『清慎公集』の歌を抜き書きしており、詞書において詠み手は、それ以前に用いられていた「おとこ」ではなく「おとど」と表記されている。このようなテキストと同様の、編集意識の異なる他本による増補が、歌仙家集本系統の『小町集』においても行われたものと見てよい。

なお、『小町集』承空本の四七～七一（書乙四六～七〇、正保四五～六九）の中で、他人歌である可能性が考えられる歌は承空本七一（書乙七〇、正保六九）のみである。この歌は他の系統の伝本にも収載されているもので、『古今和歌六帖』に詠人不知歌として出てお

り『兼輔集』にも見える。ただし承空本七二〜七九番歌（書乙七一〜七八、正保七〇〜七七）はそれ以前と方向性が変わって、神宮文庫本系統には見えない『古今集』七九〇番歌の「小町姉」歌、『後撰集』二二六七番歌の「小町孫」歌という小町の縁者の歌を含んでいる点に注意される。この部分については、その前の部分とは異なる資料からの増補であるかもしれない。

第三部 承空本系統七八〜一〇一番歌、書陵部乙本系統七七〜一〇〇番歌、正保版本系統七六〜九九番歌

承空本一〇一番歌の左注と奥書によれば、ここまでが安元二（一一七六）年に筆写された『頭家三位自筆本』にあたる部分であり、院政期までには形を成していたと見られる。

この第三部以降の歌は重出歌を除き、神宮文庫本系統や後でふれる静嘉堂文庫本系統、そして唐草裝飾本に一切見られない。「出所不明歌」と、明らかに小町の歌とは見られない他人歌を中心に構成されており、『後撰集』の小町姉歌が承空本九一番歌（書乙九〇、正保八九）として載るほか、承空本の八八、九三、九五、一〇〇番歌（書乙八七、九二、九四、九九／正保八六、九一、九三、九八に対応）はいずれも『古今集』詠人不知歌であり、承空本一〇一番歌（書乙一〇〇、正保九九）は『古今集』の紀淑望歌である。

また、以下の一首は三条院に仕えた小大君の家集である『小大君集』に見えるほか、『榮花物語』「見はてぬ夢」巻では正歴五（九九四）年の疫病流行によって相次いで殿上人が亡くなった際に、藤原為頼とやりとりした歌として載る。『為頼集』にも小大君の詠として入っている。

ミシ人ノナクナリシコロ

アルハナクナキハカズソフオノナカニアハレイヅレノヒマデナゲカン

（承空）

『為頼集』²⁶（「小おほきみ」の歌）、林家本『小大君集』¹²⁰／冷泉、神宮、静嘉なし、承空⁸²、書乙⁸¹、正保⁸⁰

この一首の存在から、第四部が歌仙家集本系統の『小町集』に付加された時代が早くとも十世紀末であることが知られる。

第四部 承空本系統二〇二〜一一八番歌、書陵部乙本系統二〇一〜一一一番歌、正保版本系統二〇〇〜一一〇番歌

安元二年以降、「他本歌十八首」という注記を附して載せられた増補部分の歌だが、実際には十七首しかない。この部分の重出歌や他人歌を削除したと見られる書陵部乙本系統・正保版本系統は、注記を「他本歌十一首」としている。この第四部に収められている『古今集』の小町歌は次の一首で、猿丸太夫の家集である『猿丸集』に存する旨の詞書が附されている。だが現行の『猿丸集』にこの歌は見えない。

サルマロマチ君ノ集ナル哥

アハレテフコトコソウタテヨノ中ヲ思ハナレヌホダシナリケレ

〔古今集〕雑下⁹³⁹、小町ノ唐草、神宮、静嘉なし、承空¹¹⁷、書乙¹⁰⁸、正保¹⁰⁷〕

(承空)

この「アハレテフ」歌は他系統の『小町集』に一切見えず、また『古今集』の中でも元永本では詠人不知とされている。『小町集』の初発の時点では、この「アハレテフ」歌が詠人不知歌であった『小町集』が用いられていた可能性が高い。しかしこれを小町の作とする資料を用いて補ったのだろう。

それ以外の歌は「出所不明歌」か明らかな他人歌で、ことに以下の一首は『萬葉集』にも見え、『拾遺集』に人麿作として載せられている歴史の古い伝承歌である。

アカ月ノアリアケノ月ノアリツ、モキミシキマサバマチコソハセメ

〔萬葉集〕卷十²³⁰⁴／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹⁰⁶、書乙¹⁰²、正保¹⁰¹〕

(承空)

また『古今集』仮名序において「采女の、戯れより詠みて、この二歌は、歌の父母の様にてぞ、手習ふ人の、初めにもしける」と評された『萬葉集』三八〇七番歌もここに収められている。

アサカ山カゲサヘミユル山ノ井ノアサクハ人ヲオモフモノカハ

〔萬葉集〕卷十六³⁸⁰⁷／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹⁰⁷、書乙¹⁰³、正保¹⁰²〕

(承空)

そのほかの他出としては、承空本の一〇五、一一二、一一五、一一六、一一八番歌(書乙一〇一、一〇六、一〇八、一一二／正保一〇一、一〇五、一〇七、一一〇に対応)が『古今集』詠人不知歌、承空本の一一一番歌(書乙一〇五、正保一〇四)が『重之集』所収歌、承空一一三番歌(書乙一〇七、正保一〇六)が『伊勢集』所収歌となっている。作歌状況を示す詞書が附された歌は三首あるが、そのうち二首は第一部、第二部との重出歌であり、ここで新たに登場する歌の中で詞書を持つ歌は一首ということになる。

第五部 承空本系統一一九〜一二五番歌、書陵部乙本系統一一二〜一一六番歌、正保版本系統一一一〜一一五番歌

安元二年以降、「小宰相本」から増補された部分である。書陵部乙本系統・正保版本系統の諸伝本には「小相公本」とある。「出所不明歌」および『古今集』の詠人不知歌(承空一二二、書乙一一四、正保一一三)から構成されるが、末尾の一二五番歌、

ハナサキテミナラヌモノハワタツミノカサシニサセルオキツシラナミ

〔後撰集〕離別羈旅¹³⁶⁰、小町ノ唐草、神宮、静嘉なし、承空¹²⁵、書乙¹¹⁶、正保¹¹⁵〕

(承空)

は『後撰集』の小町歌であり、『後撰集』にまだ小町の歌があるのに気付いて付加されたものかと考えられる。詞書が附された歌はない。

以上のように、第一部において顕著であった所収歌に詞書を附して小町の人生の場面場面を描き出そうとする意識は第二部以降希薄になり、その代わりに明らかな他人歌の比率が増加して行くことが知られる。ただし第六部には、

ハカナシヤワガ身ノハテヨアサミドリノベニタナビクカスミトオモヘバ

(承空)

(唐草、神宮、静嘉なし、承空¹²³、書乙¹¹⁵、正保¹¹⁴)
という死を見据えた歌も増補されており、第一部に描き出された恋の諸相のさらに先、小町の晩年を想起させる歌を配置しようとする意識も窺える。なお、この「ハカナシヤ」歌は十三世紀初頭に成立した『新古今集』に小町の歌として入集しており、最低でもそれ以前には「ハカナシヤ」歌を含んだかたちの『小町集』が成立していたことが知られる。

次に神宮文庫本系統の構造を示そう。

第一部 一〇五三番歌

『古今集』『後撰集』の小町詠と「出所不明歌」から成る部分。明らかな他人歌は存在しない。

第二部 五四〇六二番歌

角田氏が指摘するように、それ以前とは字母が異なる部分。第一部に付加された増補部分か、あるいは第一部とは異なる資料に拠った箇所と考えられる。この箇所もまた『後撰集』の小町歌と「出所不明歌」によって構成される。六二番歌のみ、歌仙家集本系統の第二部にも出ていた、『古今和歌六帖』詠人不知歌、『兼輔集』所収歌として他出が見られる一首となっている。第一部と構成意識の上で大きな差異はない。

第三部 六三〇六九番歌

第二部のさらなる巻末増補と見られる部分で、『古今集』『後撰集』の小町詠は一首も含まれておらず、巻末三首には長文の詞書が附されている。十世紀の後半に活躍した馬内侍の歌(六三〇)、馬内侍と交流のあった村上天皇の女御・齋宮女御の歌(六五〇)を含むことから、この時期以降の増補である。その下限は十二世紀前半であろう。先に掲げた六八番歌(「あなめ」の歌)が、十二世紀前半に成立した『和歌

童蒙抄』に「小野小町集にあり」とされているからだ。なお巻末歌は『拾遺集』九〇一に詠人不知として載り、『古本説話集』の「曲殿姫君事」、これと同内容の『今昔物語』巻十九、本朝仏法部の「六宮の姫君の夫出家する語第五」に、零落した姫君の末期の詠として見える。女性の落魄譚と深い関わりを持った一首といえる。

二、異本「小町家之集」と静嘉堂文庫（一〇五・三）本

そのほか、前田善子氏の『小野小町』（三省堂、一九四三年）は、歌仙家集本系統とも神宮文庫本系統とも異なる形態をもつ、前田氏蔵の異本「小町家之集」（現在所在不明）の存在を報告している。

これは六七首から成る本体部分のあとに「乍入撰集漏家集哥」として、本体部分に収載されていない勅撰集所載の小町詠を計二十三首載せたもので、その本体部分には歌仙家集本系統の承空本七七番歌（書陵部乙本系統七六、正保版本七五）番歌以降の歌が一首も入っていない。また歌仙家集本系統には見えない歌々として、「おとこのわすれけるに、あまになりて津の国にはのみつのうらといふところにすみてありける／我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき／かへし／なにはがたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかはみる」という『古今集』雑下九七三・九七四の贈答、「月みれば月はなかなばになりけり月みたばまた月はたらじな」「たれによりよるの衣をかへすらんこひしき人のありけるがうさ」という、「出所不明歌」が挙げられている。

ただし歌の配列や詞書に歌仙家集本系統と等しい部分が散見されることから、前田氏はこれを歌仙家集本系統の「増補される以前の可成り古い時代の一形態」で、歌順が相違する部分は「原本が一度ばらばらになり再びとじ合わせるとき、紙の順序をあやまってこういう形になった」と説明する。

この本は以降、所在が不明となつてしまい、後続の研究において積極的に取り上げられることはなかった。だがこの本と同系統の静嘉堂文庫（一〇五・三）本（以下、静嘉堂文庫本）が、二〇〇〇年に『静嘉堂文庫新収古典籍マイクロフィルム』として公開され、角田宏子氏によつてその本文や配列についての検討が進められている（注一八）。これはマイクロフィルムの解説によれば江戸前期の書写であり、八条宮桂光院智仁親王（一五七九―一六二九）筆である旨の極札があるが、その真偽のほどは疑わしいという。

前田氏の『小野小町』に引かれた異本『小町家之集』本を静嘉堂文庫本と比較すると、異本『小町家之集』は『古今集』恋四、七九七番歌として載る次の小町歌を欠く。

人のこゝろかはりける比

色みえでうつろふ物は世中の人の心の花にぞありける

(静嘉 32 / 『古今集』恋四 79)

この歌は卷末の「被入撰集漏家集」に見えず、「被入撰集漏家集」が付された時点では存在していたものと考えられるから、形態としてはこの歌を持つ静嘉堂文庫本の方が古態を留めていると言えよう。

そして、この静嘉堂文庫本の配列を歌仙家集本系統の古態をとどめる承空本七六番以前の配列と比較すると次頁のようになる。

静嘉堂文庫本	承空本
1	1
2	2
3	3
4	4
5	5
6	6
×	7
7	8
9	9
16	10
17	11
18	12
×	13
19	14
21	15
28	16
29	17
51	18
30	19
32	20
33	21
37	22
38	23
42	24
39	25
40	26
(38)	27
41	28
44	29
45	30
46	31
47	32
×	33
48	34
65	35
66	36
49	37
54	38

静嘉堂文庫本	承空本
×	39
63	40
64	41
10	42
×	44
×	45
×	46
11	47
22	48
15	49
23	50
24	51
25	52
26	53
27	54
34	55
35	56
36	57
50	58
×	59
53	60
55	61
56	62
57	63
58	64
59	65
60	66
61	67
62	68
67	69
68	70
43	71
8、20	72
×	73
×	74
×	75
52	76

前田氏も指摘するように、静嘉堂文庫本の本体部分の配列には歌仙家集本系統との共通点が散見される。静嘉堂文庫本には歌仙家集本系統

の第一部に連続して置かれた『古今集』詠人不知歌（承空四三〜四五、書乙四二〜四四、正保四二・四三）が見えない。だが一〜九番歌、一六〜二一番歌、二八〜四八番歌、二二〜二七番歌、四四〜四七番歌、五〇〜六二番歌といった数首単位での纏まりで歌仙家集本系統の配列との共通がみられる。

また、詞書も類似している。たとえば静嘉堂文庫本の一〜六番歌を掲げると、以下のようになる。

花をながめて

花の色はうつりにけりないたづらにわがみ世にふるながめせしまに

（静嘉1）

ある人の心うく見えしに

心からうきたる舟にのりそめてひとひも波にぬれぬ目ぞなき

（静嘉2）

あるおとこの前わたりするに

空をゆく月のひかりに雲晴てまたややみにて世をやへぬべき

（静嘉3）

いかなりしおりにか又

雲はれておもひいづれど言のはのちれるなげきは面かげもなし

（静嘉4）

たいめしぬべきやと人のいひたるに

みるめかる蟹の行かふみなどぢになこそその関も我はずへぬを

（静嘉5）

女郎花をいとおほくおりて見する人に

名にしおはづなをなつかしみ女郎花おられにけりなわが名たてに

（静嘉6）

次に承空本の一〜六番歌である。

ハナヲナガメテ

花ノ色ハウツリニケリナイタヅラニワガ身ヨニフルナガメセシマニ

（承空1）

アル人コヽロカハリテミエシカバ

コヽロカラウキタルフネニノリソメテヒトヒモナミニヌレヌヒゾナキ

（承空2）

マヘヨリワタリシ人ニタレトモナクテトラセシ

ソラユクトキケドモ月ノクマモナミミデヤヽミニテヨヲハヘヌベキ

（承空3）

アシタニアリシニマタカヘシ

クモハレテオモヒヤレドモコトノハノチレルナゲキハオモカゲモナシ

(承空4)

タイムンシヌベクヤトアレバ

ミルメカルアマノユキクルカヨヒヂニナコソノセキモワレハスヘヌ^ヲ

(承空)

5)

ヲミナヘシイトオホクオリテミルニ

ナニシオヘバナヲナツカシミヲミナヘシオラレニケリナワレガナダテニ

(承空6)

配列は一致し、本文には細かな差異があるものの、詞書の内容は承空本が四番歌を三番歌の返歌として位置付ける以外、おおよそ類似している。

このような静嘉堂文庫本と歌仙家集本系統には、共通祖本が存在した可能性が考えられる。それは、『古今集』『後撰集』の小町詠を中心とする第一部に、神宮文庫本系統や唐草裝飾本系統に近い配列をもつ別の『小町集』からの抜書きを附した、歌仙家集本系統の配列と共通したものであつたらう。そこにさらなる増補や校合が加えられたのが歌仙家集本系統であり、いっぽう共通祖本の流れを引く本が、書写、流布の過程で錯簡を起こした結果、静嘉堂文庫本が成立したものと考えられる。

現存する歌仙家集本系統の『小町集』の冊子がばらばらになり、錯簡を起こすとともに後半部分が失われた可能性も否定できないが、承空本の歌番号で七七番歌以降の歌が一首も見えないという事実は、錯簡を起こす前の静嘉堂文庫本系統の原本にもそれらが存在していなかった可能性を示唆する。

三、唐草裝飾本について

①形態

さて、以上が唐草裝飾本の公開以前から知られていた伝本であるが、次に唐草裝飾本を見てゆこう。

この本は古くから存在が知られていたが、その全容が公開されたのは冷泉家時雨亭叢書『平安私家集 七』(朝日新聞社、一九九九年)におい

てである。これは『小町集』伝本の中で最も歌数が少なく、四五首の歌から構成されており、平安後期の書写である。冷泉家には『小町集』と同様の装丁がなされた、同時に制作されたと考えられる写本として遍昭、素性、兼輔、宗于、高光という三十六歌仙の歌集が伝来している。よって本来は三十六人集として一括制作されたものと見られる。

書写者については長らく「伝源俊頼筆」とされてきたが（注一九）、奥書には「権中納言殿」とある。春名好重氏（注二〇）によれば、唐草装飾本『遍昭集』の奥書にも「上西門院越前、権中納言殿」という記述が見える。現在はこの箇所が脱丁してしまっているので現物を確認する事は不可能であるが、この記述を信用するならば唐草装飾本『小町集』もまた、「上西門院」の女房である「越前」が「権中納言殿」に贈ったものということになる。上西門院は鳥羽天皇の皇女、統子内親王で文治五（一一八九）年に薨じているから、唐草装飾本『小町集』が書写されたのはそれ以前であろう。

この唐草装飾本の私家集諸本には俊成、定家、為家の手になる書き入れや享受の痕跡が一切見られない。そのようなことから、片桐洋一氏による唐草装飾本の解題は、これらが制作された後かなりの期間、冷泉家以外の場所に蔵されていたのではないかと推測する。首肯すべきだろう。赤瀬信吾氏（注二一）によれば、時雨亭文庫蔵書のかなりの部分は二条家、三鈷寺、三井寺理覚院から流入した書物であり、また冷泉家は大納言を極官とする納言家であり、権力者が写本を求めた際、それを拒絶する事は難しかった。また生計が苦しい時には、家を存続するべく豪華な装飾を施した写本が手放されたこともあったという。このような状況下で、冷泉為相の時代から唐草装飾本が守り続けられてきた可能性は低い。

さて、この唐草装飾本について特筆すべきことは、巻頭歌は神宮文庫本系統同様の「あやめ草」歌であり、詞書が少なく和歌中心で、明らかな他人歌が少ないという構成も似通っているということだ。また神宮文庫本系統同様に、歌仙家集本系統の承空本七九番歌以降の歌は一切収められていない。以下に、唐草装飾本の配列を柱とし、他の系統の伝本の配列比較を示したものを附したので、ご参照願いたい。

初句	唐草	神宮（第二部所載の歌にアミカケを施した）	承空（第二部所載の歌にアミカケを施した）	静嘉	平安期の他出
あやめ草	1	1	47	11	
わびぬれば	2	31	39	×	古今小町 938
いつはとは	3	×	43	×	古今詠人不知
みるめなき	4	6	23・27	38	古今小町 623
おろかなる	5	4	41	64	古今小町 557
いまはとて	6	32	32	47	古今小町 782
我人を	7	51	28・77	41	
よひよひの	8	59	30	45	
よそにこそ	9	8	9	9	
人しれぬ	10	13	50	23	
こひわびぬ	11	9	51	24	
こがらしの	12	18	53	26	
夏のよの	13	20	54	27	
たのまじと	14	29	18	51	
つまこふる	15	34	60	53	
秋のたの	16	44	62	56	
山ざとの	17	49	10	16	
かすみたつ	18	×	64	58	
むすびきと	19	45	8	7	
なにはめに	20	46	65	59	
人かとも	21	48	66	60	
むかしには	22	53	67	61	
なにしおへば	23	56	6	6	
なみのまも	24	57	68	62	
ひさかたの	25	58	69	67	
千はやぶる	26	61	70	68	
たまのみづ	27	62	71	43	六帖・兼輔集
くもはれて	28	38	4	4	
みるめあらば	29	39	41	10	
露のみは	30	5	49	15	

初句	唐草	神宮 (第二部所載の歌にアミカケを施した)	承空 (第二部所載の歌にアミカケを施した)	静嘉	平安期の他出
いろみえで	31	35	20	32	古今小町 797
花のいろは	32	27	1	1	古今小町 113
おもひつゝ	33	19	16	28	古今小町 552
わたつうみの	34	17	22	37	
みるめかる	35	60	5	5	
秋のよは	36	10	12	18	古今小町 635
人にあはん	37	12	24	42	古今小町 1050
うつゝには	38	14	14	19	古今小町 656
かぎりなき	39	22	72	8, 20	古今小町 657
ゆめぢには	40	21	25	39	古今小町 658
あまのすむ	41	7	15	21	古今小町 727
いとせめて	42	30	19	30	古今集 554
たれにより	43	×	×	31	
つゝめども	44	3	40	63	古今安倍清行 556
おろかなる	45	4	41	64	古今小町 557

すると、唐草装飾本が保有している他人の歌である可能性が考えられる歌は、『古今集』詠人不知歌である三番歌、そして『古今和歌六帖』に詠人不知歌として載り、『兼輔集』にも見える二七番歌のみである。前者は歌仙家集本系統の承空本系統、書陵部乙本系統にも見える歌、後者は神宮文庫本系統をはじめとする他の伝本にも入っているものである。神宮文庫本系統同様の、他人歌を極力採歌しない方針をここにかがうことができる。

次に配列だが、唐草装飾本は巻頭付近（二、四く六番歌）と後半部（三一く三三、三六く四二、四四・四五番歌）に『古今集』所載の小町歌や小町の贈答相手の歌を集中させ、七く三〇番歌に「出所不明歌」を集中させる。「出所不明歌」歌群を、『古今集』の小町歌関係歌群で挟み込むような構造になっているのだ。そこに形成段階の区切れや依拠資料の相違を見ることが可能かもしれないが、特筆すべきはこの中の一六番歌から二七番歌までの歌順が、途中抜けもあるものの神宮文庫本系統第一部の四四く五三番歌、第二部の五六く六二番歌と共通するということだ。ことに唐草装飾本の一九・二〇番歌、二三く二五番歌、そして二六・二七番歌の配列はそれぞれ神宮文庫本系統四五・四六番歌（第一部）、五六く五八番歌（第二部）、六一・六二番歌（第三部）の配列と一致する。撰集に共通の資料が用いられたか、二伝本が共通の祖本から発し、時代が下ってからふたたび接触して現行の形へと展開した可能性を考えることができる。

また巻末の四首（四二く四五番歌）には、すでに角田宏子氏（注二二）も指摘しているところだが、静嘉堂文庫本系統と近縁関係にある伝本、あるいは静嘉堂文庫本の撰歌資料となった資料との影響関係が見て取れる。唐草装飾本の四二番歌は、『古今集』恋二、五五四番歌に小町詠として収められている以下の一首である。

いとせめてこひしき時はあはぬまの衣をかへしてぞきる

（唐草）

『古今集』恋二⁵⁵、小町／承空¹⁹、書乙¹⁹、正保¹⁹／唐草⁴²、神宮³⁰、静嘉³⁰

『古今集』ではこの歌に返歌は存在しないが、唐草装飾本では以下の歌がその返歌として置かれている。

かへし

たれによりよるのころもをかへすらんこひしき人のありけるがうさ

（唐草）

（承空、書乙、正保なし／唐草⁴³、神宮なし、静嘉³¹）

この「たれにより」歌は『小町集』のなかでは、「いとせめて」の歌の返しとして、他に静嘉堂文庫本にのみ見られる歌である。また唐草装飾本と静嘉堂文庫本の共通点は、これに続く四四、四五番歌の贈答の詞書にも見られる。

しもついでも寺に人のしけるわざのけうげのことばおかきてあべのきよゆきがおくりて侍
つゝめどもそでにとまらぬしらたまは人をみぬめのなみだなりけり

(唐草)
『古今集』恋二⁵⁵、安倍清行／唐草⁴⁴、神宮³、静嘉⁶、承空⁴、書乙³、正保³

かへし

おろかなるなみだぞゝでにたまはなす我はせきあへずたぎつせなれば

(唐草)
『古今集』恋二⁵⁵／唐草⁵、45、神宮⁴、静嘉⁶、承空⁴、書乙⁴、正保⁴

はしにもあれども

この二首は『古今集』恋二、五五六・五五七番歌として載る安倍清行と小町との贈答である。このうち四五番歌の「おろかなる」歌は、唐草装飾本では五番歌としても出ているが、そこに詞書は附されておらず、「つゝめども」歌の返歌としても位置づけられてもいない。しかしここでは、「しもついでも寺に人のしけるわざのけうげのことばおかきてあべのきよゆきがおくりて侍」という詞書が附された「つゝめども」歌に続けて「おろかなる」歌が置かれている。卷末増補と見るべき部分である。

そして「つゝめども」歌の詞書は、『古今集』では「下出雲寺に人の業しける日、真静法師の、導師にて言へりける言葉を、歌によみて、小野小町がもとに遣はせりける」なのだが、歌仙家集本系統の『小町集』諸伝本ではこの歌の詞書は「あべのきよゆきがゝくいへる」で、神宮文庫本系統では「つゝむことはべるべき夜 むねゆきの朝臣」となっており、『古今集』や唐草装飾本のそれとは大きく食い違っている。だが静嘉堂文庫本では以下のようにあり、『古今集』や唐草装飾本の詞書と近似している。

しもついでも寺に人のしけるわざしけるにかのけうげのこと葉をよみてあべのきよゆきにをくりける

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬめの涙なりけり

かへし

をろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧津せなれば

(静嘉⁶)

なお、『古今集』と唐草装飾本、静嘉堂文庫本系統の詞書を比較してみると、『古今集』が「真静法師の導師にて言へりける言葉」としている部分を、唐草装飾本、静嘉堂文庫本は「けうげのことば」としている。この「けうげ」とは「教化」であり、『仏教大辞典』(注二三)によれば「説法教導して衆生を化益すること、あるいは「法要中に誦唱する歎徳文の稱」を示す語である。唐草装飾本や静嘉堂文庫本はこの語を「説法」の意で用いているのだろう。唐草装飾本と、静嘉堂文庫本系統のあいだに、このような他に見られない表現の一致が存在する点に

注意しておきたい。この二伝本の成立に関わった資料に、何らかの関係が存在した可能性が考えられるのである。

ただし、神宮文庫本系統や静嘉堂文庫本系統、そして歌仙家集本系統が掲出している以下の『後撰集』の小町歌及び小町関係歌を、唐草装飾本はいっさい有していない。(以下に掲げる歌の引用は『後撰集』に拠った)

男の気色をやうくつらげに見えければ

心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞなき (『後撰集』恋三⁷⁷⁹、小町／唐草なし、神宮⁴、静嘉²、承空²、書乙²、正保²)

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲き (『後撰集』雜一¹⁰⁹⁰、小町／唐草なし、神宮⁵²、静嘉⁴⁸、承空³⁴、書乙³³、正保³³)

いその神といふ寺にまうでて、日の暮れにければ、夜明けてまかり帰らむとて、とまりて、「この寺に遍昭侍り」と人の告げ侍ければ、物言ひ心見むとて、言ひ侍りける 小野小町

岩の上に旅寝をすればいと寒し昔の衣を我に貸さなん (『後撰集』雜三¹¹⁹⁵、小町／、唐草なし、神宮⁵⁴、静嘉⁶⁵、承空³⁵、書乙³⁴、正保³⁴)

返し

世をそむく昔の衣はたゞ一重貸さねば疎しいざ二人寝ん (『後撰集』雜三¹¹⁹⁶、僧正遍昭／唐草なし、神宮⁵⁵、静嘉⁶⁶、承空³⁶、書乙³⁵、正保³⁵)

海のほとりにて、これかれ逍遙し侍けるついでに

花咲きて実ならぬ物はわたつうみのかざしにさせる沖つ白波 (『後撰集』離別羈旅¹³⁶⁰、小町／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹²⁵、書乙¹¹⁶、正保¹¹⁵)

また、『後撰集』以降の勅撰集に見える他人歌や詠人不知歌、十世紀の半ば以降の歌人の詠である他人歌も一切収められていない。このような『小町集』伝本は、現在唐草装飾本のほかに確認されていない。

② 先行研究

このような唐草装飾本について片桐洋一氏の解題(注二四)は、『小町集』が『後撰集』から小町関係歌を採歌する以前に唐草装飾本の原本が形をなしていた、と見、その始発は以外に古い、とする。すなわち、他の系統の伝本よりも原本の成立が遡る可能性があるというのである。先に述べたように、片桐氏は、歌仙家集本系統よりも詞書や他人歌が少なく、よりシンプルに構成された神宮文庫本系統のほうが『小町集』の原型に近いという見解を提示したうえで、歌仙家集本系統の第一部成立後に神宮文庫本系統に近い本からの増補が行われた可能性を示

していた。こうした氏の『小町集』観から考えるに、片桐氏は唐草裝飾本を神宮文庫本系統よりもさらに原型に近いものと捉え、そこに『後撰集』の小町歌が増補されたのち、神宮文庫本系統、歌仙家集本系統が生まれたと見ているのだろうか。

ただし、こうした歌仙家集本系統と神宮文庫本系統の先後関係、増補関係には島田良二氏（注二五）によって疑義が唱えられている。島田氏の論は唐草裝飾本が公開される以前のものだが、『古今集』『後撰集』の小町の歌や伝承歌を加えて成立した祖本『小町集』を材料にして歌仙家集本系統、神宮文庫本系統が成立したとし、前者が歌物語的な姿勢で前半四十首ほどを構成する『遍昭集』『猿丸集』や雅平本・尊経閣本『業平集』と同じ姿勢の集であるのに対し、後者は歌そのものを中心に置いて構成した正保版本『業平集』のような集と見ている。そして歌仙家集本系統の第一部、第二部が先に成立し、そこから不純歌が脱落ないし削除され、和歌中心に配列が変更された可能性もあるとする。この場合、歌仙家集本系統のほうが部分的に、神宮文庫本系統よりも共通祖本のおもかげを留めているということになる。

そのような観点から武田早苗氏（注二六）は、唐草裝飾本と歌仙家集本系統、神宮文庫本系統の三伝本を対照し、先に掲げた歌仙家集本系統の第一部の中でも書陵部乙本系統の二四〇番歌までの部分がその共通祖本にあたるのではないかと述べる。この部分は『古今集』『後撰集』の小町歌を中心とした部分だが、『古今集』の詠人不知歌がみえないのに対し、『後撰集』の詠人不知歌が二首入っている。そのようなことから『後撰集』というテキストとの結び付きは『古今集』ほど堅固でないという。

そして武田氏は、この部分に増補や削除といった操作が行われた結果成立したのが唐草裝飾本で、そこからさらに神宮文庫本系統が生まれたとし、この二伝本を同系統のものと考える。なお、唐草裝飾本が『古今集』の小町詠を十八首中十三首採っているのに、『後撰集』の歌が一首もないことから、唐草裝飾本は『古今集』とのみ関わり、『後撰集』とは直接関わらず成立したとする。

そしてまた、歌仙家集本系統の第二部として付加された別本『小町集』について、片桐氏は神宮文庫本系統に近いものと見るが、むしろそれは部分的に唐草裝飾本のものであった可能性もあるとする。そしてその理由として、歌仙家集本系統第二部と神宮文庫本系統、唐草裝飾本の配列を比較すると、神宮文庫本系統では部分的に歌順に乱れが生じているが、唐草裝飾本では間は多少抜けるものの、順に番号が並んでいること、歌仙家集本系統と唐草裝飾本が共通して有する以下の一首が神宮文庫本系統には見られないことを挙げる。

かすみたつのをなつかしみはるこまのあれても君かみゆるころ哉

（唐草）

（唐草 18、神宮なし、静嘉 58、承空 64、書乙 63、正保 62）

いっぽう角田宏子氏（注二七）は唐草裝飾本と神宮文庫本系統との配列の近似性を重視しているが、武田氏のように歌仙家集本系統の第一部から唐草裝飾本へ、という流れは考えておらず、歌仙家集本系統に対する異本系統として唐草裝飾本、神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本を位

置付けている。

角田氏は、『小町集』はその始発の段階において複数存在し、その中に歌仙家集本系統の第一部や唐草装飾本が存在していたとする。そして唐草装飾本が『後撰集』の歌を持っていない理由を、採歌時期にのみ帰すものではなく、歌物語的な『後撰集』の歌を取り込まずに『古今集』所載歌を主体にしたためだとする。なお、唐草装飾本の二二、二〇、二七、四〇、四四番歌の本文には歌仙家集本系統の承空本系統や静嘉堂文庫本と共通する要素があると指摘し、これらの伝本との接触の可能性を示している。

四、唐草装飾本の検討―歌の増補、歌句の改変という視点から―

①「漕ぐ舟」関係歌、歌句の欠落

以上のように指摘されているが、論者は唐草装飾本を、その原本が現存する『小町集』の中では最も古い時代に成立したもので、その撰集に用いられた資料は神宮文庫本系統や静嘉堂文庫本系統、歌仙家集本系統の第一部・第二部とある程度共通する資料を用いているため、配列に共通点が多いと考えたい。

この問題を考える上で手掛かりとなるのが、『小町集』諸本が伝える「出所不明歌」や他人歌の中には、『古今集』や『後撰集』の小町歌と共通する題材や表現を詠んだ歌が散見されるということだ。この問題については二章で詳述するが、本章で注目したいのは田中喜美春氏（注二八）の指摘である。田中氏は『後撰集』の小町詠、

定めたる男もなく、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のちをなみ世を海わたる我ぞ悲き

〔後撰集〕雑一¹⁰⁹⁰、小町／唐草なし、神宮⁵、静嘉⁴、承空³、書乙³、正保³）から、「漕ぐ舟」を詠んだ歌々が小町歌と認められるようになり、『小町集』に収められた、とする。田中氏が挙げる歌を承空本の本文で示しておく。

ワスレヤシニシトアル君達ノノタマヘルニ

ミチノクノタマツクリエニコグフネノホニコソイデネキミヲコフレド

コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ

…セニキルタツノ シマワタリ 浦コグフネノ ヌレワタリ イツカウキヨノ ミクサミノ ワガ身ニカケテ…

（唐草、神宮なし、静嘉⁵、承空³、書乙³、正保³）
（唐草、神宮、静嘉なし、承空⁴、書乙⁴、正保⁴）

アマノアマトウラコグフネノカヂヨリモヨルベナキミゾカナシカリケル

(唐草²⁵、神宮⁵⁸、静嘉⁶⁷、承空⁶⁹、書乙⁶⁸、正保⁶⁷)
(唐草、神宮、静嘉なし、承空⁷⁹、書乙⁷⁸、正保⁷⁷)

これらの歌のうち、唐草装飾本に見えるのは長歌のみで、そのほかの「漕ぐ舟」や、ひいては舟じたいを詠む歌さえも一切見られない。同様のことは神宮文庫本系統にも言える。先に掲げたように、武田氏は歌仙家集本系統の第一部の中でも承空本の歌番号で一〇四一番歌にあたる部分について、『後撰集』との結び付きが『古今集』ほど堅固でないと述べている。だが、こうした表現を軸にした歌の増補という視点からみるとその中にも、「漕ぐ舟」を詠む「ミチノクノ」歌(三八)が入っている。『後撰集』所収歌、ひいては『後撰集』の小町歌的なものと神宮文庫本系統の結びつきは、歌仙家集本系統よりも希薄だといえよう。

しかし、唐草装飾本では神宮文庫本よりもさらに『後撰集』の小町歌的なものとの隔たりが大きい。なぜなら神宮文庫本系統が有している『後撰集』の小町詠を持たないほか、唐草装飾本の伝えている長歌には「浦コグフネノヌレワタリ」という、舟の姿を詠む二句も存在していないからだ。以下に唐草装飾本の長歌の本文を掲げよう。

「あしたづの」などいひてかくれたるひとのあはれなるに

ひさかたの そらにたなびく うきぐもの うける我身は 露草の つゆの心も またきえて おもふことのみ まろこすげ しげさはまざる あらたまの とると月日は るの日の 花のほひも 夏の日の このした風も 秋のよの 月のひかりも ふゆのよのしぐれのおとも 世中に 恋もわかれも うきことも つらきをしれる 我みこそ 心にしみて そでのうへの ひるときもなく あはれなり かくのみつねに おもひつゝ いきのまつばら いたるよ ながらのはしの ながらへて せにゐるたづの なきわたり
いつかうきみの みくさみの 我みにかけて かけはなれ いつかこひしき くものうへの 人にあひみて このよには おもふことなき みとはなるべき

(唐草²⁵)

②『小大君集』所載の神宮文庫本系統『小町集』逸文との関係

現存する『小町集』伝本が伝える当該長歌の中に、この二句を欠いたものはない。ゆえに、これは一見、唐草装飾本が「うらこぐ舟のぬれわたり」の二句を脱落させた、あるいは意識的に削除したもののように見える。だが注意すべきは、寛和二年(九八六)頃、三条院に女蔵人として仕えた小大君の家集『小大君集』に、神宮文庫本系統に近い系統の『小町集』からの混入が見られ、その中に唐草装飾本同様「浦コ

グフネノ ヌレワタリ」の二句を欠いた長歌が存在するということだ。

『小大君集』の書陵部蔵(五〇一・九二)本系統では、他本から増補された部分を除く末尾が以下のようになっている(注二九)。書陵部蔵(五〇一・九二)本の本文をもって示そう。

「あしたづのくもゐのなかにまじりなば」などいひてうせたる人、あはれにおもほゆるころ
ながうた

ひさかたの そらにたなびく うきぐもの うけるわが身は つゆくさの つゆのいのちも たまきえて おもふことのみ もろこす
げ しげさぞまさる あらたまの ゆくとし月の 春の日は はなのほひも なつの日も このしたかげも 秋の夜の つきのひか
りも 冬のよの しぐれのおとも よのなかに こひもわかれず うきことは つらきもしらぬ わが身こそ ころろにしみて ぞで
のうらの ひるときもなく あはれなれ かくのみつねに おもひつつ いきのまつばら いきたる夜 ながらのはしの ながらへて
せにゐるたづの なきわたり つかうきよの みくさのみ わが身にかけて かけはなれ つかこひしき くものうへの 人とあ
ひ見て このよには 思ふことなき 身とはなるべき

(書陵部蔵(五〇一・九二)本『小大君集』¹⁴²)

(同¹⁴³)

(同¹⁴⁴)

(同¹⁴⁵)

よひくのゆめのたましひあしたかくありかでまたんとぶらひにこよ
みるめかるあまのゆききのみなとぢになこそせきもわれはすゑぬに

だいこの御ときに、日でのしければ、あまごひのうたよむべきせんじありて

ちはやぶる神もみまさばたちさわぎあまのとがはのひぐちあけたべ

(同¹⁴⁶)

やり水にさくらははなながるゝを見て

たきのみづこのもとちかくながれずはうたかたはなをありと見ましや

(同¹⁴⁷)

小大君 父母不詳

三条院春宮之時女蔵人左近

これに対して、神宮文庫本『小町集』の五人番歌から六二番歌は以下のようになっている。

あしたづの雲の中¹にまじりなばといひてうせにし人の、あはれにおぼえしころ

ひさかたの 空にたゞよふ うき雲の うける我身は 露くさの 露の命も まだきえて 思ふことのみ まろこすげ しげさはまさ

る あらたまの 行年月の 春の日の はなの匂ひも なつの日の 木の下風も あきのよの 月のひかりも 冬の夜の しぐれの音
も 世の中に 恋もわかれも うきことも つらきをしれる わがみこそ 心にしみて 袖のうらの ひる時もなく あはれなれ か
くのみつねに おもひつゝ いきの松ばら いきたるや ながらのはしの ながらへて せにゐるたづの なき渡り うらこぐ舟の
ぬれわたり いつかうきみの みくさみの わが身にかけて かけはなれ いつか恋しき 雲のうへの 人にあひみて このよには
おもふことなき 身とはなるべき (神宮58)

よひくゝに夢の手枕あしたかくありとて又もとぶらひにこよ

みるめかるあまのゆきゝのみなとぢになこそせきも我すへなくに (神宮59)

だいごの御時に、日でのしければ、あまこひのうたよむへきせんじに (神宮60)

千はやぶる神もみまさばたちさはぎあまのとがはのひぐちあけたべ (神宮61)

滝の水このもとちかくなかれすはうたかた花をあわとみましや (神宮62)

すると『小大君集』の末尾六首は、長歌の「うらこぐ舟の ぬれわたり」の有無のほか、長歌の後に一四三番歌として「おきのゐて身をやくよりもわびしきはみやこしまべのわかれなりけり」があること、「たきのみづ」歌（一四七番歌）に「やり水にさくらははなながるるを見て」という詞書が附されていること以外、神宮文庫本系統の『小町集』と共通する。ただし「たきのみづ」歌の詞書は神宮文庫本系統の他の伝本には存在しており、神宮文庫本が書写段階で脱落させたと見るのが妥当である。よって実質的な配列上の差異は、「おきのゐて」歌の有無のみといえよう。この部分、他の『小町集』伝本と比較すると次表のようになっており、神宮文庫本系統の配列が最も『小大君集』のそれに近いことがわかる。

第一句	小大君	神宮	承空／書乙／正保	唐草	静嘉
ひさかたの	142	58	69 ／ 68 ／ 67	25	67
おきのゐて	143	なし	31 ／ 30 ／ 30	なし	なし
よひくの	144	59	30 ／ 29 ／ 29	8	45
みるめかる	145	60	5 ／ 5 ／ 5	35	5
ちはやぶる	146	61	70 ／ 69 ／ 68	26	68
たきのみづ	147	62	71 ／ 70 ／ 69	27	43

これは『小大君集』の歌が『小町集』に混入したか、逆に神宮文庫系統に近い系統の現存しない『小町集』の歌が『小大君集』に混入した結果であると考えられるのであるが、石橋敏男氏（注三〇）以来指摘されてきたように、『小町集』の歌が『小大君集』に混入したと見るべきだろう。なぜなら、「おきのゐて」歌は現存する神宮文庫系統の『小町集』には存在しないが、『古今集』墨滅歌、一一〇四番歌において小町作とされている一首で、『小町集』の中ではほかに歌仙家集本系統の第一部に、承空本系統三二番歌（書乙・正保三〇）として見出される。また「ちはやぶる」歌は詞書によれば「だいの御時」に行われた雨乞いの歌だが、九世紀後半の小大君が醍醐天皇の治世にそのような行為を行うとは考え難い。よって、現行の神宮文庫本系統に非常に近い系統の『小町集』の混入と考えられる。おそらく神宮文庫本系統の古い伝本には「おきのゐて」歌が存在したが、書写過程で脱落して現在のようになつたのだろう。するとこの『小大君集』末尾に混入した『小町集』の逸文は、現存する神宮文庫本系統よりも古い姿を伝える、貴重な逸文ということになる。

このように考えると、本来は神宮文庫本系統においても長歌の本文は「うらこぐ舟の ぬれわたり」の二句を欠いていたということになる。こちらのほうが長歌の本文としては古態をとどめており、「うらこぐ舟の ぬれわたり」は後から挿入されたのではないか（注三二）。そして唐草装飾本がそのような長歌の本文を持っていることは、これが神宮文庫本系統と共通する何らかの資料をもとに撰歌を行っており、しかもその本文は現存する神宮文庫本系統よりさらに古態をとどめている可能性を示唆する。そして唐草装飾本が依拠した段階での資料は、い

まだ『後撰集』の小町詠の影響を受けていないものであったと考えられるのである。

③ 歌句の増補をめぐって

さて、当該長歌の「いつかうきみの みくさみの 我みにかけて かけはなれ」の前に「うらくぐ舟の ぬれわたり」の二句が増補された理由についても考えておこう。この問題を考える上でまず注意されるのは、「うらくぐ舟の」は『後撰集』に一〇九〇番歌として載る小町詠「あまの住む浦漕ぐ舟のかちをなみ世を海わたる我ぞ悲き」の第二句と一致しており、その下の「ぬれわたり」は、舟が濡れる、という点において『後撰集』に見える、もう一首の「舟」を詠む小町歌と共通するということだ。

男の気色をやうくつらげに見えければ

心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞなき

〔後撰集〕恋三⁷⁹、小町／唐草なし、神宮⁴⁷、静嘉²、承空²、書乙²、正保²

「浦こぐ舟の ぬれわたり」は、これらの歌の表現を利用した歌句なのではないかとも考えられるのである。

当該長歌は詞書から死者を追憶する内容であることが知られ、その冒頭四句では「ひさかたの そらにたなびく うきぐもの うける我身は」と、詠者の漂泊の感覚が提示される。第三句「うきぐも」第四句「うける」には「浮」のみならず「憂」という憂愁の意識も響かせられているよう。そしてこの後「世中に 恋もわかれも うきことも つらきをされる 我みこそ 心にしみて」「いつかうきみの みくさみの 我みにかけて かけはなれ」と、「浮／憂」き「身」の意識が繰り返し表出される。恋人と見られる相手への追憶からその半生、ことに恋愛生活の総括が行われ、その中で精神的、物理的に漂泊する「身」が表現されるのがこの長歌の特色である。そして最終的に「憂」き感覚から解き放たれ、「このよには おもふことなき み」となることを切望するのだ。

そしてこうした「浮／憂」き感覚は、以下に掲げる『古今集』雑下の小町歌に表現されていたものであった。

文屋康秀が、三河掾になりて、 県見には、え出で立たじやと、言ひ遣れりける返事に、よめる

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思

(古今)

〔古今集〕雑下⁹³⁸、小町／唐草²、神宮³¹、静嘉なし、承空³⁹、書乙³⁸、正保³⁸

また唐草裝飾本や神宮文庫本系統が巻頭歌として据える「出所不明歌」の「あやめ草」歌をはじめとして、『小町集』中にはこの感覚を詠んだものが少なくない。唐草裝飾本に見られる例だけでも以下のようにある。

あやめ草人にねたゆとおもひしは我身のうきにおふるなりけり

(唐草¹、神宮¹、静嘉¹¹、承空⁴⁷、書乙⁴⁶、正保⁴⁵)

人かともしられざりけりうたかたのうきにはいまやものわすれして

(唐草²¹、神宮⁴⁸、静嘉⁶⁰、承空⁶⁶・⁸⁷・¹²⁴、書乙⁶⁵・⁸⁶、正保⁶⁴・⁸⁵)

みるめあらばうら見むやはとあまとはどうかびてまたむうたかたのみも

(唐草²⁹、神宮³⁹、静嘉¹⁰、承空⁴²、書乙⁴¹、正保⁴¹)

これらの、おそらくは『古今集』九三八の「わびぬれば」歌を中心とした「浮／憂」をキーワードとする歌群の中に位置付けられる当該長歌の中に、「世を海わたる我」を「かぢ」を失って漂う舟によそえた『後撰集』一〇九〇番歌や、不如意な恋愛生活を「うきたる舟」にたとえる『後撰集』七七九番歌を元にした句を導入することで、当該長歌は表現のうえでも、主題のうえでもよりいっそう「小町的」な性格を帯びたものとなるだろう。

なお、唐草装飾本『小町集』が伝える当該長歌の中にも、「舟」を連想させる表現と見なされるものが存在する点、注意される。それが「いつかうきみの みくさみの 我みにかけて かけはなれ」の中の「みくさみ」を「かけ」る、という表現である。

この「みくさみ」は、本来は水辺に生える草という意の「みくさ」を指していたかもしれない。「みくさ」の語は『萬葉集』や『古今集』において、以下のように詠まれている。

昔者之 いにしへの 舊堤者 ふるきつみは 年深 としがふかみ 池之 激尔 いけの なぎさに 水草生家里 みくさ おひにけり

〔萬葉集〕卷三

春去者 はるさらば 水草之上尔 みくさのうへに 置霜乃 おくしもの 消乍毛我者 けつつちもあれは 戀度鴨 こひわたるかも

(同卷十)

わが門の板井の清水里とをみ人し汲まねば水草おひにけり

〔古今集〕神遊びの歌¹⁰⁷⁹

ただし今川良俊の『私説自見抄』に「わらでくむとは。わらをくみて。垣にもしき物にもするをいふと云々。俊頼抄にはみくみとも云り。又私に云。みくさみとて。小舟のはたにわらをくみて。浪をふせぐを云也。」とある。そしてこの「みくさみ」と同一のものと考えられるのが、『能因法師集』所載の「津のかみやすまさの朝臣となにはえに同船にて詠みける／みくさとぞかくべかりける難波潟船うつ浪にいこそねられね(神原家蔵『能因法師集』¹⁵⁵)」の「みくさ」、「漕ぐ舟」が詠まれた『小町集』の歌として田中氏が挙げる「コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ」の「にくさみ(にくさびとも)」である。

「にくさみ(び)」は『和歌初学抄』由緒詞には「海人船ニカケル物也」、「八雲御抄」卷第三に「海舟にかくる物也」と説明される。大槻文彦氏の『大言海 改訂版』(注三二)によれば、肥後の方言として残っているという。なお、十一世紀半ばごろの『夜鶴庭訓抄』には、「舟にはくさびといふ物候は。本体は竹にてうゑにわらしてしたる。」というものを材料に笛を作ったエピソードが記されている。この「くさび」も「みくさみ」「にくさみ(び)」を指しているのかもしれない。

以上のことから、「みくさみ」が藁を編んでつくられた敷物のようなもので、船と縁の深い語であったことが窺える。唐草装飾本の段階でそれは必ずしも船の存在を意識して用いられていなかったかもしれない。「みくさ（水草）」や藁の蓑、筵をわが身にかける、という意で詠まれていた可能性もある。だが、それが船の波よけである「みくさみ」「にくさみ」と解釈されるようになった結果、その上に「浦こぐ舟のぬれわたり」の二句を附して、よりわかりやすく、なおかつ「小町の歌」らしい表現へと改変することが意図されたのではないか。

五、『小町集』の「基幹部分」と十一世紀における享受

①『小町集』の「基幹部分」

以上見てきた四類六系統の『小町集』のうち、神宮文庫本系統、唐草装飾本、静嘉堂文庫本本体部分の歌数はいずれも歌仙家集本系統より四十首以上少ない。そしてこれらは共通して、歌仙家集本系統の承空本系統七九番歌（書陵部乙本系統七八、正保版本系統七七）以降の歌をいっさい掲出していない。これら三系統の伝本の撰歌資料は、ある程度共通していたのであろう。そこに三系統の共通祖本のようなものを想定することも可能である。

そして、唐草装飾本は全体の構成こそ和歌を中心に構成した神宮文庫本系統に似るが、歌物語的な静嘉堂文庫本系統と共通する「出所不明歌」や詞書の表現をも有している。そして、こうした二系統のあわいに位置するかのような伝本が、『後撰集』の小町歌や、『後撰集』の小町歌と共通する「漕ぐ舟」を詠む歌をいっさい持たず、また現存する神宮文庫本系統より古態を留める長歌の本文を有している点を重視すべきであろう。このことは、唐草装飾本がその撰歌資料ないし共通祖本の形態を、配列や本文においてある程度留めている可能性を示唆する。

おそらくはそのようなテキストから歌を取捨選択した結果、唐草装飾本、神宮文庫本系統の第一部・第二部、歌仙家集本系統の第一部・第二部（これは静嘉堂文庫本の原型でもある）が成立した。そして歌仙家集本系統の原本は、そこに唐草装飾本や神宮文庫本系統の編集のさいには用いられなかった資料から大量の歌を増補して、現行の歌仙家集本系統へと成長していったということになろう。

以上のことをふまえて、本論では現存する四系統六類が共通して有する承空本の一から七六番歌のうち、歌仙家集本系統のほか二系統以上の伝本に見える歌、ことに唐草装飾本に見える歌を『小町集』の「基幹部分」として重視したい。これらは、それが「出所不明歌」や勅撰集の詠人不知歌、他人歌であったとしても、比較的早い段階から小町の作として伝承されてきた歌と考えられる。

そして興味深いのは、こうした「基幹部分」の時点から存する歌の中に、唐草装飾本や神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本系統といった承空本

七九番歌以降の歌を持たないグループに属する伝本と、歌仙家集本系統の、ことに書陵部乙本系統や正保版本系統では大きな異同が存するものがあるということだ。これは『小町集』諸本が共通して用いた撰歌資料ないし共通祖本の面影を残すものとして重視すべきであろう。たとえば以下の「出所不明歌」。

つまこふるさをしかのねぞさよふけて我がたぐひはありとしるなる

(唐草 15、神宮 34、静嘉 53、承空 60、書乙 59、正保 58)

この「つまこふる」歌の、唐草装飾本、神宮文庫本、静嘉堂文庫本、承空本、書陵部乙本、正保版本の本文異同を、唐草装飾本を柱として示すと次表のようになる。

つまこふる	さをしかのねそ	さよふけて	我がたくひは	ありとしるなる	唐草
	さをしかのねに		我がたらひを	有としりぬる	神宮
つまあふる	さをしかのねに		わがたぐひをも	有としりぬる	静嘉
	サヲシカノネニ	ユメサメテ <small>サヨフケ</small>	ワレガタグヒヲ	アカシカネットル アイトシリヌル	承空
	さをしかのねに		我がかたこひを	あかしかねつる	書乙
	さをしかのねに		我がかた恋を	あかしかねつる	正保

唐草装飾本、静嘉堂文庫本は第四句第五句を、「自分と同類が存在している」と知る」と解される本文を持つ点において共通する。これは承空本とも共通するもので、静嘉堂文庫本系統が増補されて歌仙家集系統の承空本へと展開した時点でもまだこの本文が保たれていることが知られる。しかし書陵部乙本及び正保版本においてはこの第四句、第五句は「我がかたこひをあかしかねつる」即ち、片恋をしているので眠れないという意の本文となっており、歌仙家集本系統が書写を重ねてゆく過程で本文が変化したことが知られる。

また次の「出所不明歌」についても同様のことが言える。

秋の月あはれなるを

山ぎとのあれたるやどをてらしつゝいくよへぬらんあきのよのつき

(唐草)

(唐草 17、神宮 49、静嘉 16、承空 10、書乙 10、正保 10)

山さとの	あれたるやどを	てらしつゝ	いくよへぬらん	あきのよのつき	唐草
山さとの					神宮
				秋の月かげ	静嘉
					承空
山里に				秋の月影	書乙
山さとの				秋の月かげ	正保

この歌の第五句を唐草装飾本と神宮文庫本は「あきのよのつき」としており、承空本も同様の本文を持つ。だが静嘉堂文庫本、書陵部乙本及び正保版本においては「秋の月影」となっている。この歌の古態は第五句を「あきのよのつき」とするものであったが、「秋の月影」とする異伝歌によって本文が改変されたのであろう。

②十一世紀における『小町集』享受

そしてこのような「出所不明歌」の古態をとどめると見られる本文は、十一世紀ごろに流布していた『小町集』にまで遡る可能性が考えられる。

新出伝本を含めた『小町集』現存諸本の書写年代は、いずれも院政期を下らない。これは資料の上に現れてくる『小町集』や三十六人集についての記述も同様である。『小町集』についての記述が最初に見えるのは、先に掲げた十二世紀前半の『和歌童蒙抄』で、三十六人集についての現存最古の記述は『千載集』の次のような記事である。

大納言実家のもとに卅六人の集を返しつかはしける中に、故大炊御門右大臣の書きて侍ける草子に書きておし付けられて侍ける
皇太后宮

木の下に書き集めたる言の葉を別れし秋の形見とぞ見る

返し

木の下は書く言の葉を見るたびに頼みし蔭のなきぞかなしき

「故大炊御門右大臣」は藤原公能（一一一五—一一六一）をさす。長能が三十六人集の書写活動に携わったというこの記述から、『小町集』を含む三十六人集は十二世紀の前半ごろには成立していたことが知られる。

だが『小町集』が歌仙家集本系統、神宮文庫本系統の二系統しか知られていなかった時点から、その原型の成立は古歌、古の歌人や歌に付随したエピソードなどへの関心が高まりをみせた十世紀後半から十一世紀のことと考えられてきた。私家集の献上の勅命は「三代集の成立と符号するように」（注三三）行われたものであったが、中でも十世紀後半、『後撰集』撰集の際には、梨壺の五人による『萬葉集』の訓点作業が行われ、以降『萬葉集』から当代に至る迄の歌人の営みに関心が向けられるようになったであろう。そしてこの時代には、歌の背景にある詠作状況や歌に纏わる伝承を享受しようとする姿勢も存在していた。歌の詠み出だされる「場」に焦点を当てた（注三四）『後撰和歌集』という勅撰集や、『伊勢物語』『大和物語』といった歌物語の成立はそれを如実に表している。

片桐氏の『小野小町追跡』は、歌仙家集本系統、神宮文庫本系統の二系統の『小町集』がこのような時代の中で、十世紀のごく末期、あるいはどんなに遅くとも十一世紀のごく初期には今のようになつていたとし、歌仙家集本系統の第一部、神宮文庫本系統の第一部はそれ以前に出来上がっていたとする。その根拠として、三十六人集の中に見える他の歌人の他撰家集もまた、いずれも『古今集』『後撰集』からしか歌をとっておらず、『拾遺集』『拾遺抄』の影響を受けていないことを挙げる。ただし『小町集』の「出所不明歌」に詠み込まれた「こゆるぎの磯」「袖の浦」「いきの松原」といった歌枕は『後撰集』から『拾遺集』に至るまでの時代において圧倒的に多く詠まれているものである

（『千載集』雑中 1105）

権大納言実家

（同 1106）

ことから、「出所不明歌」は小町の真作ではなく、この時代に成立したものと見ている。

承空本の奥書から、歌仙家集本系統の第四部、第五部は十二世紀後半の増補であることが知られるが、「基幹部分」についてはおおむねこのころの成立とみてよいのではないか。『後撰集』の歌を持たない唐草裝飾本については、さらにその成立を遡って考えることもできるだろう。そして十一世紀の資料を仔細に見てみると、『小町集』が『後拾遺集』初出歌人のあいだで書写・貸借が行われ、享受が行われていたのではないかと考えられる例が見出される。

序でも述べたように、この時代には藤原公任が『前五番歌合』や『三十六人撰』を編み、その中に『古今集』所載の小町の歌を位置付けていた。そして藤原明衡（？—一〇六六）の『新猿楽記』には、柿本恒之という架空の歌人の歌才が「不恥於猿丸大夫、衣通姫等、不在所愧於躬恒、貫之、小野小町等」と評されていた。このことは明衡が、小町と『古今集』歌人である躬恒や貫之を同レベルの歌人として評価する文化の中にいたことを暗示するのだが、その中で『小町集』は、小町の家集として享受されていた可能性がある。明衡によって編まれた『明衡往来（雲州消息）』中末には、以下のようなこの時代の書簡の例が見える。

諸家集

右諸家集給畢。一見之後早可返献也。赤人黒主之家集猶可求給也。

これは諸家集を貸した者から借りた者への書簡であり、『小町集』の名は見えないが「赤人黒主之家集猶可求給也」とある。書簡の筆者は山辺赤人と、小町同様に六歌仙のひとつに数えられる大友黒主の家集は持っていないことが窺える。『赤人集』は現存するが、黒主の家集は現在確認されていない。しかし、明衡が活躍した十一世紀には、おそらく『黒主集』と名の付く家集も出回っていたのだろう。そして『古今集』に収められた歌数が三首に留まっておろ、さほど広まらなかったと推測される黒主の家集が「猶可求給也」と言われているということは、同じ六歌仙で『古今集』に十八首の入集を見る小町の家集は、「諸家集」に含まれていた可能性が高い。

そしてこの時代に流布していた『小町集』の享受、貸借に関与していた可能性の高い人物として、能因法師が挙げられる。先に見たように、能因法師は「みくさ」を「かけ」という、『小町集』所載の長歌と共通する特異な表現を詠んでいた。またそれだけではなく、その家集である『能因法師集』には、小町が夢に現れて和歌を詠んだという記述も見え、そこに『小町集』所載の「出所不明歌」が、小町の「旧詠」として掲出されている。

夢に小野小町わかをかたる、そのこと葉にいはく

まてといひしときよりかねてあかなくにかへらん君となげきしものを

（榊原家本『能因法師集』63）

代旧詠之

よそにこそやへのしらくもと思ひしかふたりが中にはや立ちにけり (同64 / 『小町集』唐草9、神宮8、静嘉9、承空9、書乙9、正保9)
 一芸に優れた先人が、これに執心する人々の夢に示現して語り合う例は少なくない。『権記』長保五年十一月二十五日条では行成の夢に小野道風が現れ、「可授書法、言談雑事」があつたとする。また『古今著聞集』には大江朝綱の夢に白楽天が、讃岐守兼房の夢に人麿が示現したという説話が収載されている。『能因法師集』の記事もこうした夢中示現譚と同質のもので、川村晃生氏(注三五)が指摘するように、この時代に小町が人麿同様、尊崇されるべき歌仙と見做されていたことを示している。

さて、ここでは小町が夢の中で詠んだという「までといひし」歌の次に「代旧詠之」という詞書を附して、「よそにこそやへのしらくもと思ひしかふたりが中にはや立ちにけり」という歌を載せる。これは『小町集』諸本に見える「出所不明歌」である。小町が夢中で詠んだ内の一首「までといひし」歌については、能因は記憶していたが、他の歌については夢が醒めてから書き留めようとしても細部が思い出せなかった。よって、代わりに『小町集』所収の、恐らくは夢の中で詠まれた歌と同趣の歌であつた「よそにこそ」歌を置いたと考えられる。唐草装飾本の存在や『明衡往来』の記事から考えて、その出典はすでにこの時点で成立していた『小町集』であつた可能性が高い(注三六)。

そして、ここで注目したいのは能因法師が引用する「よそにこそ」歌の第二句「やへのしらくも」である。これを『小町集』諸本の本文と比較してみると以下のようである。

	よそにこそ	やへのしらくも	思ひしか	ふたりが中に	はや立ちにけり	能因
		やへたつくもと				唐草
		やへの白雲と	おもひしを			神宮
		ミネノシラクモト				静嘉
		みねのしらくもと				承空
		みねのしらくもと				書乙
		みねのしらくもと				正保

これは神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本の本文と一致し、第二句を「やへ」の雲、とする点で唐草裝飾本の「やへたつくもと」とも共通する。だが歌仙家集本系統の本文はいずれも「みねのしらくもと」となっている。ここから能因法師が見ていた『小町集』ないし、小町作とされる歌の集成が、歌仙家集本系統へと展開する以前の、「基幹部分」の『小町集』の本文に近いものであったことが窺われる。

そして能因法師の周辺では『小町集』が出回り、享受されていた可能性がある。なぜなら能因法師と同時代に活躍し、交流をも持っていた（注三七）女流歌人、相模（九九〇以降—一〇六一以降）が、『小町集』の神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本、歌仙家集本系統に見られる「出所不明歌」を下敷きにした一首を詠んでいるからだ。

さはみづにかはづもなげばさきぬらむめでのわたりの山ぶきのはな

（浅野家本『相模集』534）

歌枕「井手」と山吹、蛙との詠み合わせは平安期に多く詠まれたものであった。しかし、下二句を「めでのわたりの山ぶきのはな」とする例は、相模以前には以下の『小町集』の出所不明歌以外に見られない。

めでのやまぶき

色も香もなつかしきかなかはづ鳴るでのわたりの山吹の花

（神宮）

『小町集』唐草なし、神宮 40、静嘉 57、承空 63、書乙 62、正保 61）

よって、相模は『小町集』の「色も香も」歌の表現に影響を受けたということになる。なお「さはみづに」歌と「色も香も」歌は共に「蛙」が鳴く事が詠み込まれている点でも共通する。ただし「色も香も」歌には諸本異同がなく、相模がどの系統の『小町集』から「色も香も」歌を撰取したかは不明である。

だが、森本元子氏（注三八）は、相模の詠作は「古典の和歌をよく勉強」した、「古典主義的な発想」が読み取れるものであり、三十六人集に数えられる他の歌人の集をも享受していることを指摘する。そのような相模の視界に、『小町集』が入っていた可能性はじゅうぶんに考えられる。しかも『相模集』の以下の記述から知られるように、相模は多くの「ものがたり歌など」を所蔵しており、本を貸してくれる友人をも持っていた。

はかなきことにむつかりし人、あやにくにもものがたり歌などありけるかぎりあたりいで、みなやきてしを、せむかたなくてなげく

ころ、ちかくてきく人のいかにぞといひたりしかば
秋はてゝあとのけぶりはみえねども思さまさむかたのなきかな

(浅野家本『相模集』190)

かゝる事きゝたらむと思し人に、つれくゝのわりなかりしかば

あらいそのあまはやけどもこりずまになをかりつべきものがたりかな

(同191)

一九〇番歌の詞書では、「はかなきことにむつかりし人」——おそらく彼女の夫であった大江公資が、相模の所持していた歌集や物語をすべて焼き捨てたとある。「ありけるかぎり」とあること、周囲が同情の念を示していることから、その蔵書はかなりの量のものであったのだろう。しかし相模は、物語を焼かれてしまつてただ嘆くだけではなく、一九一番歌で「やけどもこりぬ」ものがたりへの執心を吐露している。そして、ふたたび人に「かり」て物語を書写する意思を表示しているのである。すると、相模を圍繞する歌人、文化人の中には、彼女に自身の蔵書を貸してくれる者たちが少なからず存在していたということになる。このようなテクストの貸借のネットワークの中に相模と能因法師を位置付けてみると、二者の『小町集』享受の可能性がより輪郭をはつきりとさせて立ち上がってくる。あるいは、能因法師と相模の間で『小町集』の貸借が行われていた可能性を見てもよいのではないか。

おわりに

以上の検討をふまえて『小町集』の伝本系統を示すなら、以下のようになるだろう。すなわち、原『小町集』というべき、『古今集』の小町詠や小町の作として伝承されてきた「出所不明歌」を集めた資料が存在した。それは一つではなかったかもしれない。この原『小町集』を材料として、まず唐草装飾本『小町集』が成立した。そしてこの原『小町集』に『後撰集』の小町詠や、歌語りの場などで小町に結び付けられた歌々に加えられた資料をもとに神宮文庫本系統や歌仙家集本系統の第一部・第二部（あるいは錯簡を起す前の静嘉堂文庫本の原本）が成立する。これらが『小町集』の「基幹部分」というべき箇所である。そしてこれらの伝本はそれぞれに書写が繰り返される中で増補や歌の削除が行われたが、歌仙家集本系統には五十首以上の歌々が増えられて歌仙家集本系統へと展開した。

むろん、これは現在公開されている『小町集』を検討した結果導き出された結論である。顯昭の『萬葉集時代難事』は、『後撰集』の次の歌について「此歌在『小町集』」とする。

大輔につかはしける

右大臣

色深く染した本のいとゞしく涙にさへも濃さまさる哉

(『後撰集』恋一 587)

また、『夫木和歌抄』は以下の歌を小町詠として載せる。

家集、瞿麦

小野小町

撫子の花はあだなる種なればいさしら川の野べにちりにき

〔夫木和歌抄〕³⁴⁶²

この二首は現存する『小町集』に見えないので、平安後期から中世にかけて「色深く」歌や「撫子の花は」歌を収めた『小町集』が流布していたということになるが、それがどのようなものかは不明である。

さて、こうした『小町集』の中でも、基幹部分に位置する歌々を含む伝本が享受されるようになったのは、遅くとも十一世紀のことであろう。藤原明衡は恐らく『小町集』の存在を知っていた。また明衡と同時代に生きた能因法師は『小町集』の「よそこにこそ」歌を、唐草装飾本や神宮文庫本系統、静嘉堂文庫本と共通する本文で引用している。彼と交友のあつた相模も、唐草装飾本以外の三類五系統が伝える「色も香も」歌の影響下にある歌を詠んでいるのである。

『小町集』諸伝本については以上である。以下の章（第二章、第三章）では、『小町集』の成長過程において「出所不明歌」や詠人不知歌、他人歌などが小町のものとは見なされ、集に収められてゆく過程や、その歌々が浮かび上がらせる十一世紀ごろの小町像について検討を加えてゆく。

注一：『菅家後集』十三において、菅原家の清公、是善、道真という三代の詩文を集めたものを「家集」と呼称していることが参考になる。『古今集』真名序では、その家に伝わる代々の和歌を集めた冊子というニュアンスを表現する際に、漢字の家における「家集」の語を用いたと考えられる。

注二：久曾神昇 塙選書4『三十六人集』（塙書房、一九六〇年）。現存する西本願寺本の『小町集』そのものは散逸してしまっているが、西本願寺本を書写した三十六人集からその本文系統を推測する事が可能であり、それは神宮文庫本系統の六九首本であるという。

注三：石橋敏男「小町集成立考」（東京教育大学國語国文学会『國語』四・一、一九五五年八月）

注四：島田良二『平安前期私家集の研究』（桜楓社、一九六八年）

注五：橋本不美男『御所本三十六人集』（新典社、一九七一年）

注六：藤田洋治「歌仙歌集・正保版本の性格―その二 遍照・小町・敏行・小大君の家集を中心に―」（『東京成徳短期大学紀要』二七、一九九四年三月）

注七：杉谷寿郎「歌人・小野小町 勅撰集と家集」（『解釈と鑑賞』六〇・八、一九九五年八月）『平安私家集研究』新典社、一九九八年）

注八：室城秀之、高野晴代、鈴木宏子校注 和歌文学大系18『小町集・遍昭集・業平集・素性集・伊勢集・猿丸集』（明治書院、一九九八年）の『小町集』解説（室

城秀之氏担当)。

注九：注八の室城氏による『小町集』解説は、書陵部乙本系統の一六首本『小町集』を『古今集』『後撰集』に載る小町関係歌(一〇四〇)と、小町関係歌以外の歌(四一〇一)に分類する案を提示する。武田早苗『小町集』管見―唐草裝飾本の位置―(伊藤博、宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』(竹林舎、二〇〇三年))はこの見方を継承し、全体をA(一〇四〇)、B(四一〇一)に分けた上で、さらにBを『古今集』詠人不知歌から成るイ(四一〇四五)と異本からの抜き出しであるロ(四六〇七一)、それ以降に『古今集』『後撰集』から小町の縁者の歌を加えたハ(七二〇七七)に細分割する。その妥当性についてはさらに検討が必要であろうが、本論では異本からの抜き出しによる巻末増補に焦点を当てるため、片桐氏の分類を採用した。

注一〇：注六、注七前掲論文。ただしこれらは、aの代表本文として書陵部(五一〇・一二)本を挙げている。だが二〇〇七年に書陵部(五一〇・一二)本の親本にあたる承空本が発見されたため、本論ではこの系統の代表本文として承空本を利用する。

注一一：注六、注七前掲論文が掲出する一六首本の代表本文。これに対して角田宏子『小町集』の研究(笠間書院、二〇〇九年)は、西本願寺本補写本を代表本文として挙げる。いずれのテキストを代表本文とするかという問題については、今後も検討が求められていよう。

注一二：注六藤田氏前掲論文。

注一三：財団法人冷泉家時雨亭文庫編 冷泉家時雨亭叢書第七十一巻『承空本私家集』下(朝日新聞社、二〇〇七年)の解題(藤田洋治氏担当)。

注一四：注七杉田氏前掲論文。

注一五：角田宏子『小町集』の研究(笠間書院、二〇〇九年)

注一六：この部分について片桐洋一『小野小町追跡』(笠間書院、一九七五年)は、六八番歌が十二世紀以降、小町の髑髏の詠として歌学書や説話集にあらわれてくることからこれも小町の死後の詠とし、落魄した小町の詠と見られる六九番歌がそのあとに置かれている点に疑義を呈して「綴じ違えと見るのが最も妥当」「他本によって6番を末尾に補ったとも考えられる」とする。これに対して出雲路修「秋風のふくたびごと―小野小町説話考―」(『国語国文』四九・六、一九八〇年六月)『説話集の世界』岩波書店、一九八八年)は、六八番歌も本来は小町の生前の詠であり、小町落魄説話が時代とともに小町髑髏説話へと変化していった可能性を示す。だが書陵部蔵(五一・一二)本で六八番歌と六九番歌の間に行間が空けられているという事実は、本来六八、六九番歌が内容面で連続したものでないことを示している。

注一七：片桐洋一『一条撰政御集』について「冷泉家時雨亭文庫蔵『小野宮殿集』の構成と成立」(前者は『国語国文』三四・一二、一九七五年十二月、後者は関西大学国文学会『国文学』七八、一九九八年三月。その後二編ともに『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇年に収められている)。

注一八：注一五角田氏前掲書。

- 注一九…『書苑』三・八（一九一四年二月）
- 注二〇…春名好重『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年）
- 注二一…赤瀬信吾「中世の冷泉家の蔵書をめぐって―「歌の家」の形成・確立と、典籍の移動」（中世文学会創設五〇周年記念シンポジウム「中世文学研究の過去・現在・未来」、二〇〇五年五月二十八日）
- 注二二…注一五角田氏前掲書。
- 注二三…塚本善隆編纂代表『望月仏教大辞典』第一卷（世界聖典刊行協会、一九四三年）
- 注二四…財団法人冷泉家時雨亭文庫編 冷泉家時雨亭叢書第二十卷『平安私家集』七（朝日新聞社、一九九九年）の解題（片桐洋一氏担当）。
- 注二五…注四島田氏前掲書。
- 注二六…武田早苗『小町集』管見―唐草装飾本の位置―（伊藤博、宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』（竹林舎、二〇〇三年）
- 注二七…注一五角田氏前掲書。
- 注二八…田中喜美春『小町時雨』（風間書房、一九八五年）
- 注二九…なお同系統の正保版本系統には「おきのみて」歌がない。『古今集』墨滅歌に小町の歌として見えることに気付いた人物により削除されたものであろう。
- 注三〇…注三石橋氏前掲論文。
- 注三一…注一五角田氏前掲書にも「本来なかった詞であるのか」と推測がなされている。
- 注三二…大槻文彦編『大言海 改訂版』（富山房、一九五六年）
- 注三三…松本真奈美「私家集編纂の急増と『拾遺集』（『国文学解釈と鑑賞』九一〇、二〇〇七年三月）
- 注三四…西丸妙子『後撰和歌集』の世界―人間への興味から成った集』（後藤祥子編『王朝和歌を学ぶ人のために』世界思想社、一九九七年）
- 注三五…川村晃生校注『能因集注釈』（貴重本刊行会、一九九五年）
- 注三六…犬養廉「能因の小町詠をめぐって―家集上巻末尾三首試考」（『立正大学国語国文』二九、一九九三年三月）及び、平野由紀子「夢の小町―能因と順徳院の場合―」（有吉保編『和歌文学の伝統』角川書店、一九九七年）『平安和歌研究』風間書房、二〇〇八年）も、「よそにこそ」歌が『小町集』から引かれた可能性を考えている。また注一五角田氏前掲書は他にも能因法師詠と『小町集』所収歌との類似性を指摘し、能因法師が歌仙歌集本系統の『小町集』の成立に何らかのかたちで関与している可能性を示すが、本論では神宮文庫本系統との関係を指摘してみた。
- 注三七…浅野家本『相模集』一八五番歌「つのくにすむこやの入道（能因）、歌ものがたりなどおほかたにいふ人なりけり、かどのまへをわたるとていそぐ事あり

てえまいらず、なにごとかといひたれば／なには人いそがぬたびのみちならばこやとばかりもいひはしてまし」から、相模と能因法師の交流が知られる。また『長元八年五月一六日関白左大臣頼通歌合』、『永承四年一月九日内裏歌合』、『永承五年六月五日庚申祐子内親王歌合』には、相模と能因法師の両人が参加しており、歌合の場で顔を合わせることも少なくなかったようである。なお能因法師は夢に小町を見ているが、浅野家本『相模集』には、「つつむことありてたまさかに見ゆる人、しづ心なくてあはただしき心地のみすれば、思ひたらむもうるさうて、小町が言ひけむやうに／あふことぞやがてももの憂きあかつきの夜深き別れ思ひ出づれば（浅野家本『相模集』二〇〇番歌）」とある。ここでの「小町が言ひけむやうに」の典拠は不明だが、相模もまた、能因法師とは異なる方向の小町への関心を有していた。

注三八：森本元子「相模―作品を通してみる人と生―」（上野理責任編集 和歌文学講座五『王朝の和歌』一九九三年十二月）。『相模集』所収歌には、『古今集』の他、『貫之集』『斎宮女御集』『曾祢好忠集』『三百六十首和歌』『和泉式部集』『元良親王集』『兼盛集』『素性集』『忠岑集』などの影響が見られるという。このうち『貫之集』『斎宮女御集』『兼盛集』『素性集』は、『小町集』同様に三十六人集に入っている。相模が家集の形式になったものを享受していたのかどうか、今後検討が必要であろうが、三十六人集の享受の問題を考えるうえでも興味深い。

〈表〉 『小町集』 諸伝本の歌番号対照表 ※重出歌のない書陵部乙本（116首本）を柱とした。

初句	唐草	神宮	静嘉	承空	書乙	正保	古今	後撰	その他	中世以降の勅撰集
花の色は	32	27	1	1	1	1	113(小町)			
心から	×	47	2	2	2	2		779 (小町)		
空を行	×	37	3	3, 103	3	3				
雲はれて	28	38	4	4, 104	4	4				
みるめかる	35	60	5	5	5	5			小大君 集145	新勅撰集652 (小町)
名にしおへは	23	56	6	6	6	6				
やよやまて	×	×	×	7	7	7	152(三国町)			
結ひきと	19	45	7	8	8	8				玉葉集1314 (小町)
よそにこそ	9	8	9	9	9	9				新千載集1294 (小町)
山里に	17	49	16	10	10	10				続後拾遺集 1029(小町)
秋の月	×	43	17	11	11	11				新勅撰集283 (小町)
秋の夜も	36	10	18	12	12	12	635(小町)			
なかしとも	×	11	×	13	13	13	636(凡河内躬恒)			
うつゝには	38	14	19	14	14	14	656(小町)			
あまのすむ	41	7	21	15	15	15	727(小町)			
思ひつゝ	33	19	28	16	16	16	552(小町)			
うたゝねに	×	28	29	17	17	17	553(小町)			
たのましと	14	29	51	18	18	18				新勅撰集864 (小町)
いとせめて	42	30	30	19	19	19	554(小町)			
色みえて	31	35	32	20	20	20	797(小町)			
秋風に	×	41	33	21	21	21	822(小町)			
わたつうみの	34	17	37	22	22	22				新千載集1210 (小町)
みるめなき	4	6	38	23, 27	23	23	623(小町)			
人にあはん	37	12	42	24	24	24	1050(小町)			
夢ちには	40	21	39	25	25	25	658(小町)			
かさまゝつ	×	42	40	26	26	26				
我をきみ	7	51	41	28, 77	27, 76	27, 75				
よそにても	×	50	44	29	28	28				新拾遺集1319 (小町)
よひよひの	8	59	45	30	29	29			小大君 集144	
おきのみて	×	×	46	31	30	30	1104(小町)		小大君 集143	
今はとて	6	32	47	32	31	31	782(小町)			
人を思ふ	×	×	×	33	32	32	783(小野貞樹)			
あまのすむ	×	52	48	34	33	33		1090(小町)		
いはの上に	×	54	65	35	34	34		1195(小町)		
世をそむく	×	55	66	36	35	35		1196(遍昭)		

初句	唐草	神宮	静嘉	承空	書乙	正保	古今	後撰	その他	中世以降の勅撰集
ひとりねの	×	×	49	37	36	36		685(詠人不知)		新勅撰集651(小町)
みちのくの	×	×	54	38	37	37			古今和歌六帖1656(詠人不知)	
わびぬれば	2	31	×	39	38	38	938(小町)			
つゝめとも	44	3	63	40	39	39	556(安倍清行)			
をろかなる	5, 45	4	64	41	40	40	557(小町)			
みるめあらは	29	39	10	42	41	41				
いつはとは	3	×	×	43	42	×	189(詠人不知)			
日ぐらしの	×	×	×	44	43	42	205(詠人不知)			
もゝ草の	×	×	×	45	44	43	246(詠人不知)			
こぎゝぬや	×	×	×	46	45	44				
あやめ草	1	1	11	47	46	45				玉葉集1625(小町)
こぬ人を	×	2	22	48	47	46				新勅撰集863(小町)
露の命	30	5	15	49	48	47				続後撰集1504(小町)
人しれぬ	10	13	23	50, 102	49	48				
恋わびぬ	11	9	24	51	50	49				新千載集1156(小町)
物をこそ	×	15	25	52	51	50				
木からしの	12	18	26	53	52	51				新古今集1802(小町)
夏の夜の	13	20	27	54	53	52				風雅集394(小町)
うつゝには	×	23	34	55	54	53				続古今集1188(小町)
春雨の	×	24	35	56	55	54				玉葉集1268(小町)
今朝よりは	×	25	36	57	56	55				
我身には	×	26	50	58	57	56				新後拾遺集1411(小町)
心にも	×	66	×	59	58	57				新続古今集1504(小町)
妻こふる	15	34	53	60	59	58				新拾遺集464(小町)
卯の花の	×	36	55	61	60	59				続古今集1543(小町)
秋の田の	16	44	56	62	61	60				
色も香も	×	40	57	63	62	61				新後拾遺集145(小町)
霞たつ	18	×	58	64	63	62				新千載集1496(小町)
なにはめの	20	46	59	65	64	63				
ちたひと	21	48	60	66, 87, 124	65, 86	64, 85				続後撰集993(小町)
今はとて	22	53	61	67	66	65				続後拾遺集744(小町)
波の面を	24	57	62	68, 108	67	66				
ひさかたの	25	58	67	69	68	67			小大君集142	

初句	唐草	神宮	静嘉	承空	書乙	正保	古今	後撰	その他	中世以降の勅撰集
ちはやふる	26	61	68	71, 109	69	68			小大君集146	
たきの水	27	62	43	71	70	69			小大君集147 古今和歌六帖1722 (詠人不知)	新千載集153(兼輔)
かきりなき	39	22	8, 20	72	71	70	657(小町)			
時すきて	×	×	×	73	72	71	790(小町姉)			
うきことを	×	×	×	74	73	72		1267 (小町孫)		
ともすれは	×	16	×	75	74	73				
わすれ草	×	33	52	76	75	74				新拾遺集1263 (小町)
我ことく	7	51	×	77, 28	76, 27	75, 27				
みちのくは	×	67	×	78	77	76				続千載集758 (小町)
すまの浦の	×	×	×	79	78	77				続古今集1641 (小町)
ひとりねの	×	×	×	80	79	78		895 (小町姉)	拾遺集718(詠人不知)	
なかれてと	×	×	×	81	80	79			仲文集1	続古今集1325 (小町)
あるはなく	×	×	×	82	81	80			為頼集26	新古今集850
夢ならば	×	×	×	83	82	81				続古今集1189 (小町)
むさし野の	×	×	×	84	83	82				続古今集1286 (小町)
世の中は	×	×	×	85	84	83				玉葉集2807 (小町) 風雅集1232(小町)
むさしの	×	×	×	86	85	84				新勅撰集1300 (小町)
みし人も	×	×	×	87, 65, 124	86, 65	85, 64				続後撰集993 (小町)
世中に	×	×	×	88	87	86	943(詠人不知)			
我身こそ	×	×	×	89	88	87				新古今集1405 (小町)
なからへは	×	×	×	90	89	88		894 (詠人不知)		
世の中を	×	×	×	91	90	89		1290 (小町姉)		
はかなくて	×	×	×	92	91	90				続後撰集1228 (小町)
我のみや	×	×	×	93	92	91	798(詠人不知)			
はかなくも	×	×	×	94	93	92				玉葉集1593 (小町)
世の中の	×	×	×	95	94	93	941(詠人不知)			
吹むすぶ	×	×	×	96	95	94				新古今集312 (小町)
あやしくも	×	×	×	97	96	95				続古今集1850 (小町)

初句	唐草	神宮	静嘉	承空	書乙	正保	古今	後撰	その他	中世以降の勅撰集
しどけなき	×	×	×	98	97	96				
たれをかも	×	×	×	99	98	97				新古今集336 (小町)
白雲の	×	×	×	100	99	98	945(惟喬親王)			
もみぢせぬ	×	×	×	101	100	99	251(紀淑望)		拾遺集 189 (能宣)	
他本歌 十一首 (承空本では「他家本 十八首」)										
いっとても	×	×	×	105	101	100	546(詠人不知)			
長月の	×	×	×	106	102	101			萬葉 2304 (作者未詳)、 拾遺集 795 (人麻呂)	
あさか山	×	×	×	107	103	102			萬葉 3807	
ながめつゝ	×	×	×	110	104	103				続後撰集245 (小町)
春の日の	×	×	×	111	105	104			源重之 集229	
木間より	×	×	×	112	106	105	184(詠人不知)			
あまつ風	×	×	×	113	107	106			伊勢集 439	
あはれてふ	×	×	×	117	108	107	939(小町)			
世中は	×	×	×	115	109	108	942(詠人不知)			
あはれてふ	×	×	×	116	110	109	940(詠人不知)			
山里は	×	×	×	118	111	110	944(詠人不知)			
又他本五首 北 相公本也(承空 本では「他本 小宰相本 也」)										
をぐら山	×	×	×	119	112	111				
別つゝ	×	×	×	120	113	112				
かたみこそ	×	×	×	122	114	113	746(詠人不知)			
はかなしや	×	×	×	123	115	114				新古今集 758(小町)
花さきて	×	×	×	125	116	115		1360(小町)		
書陵部乙本に見えない歌										
たれにより	43	×	31	×	×	×				
ちはやぶる	×	63	×	×	×	×			馬内侍 集80	
世にふれば	×	65	×	×	×	×			斎宮女 御集 115、拾 遺集 495(斎 宮女 御)	
秋風の	×	68	×	×	×	×				

初句	唐草	神宮	静嘉	承空	書乙	正保	古今	後撰	その他	中世以降の勅撰集
手枕の	×	69	×	×	×	×			拾遺集 901 (詠人不知)	
我を君	×	×	12	×	×	×	973 (詠人不知)			
なにはがた	×	×	13	×	×	×	974 (詠人不知)			
月みれば	×	×	14	×	×	×				
みやこいてて	×	×	×	114	×	×	189 (詠人不知)			
をみなへし	×	×	×	121	×	×	121 (小野美材)			

第一部第二章 『小町集』の増補と展開

―「あま」の歌を例にして―

はじめに

『小町集』所収歌の中には、共通する題材を詠む歌が少なくない。その中でも特に目を引くのが「あま（海人）」を詠む歌である。そのうち、『古今集』に小町作として入集する「あま」の歌は次の二首である。

a みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる

〔古今集〕恋三 623 小町／唐草 4、神宮 6、静嘉 38、承空 23・27、書乙 23、正保 23

b 海人のすむ里のしるべにあらなくにうら見むとのみ人のいふらん

〔古今集〕恋四 727 小町／唐草 41、神宮 7、静嘉 21、承空 15、書乙 15、正保 15

また、『後撰集』にも、次の「あま」を詠む一首が見える。

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

c あまの住む浦漕ぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲き

〔後撰集〕雑一 1090 小町／唐草なし、神宮 52、静嘉 48、承空 34、書乙 33、正保 33

このうち『古今集』の「あま」の歌は『小町集』の四系統六類本のすべてに、『後撰集』の「あま」の歌は、原本が『後撰集』成立以前に形を成していた可能性がある唐草装飾本以外の伝本に見出される。しかし『小町集』の「あま」の歌は、この三首にとどまるものではない。まず、四系統六類が共通して有する歌として、以下の二首がある。

d みるめあらばうらみむやはとあまとはどうかびてまたむうたかたのみも

（唐草）
（唐草 29、神宮 39、静嘉、承空 42、書乙 41、正保 41）

e みるめかるあまのゆきかふみなどぢになこそせきも我はす忍ぬに

（唐草 35、神宮 60、静嘉 5、承空 5、書乙 5、正保 5）

また、唐草装飾本以外の伝本に共通して見られる歌は以下の一首である。

f かぎまゝつあましかづかばあふ事のみるめなしとは思はざらまし

(神宮)
(唐草なし、神宮 42、静嘉 40、承空 26、書乙 26、正保 26)

このdくf歌は、比較的早い段階から『小町集』に収められた歌、『小町集』の「基幹部分」の歌ということになる。そのいっぽう、歌仙家集本系統が独自に増補した歌として以下のものがある。

g コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ

(承空)
(唐草、神宮、静嘉なし、承空 46、書乙 45、正保 44)

h スマノアマノウラコグフネノカヂヨリモヨルベナキミヅカナシカリケル

(承空)
(唐草、神宮、静嘉なし、承空 79、書乙 78、正保 89)

i ヨノナカライトヒテアマノスムカタハウキメノミコソミエワタリケレ

(承空)
〔後撰集〕雑四 1290 小町が姉／唐草、神宮、静嘉なし、承空 91、書乙 90、正保 89)

j ハルノヒノウラク、ゴトヲイデ、ミヨナニワザシテカアマハスグスト

(承空)
〔重之集〕229／唐草、神宮、静嘉なし、承空 111、書乙 105、正保 104)

詳しくは後述するが、dくj歌は、『古今集』や『後撰集』に小町の作として「あま」を詠んだ歌が存在するゆえに『小町集』に収められたものと考えられる。しかし『古今集』所載の小町詠に見える「あま」の歌(a、b)と、『後撰集』(c)や『小町集』に見える歌(dくj)は、「あま」と海辺の景を詠む点で共通こそするものの、そこから浮かび上がる小町の姿は大きく異なる。

この問題については既に片桐洋一氏(注一)、田中喜美春氏(注二)の指摘があり、片桐氏は『小町集』に収められた「あま」を詠む歌々について、「既に説話的な面をも多分に含みこんでしまっている小町のイメージと重ねてこそ鑑賞しうるもの」で、その小町のイメージとは、「弱い小町、哀れな小町」という言葉で統一されるものと述べる。これに対して田中氏は、『小町集』の増益の主因を「表現の類似性」に求め、それによって小町に結ばれた歌の意味がさまざまに小町像を増幅させていったとする。

しかしこれらの先行研究がこの問題を論じるさいに用いた『小町集』のテキストは、歌仙家集本系統と神宮文庫本系統の二系統のみであった。そしていずれの研究も、『小町集』が成長・展開してゆくどの段階で歌が小町に結び付けられたのか、ということを積極的の問題として取り上げていない。だが唐草装飾本の存在が報告され、『小町集』の形成段階がより明確となったいま、「歌がいつ小町に結び付けられたのか」を意識しつつ、改めて「あま」の歌の増補について考えてみることは重要だと思われる。以下では『古今集』のa、b、『後撰集』のc、『小町

集』の「基幹部分」の歌で、比較的早くから小町作として伝来していたと見られるd、f、歌仙家集本系統の『小町集』独自の増補歌であるg、j、という順番でこれらの歌の表現や、そこに描き出された世界について見てゆく。そして『小町集』における歌の増補の方法について考えてゆきたい。

一、『小町集』の「出所不明歌」——真作か他人歌か——

さて、先に掲げた『小町集』の「あま」の歌のうち、i歌は『後撰集』の小町姉の歌、j歌は『重之集』の歌である。しかしそれ以外の歌々はいずれも、平安期の他の資料には見出されない「出所不明歌」となっている。

本題に入る前に、この「出所不明歌」について少し検討しておこう。これは現存する『小町集』諸系統がいずれも少なからず含むもので、もともと形態が小さな唐草装飾本でさえも四五首中、巻頭歌をはじめとする二六首が「出所不明歌」によって占められている。『小町集』というテキストが作り上げる世界の中で、「出所不明歌」が重要な役割を果たしていることを知る。これらの歌々は『新古今集』以降の勅撰集に小町の作として採歌され、中世以降小町の歌としての信用性を強めてゆくこととなった。

黒岩周六氏（注三）、大西貞治氏（注四）、関谷真可禰氏（注五）、前田善子氏（注六）といった戦前の研究者は、これらの「出所不明歌」を小町の真作として扱い、そこから小町の歌の文芸性を炙り出そうとしてきた。だが片桐洋一氏（注七）が小町の真作として認められる歌を『古今集』の十八首に限定すべきことを示してからは、これらの大部分を後人が小町に結び付けた他人の歌として捉える論考が増えてくる。片桐氏はこのように考える根拠として、『古今集』の小町詠と「出所不明歌」を比較すると、後者のなかには前者に見られない体言止めや歌枕表現、序詞的表現が存在すること、また「こゆるぎのいそ」「そでのうら」「いきの松原」といった、村上朝以降の歌人に多く用いられた歌枕が見出されることを挙げている。

また藤平春男氏（注八）は、歌仙家集本系統の『小町集』から神宮文庫本系統の『小町集』へ、さらにそこから『古今集』の小町詠へと遡ってゆくに従い「恋愛生活に耽溺する小町像」は次第に輪郭を臈げにしてゆき、『古今集』の小町の恋歌は「恋愛体験」よりも「自己観照による想念の世界の形象化」によつたものとなっているという。なお武田早苗氏（注九）も、歌仙家集本系統の第二部以降、「出所不明歌」や他人歌を中心に構成された部分に、『古今集』『後撰集』の小町詠には見られない、詠嘆の終助詞「かな」が増加してゆくことを指摘している。むろん『古今集』の小町詠すべてが小町の真作であるという証拠はないのだが、このような『古今集』所収の小町歌からの距離を考えるに、

これらの殆どは本来作者不明の伝承歌ないし他人の歌であり、『古今集』『後撰集』の詠人不知歌や他人歌と同じような経緯で小町に結び付けられ、『小町集』に入集したと考えるのが妥当であろう。

二、『古今集』『後撰集』の小町詠と「出所不明歌」

①「出所不明歌」の性質―夢の逢瀬の歌を例にして―

さて、この「出所不明歌」は、神宮文庫本系統では『古今集』や『後撰集』の小町歌の間に挿入されているが、唐草装飾本では七〇番歌に、歌仙家集本系統では承空本の歌番号で四八番歌以降に集中している。島田良二氏（注一〇）は、そのうち『古今集』『後撰集』所収の小町歌に「出所不明歌」の歌群を接合させた歌仙家集本系統の構成が『赤人集』『家持集』『宗于集』のように、「異質の二つの集団が合体して成立」したものと考えている。西本願寺本系統の『赤人集』の前半は大江千里の歌の集成（「句題和歌」）であり、後半は『萬葉集』巻十の古点歌となっている。『家持集』は、前半が『萬葉集』の歌、後半が『古今集』『後撰集』の歌々や出典不明の古歌の集成である。また西本願寺本系統の『宗于集』は、一〇二八番歌が『古今集』『後撰集』を資料とした部分で、二九〇三番歌が『拾遺集』出典の他人歌が付加された部分である。唐草装飾本や歌仙家集本系統の『小町集』がこうした三十六人集の他家集同様の構成であるとすれば、『小町集』の「出所不明歌」の大半は、本来小町とはまったく無関係なところで成立した古歌の集成が『小町集』に混入したものであるということになる。

ただし注意すべきは、先にも述べた通り「出所不明歌」のなかに、『古今集』『後撰集』の小町詠と共通する題材を有する歌が少なくないということだ。その中でもことに数が多いのが、先に掲げた「あま」が登場する海辺の景と恋の心象を重ね合わせた歌である。また、現実に逢瀬が叶わないために求められる「夢」の逢瀬を題材とした歌も少なくない。しかもその中には、『古今集』や『後撰集』の小町詠と表現が共通する歌も存在しているのである。「あま」については後で詳述するので、ここでは「夢」の逢瀬を詠んだ歌について見てみよう。

『古今集』所収の小町歌のうち、「夢」の語を詠み込み、そこでの逢瀬を表現した歌は以下の五首である。（本文は『古今集』に拠った）

思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを
『古今集』恋二⁵⁵²小町／唐草³³、神宮¹⁹、静嘉²⁸、承空¹⁶、書乙¹⁶、正保¹⁶

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき
『古今集』恋二⁵⁵³小町／唐草なし、神宮²⁸、静嘉²⁹、承空¹⁷、書乙¹⁷、正保¹⁷

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしき
『古今集』恋三⁶⁵⁶小町／唐草³⁸、神宮¹⁴、静嘉¹⁹、承空¹⁴、書乙¹⁴、正保¹⁴

かぎりなき思ひのまゝに夜も来む夢路をさへに人はとがめじ
『古今集』恋三⁶⁵⁷小町／唐草³³、神宮¹⁹、静嘉^{8・20}、承空¹⁶、書乙¹⁶、正保¹⁶

ゆめぢには足もやすめず通へども現にひとめ見しごとはあらず（『古今集』恋三⁶⁵⁸小町／唐草⁴⁰、神宮²¹、静嘉³⁹、承空²⁵、書乙²⁵、正保²⁵）
前半二首は恋二の冒頭に連続して載せられ、後半三首は恋三の中程にこれも同じく三首続けて載せられている。『古今集』所収の小町詠一八首中、その三分の一近い五首を「夢」という特異な恋の場を詠んだ歌が占めるといふ事実からは、『古今集』の撰者たちが小町という女性を象徴するものとしてこれらの歌を位置付けていたことが読み取れる。

次に、『小町集』に収められている「夢」の逢瀬を題材とした歌を挙げると次の通りである。まず唐草装飾本の段階で、以下の「出所不明歌」四首が『小町集』に収められている。

よひくのゆめのたましゐあしたまでありて我みをとぶらひにこよ

（唐草）

こひわびぬしはしねなばやゆめのうちにみゆればあひぬみねばわすれぬ

（唐草⁸、神宮⁵⁹、静嘉⁴⁵、承空³⁰、書乙³⁰、正保²⁹）

（唐草¹¹、神宮⁹、静嘉²⁴、承空⁵¹、書乙⁵⁰、正保⁴⁹）

夏のよのわびしきことはゆめをだにみるほどもなくあくるなりけり

（唐草¹³、神宮²⁰、静嘉²⁷、承空⁵⁴、書乙⁵³、正保⁵²）

たのまじとおもはじとてはいかゝせんゆめよりほかにあふよなければ

（唐草¹⁴、神宮²⁹、静嘉⁵¹、承空¹⁸、書乙¹⁸、正保¹⁸）

そして注目すべきは、「たのまじと」歌である。この歌は恋人との逢瀬の場である「夢」を「たの」みにする、ということ詠んだ点で、『古今集』の「うたゝねに」歌と表現が近似する。それどころか、「うたゝねに」歌でなぜ夢を頼みにするのかをより詳しく説明した、あるいはその内容を詠みかえたような歌となっている。唐草装飾本は「うたゝねに」歌を有していないのだが、この「たのまじと」歌は、「うたゝねに」歌を前提に成立した一首と見て間違いない。

このように唐草装飾本の「出所不明歌」の中には、『古今集』の小町歌の三分の一近くを占める「夢」の逢瀬を詠む歌と重なり合うような歌々が取り入れられ、しかも歌によっては『古今集』の小町詠と表現の上でも共通するところが多いという事実は、「出所不明歌」が、「小町」という存在と全く無縁ではなかったことを示唆する。

また神宮文庫本系統では、この四首に加えて以下の「出所不明歌」が見える。

うつゝにてあるだに有を夢にさへありても人に別ぬるかな

(神宮)
(唐草なし、神宮²³、静嘉³⁴、承空⁵⁵、書乙⁵⁴、正保⁵³)

この歌は、先にも掲げた『古今集』六五六番歌「現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしさ」と構造的に共通する。最初に「うつゝ」における男女関係の不如意について述べ、その後「夢にさへ」相手と逢えないことを詠んでいるのである。「うつゝにて」歌は「現には」歌の異伝歌、あるいは「現には」歌の影響下に作られた歌といえよう。これもまた、小町と関係の深い一首といえる。

なお歌仙家集本系統では、以下の歌々が巻末に増補されている。

ユメナラバマタミルヨキモアリナマシナニナカクノウツナリケン

(承空)
(唐草、神宮、静嘉なし、承空⁸³、書乙⁸²、正保⁸¹)

ハカナクモマクラサダメズアカスカナユメガタリセシ人ヲマツトテ

(承空)
(唐草、神宮、静嘉なし、承空⁹⁴、書乙⁹³、正保⁹²)

『古今集』の小町歌十八首の中に、「あま」「夢」などの同一の語や題材を詠んだ複数の歌が見出されることは、特定の語、題材に拘泥する小町、というイメージを生んだはずだ。ここにあげたほかにも、「我が身」(『古今集』一一三、六二二、七八二、八二二)、植物のうつろい(『古今集』一一三、七八二、七九七)、食用の植物が育たない不毛のイメージ(六二二、八二二)、身を焼くほどの激しい思い(一〇五〇、一一〇四)といった例がある。そのようなことから、歌語りの場合などで、作者不明の伝承歌の作者が取り沙汰されるとき、『古今集』『後撰集』の小町詠に通じるところのある歌々については、小町の作である可能性が示されることが多かったのではないか(注一一)。それが『小町集』所載の「出所不明歌」であり、詠人不知歌や他人歌であったと思われる。

②『小町集』のなかの「出所不明歌」と他人歌

さて、「出所不明歌」や他人歌が『小町集』に収められるということは、歌語りなどの場でたゆたっていた歌々が『小町集』というテクストの中に固定化され、小町という女性の生の一端を反映するものと位置付けられるということだ。そして『小町集』のなかでもその歌に解釈が加えられ、それらしい詞書が附されてゆく。ことに唐草装飾本以外の『小町集』諸本は、部分的にはあるが、詞書に直接体験の助動詞「き」を用いている点で注意される。そうした詞書はたとえば『古今集』『後撰集』の小町詠に、以下のように用いられている。

・いそのかみてらにまうでゝ日のくれにしかば、とまりて、そせい法師にいひやりし
(神宮⁵⁴／『後撰集』¹¹⁹⁵小町)

・人ト物イフトテアケシツトメテ、「カバカリナガキヨニ、ナニゴトヲヨモスガライヒアカシツルゾ」トアイナウトガメシ人ニ

(承空 12 / 『古今集』 685 小町)

だが「き」を用いた詞書は、「出所不明歌」や詠人不知歌、他人歌にも以下のように附されている。

・めのとの遠き所なりしにつかはし

(神宮 4 / 「出所不明歌」)

・四のみこのうせ給へるころ風のふきしに

(同 25 / 「出所不明歌」)

・マヘヨリワタリシ人ニタレトモナクテトラセシ

(承空 3 / 「出所不明歌」)

・イカナリシアカツキニカ

(同 80 / 『後撰集』 895 小町姉、『拾遺集』 718 詠人不知)

こうした「き」を用いた詞書は、小町と同時代の歌人の他撰家集である『遍照集』や雅平本『業平集』にも見え、島田良二氏(注一一)がいうように「後人が第一人称の立場に立つて記述したもの」と見られる。このような操作は、『小町集』を小町じしんが撰集に携わった集として享受するように読者を誘導する。そして集中の「出所不明歌」や他人歌は、たとえそれが詞書が附されていない歌であっても小町という人物の実体験から詠み出されたものと位置付けられ、『古今集』『後撰集』の小町歌や小町そのひととの結び付きをいっそう強めてゆくこととなるだろう。そして時にそれは、本来の詠者を覆い隠してしまうほどに強くはたらくものとなる。

ミシ人ノナクナリシコロ

アルハナクナキハカズソフヨノナカニアハレイヅレノヒマデナゲカン

(承空)

(『為頼集』 26 (小おほきみ)の歌、林家本『小大君集』 120 / 冷泉、神宮、静嘉なし、承空 8²、書乙 81、正保 80) この歌は、第一章でも示したように『小大君集』に見え、『栄花物語』や『為頼集』に小大君の詠として出ている。十一世紀ごろには、この歌を小大君の詠とする意識が強かったことをうかがわせる。だがこの歌は『新古今集』哀傷歌、八五〇番歌に小町の作として載る。『新古今集』は、歌仙家集本系統ないしその巻末増補に用いられた『小町集』にこの歌が存在しており、しかもそこに「き」を用いた詞書が附されていることに着目し、この歌の作者名を小町としたものである。

三、「あま」の詠まれ方―小町以前―

以上のことをふまえて『小町集』の「あま」の歌に入ってゆきたいのだが、最初に「あま」とはどのような人々を指すのかということと、

小町以前の「あま」の詠まれ方について見ておく。

久保田淳氏（注一三）によれば、「あま」とは、「漁夫、漁師。魚貝や海藻を採取し、また製塩の業に携わる人々」であり、海に限らず、琵琶湖のような湖の漁師も「あま」と呼ばれたという。そして『萬葉集』における「あま」の歌の多くは次のように、男性である作者が実際に海辺に行き、そこで見た「あま」を詠んだものである。

從千沼廻 ちぬみより 雨曾零来 あめそふりくる 四人津之白水郎 しはつのあま 綱手乾有 つなてほしたり 沾将堪香聞 ぬれもあへむかも
右一首遊ニ覽住吉濱ニ還レ宮之時道上守部王應レ詔作歌

〔萬葉集〕卷六 999 守部王

海人小舟 あまをぶね 帆毳張流登 ほかもはれると 見左右荷 みるまでに 鞆之浦廻二 ともものうらみに 浪立有所見 なみたてりみゆ

〔萬葉集〕卷七 1182、

羈旅作)

朝入為流 あさりする 海末通女等之 あまをとめらが 袖通 そでとほり 沾西衣 ぬれにしころも 雖干跡不乾 ほせどかわかず

〔萬葉集〕卷七 1186、羈

旅作)

また『萬葉集』には、「あま」を女性を手に入れようと通う男に見立てた譬喩歌が散見される。これも詠者は男性である。

また『萬葉集』には、「あま」を女性を手に入れようと通う男に見立てた譬喩歌が散見される。これも詠者は男性である。
わたつみの もてるしらたま 見欲 みまくほり 千遍告 ちたひそのりし 潜為海子 かづきするあまは
海神 わたつみの 見欲 みまくほり 千遍告 ちたひそのりし 潜為海子 かづきするあまは
潜為 かづきする 海人雖告 あまはのれども 海神 わたつみの 心不得 こころをえねば 所見不云 みゆといはなくに

〔萬葉集〕卷七 1302、寄玉)

(同 1303、寄

ここで詠まれているのは海の底に沈む白玉、即ち真珠を採りにゆく「あま」である。真珠は手に入りにくい女性の譬喩であり、そして「あま」が白玉を見るとは自分のものとする、結婚するという事を意味している。海という、時に人の命を奪う程の恐ろしい存在の奥底に沈んでいる真珠を取るの命がけの行為である。それでも真珠を見たい、取らずにはいられないという心情が詠まれたこの歌には、詠者である男が女をどれだけ強く思っているか、ということが暗示されている。

このようなことから明川忠夫氏（注一四）は、「女性による男としての海人の歌い方は、『万葉集』には皆無」と述べる。そして、女性の立場から「あま」を恋の相手の男にたとえて詠んだ歌の初出は『古今集』の以下の詠人不知歌だとする。

うきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそ海人は寄るらめ

〔古今集〕恋五⁷⁵⁵、詠人不知

この歌は第一句に海藻の意の「浮き布」と、「辛いさま、惨めなさま」という意の「憂き目」を掛ける。そして第二句の「ながるゝ」に「流るる」と「泣かるる」を、第四句「かり」に「刈り」と「飯」を掛ける。浮き布が流れているだけで他に何も無い浦に、海人はその浮き布を刈りにだけ来ることだろう。それと同じように、惨めな思いを背負って泣いてばかりの私であるから、恋人はほんのかりそめにしか立ち寄らないのだろう、と詠んでいるのである。この歌はこれから見てゆく小町の「あま」の歌と同じく、掛詞と縁語により、海辺の景色と女の境遇とがたくみに重ね合わせられたものである。

四、『古今集』所収の小町の「あま」の歌

①否定的、揶揄的姿勢

それでは次に、『小町集』に収められた『古今集』の小町詠の中の「あま」の歌を見てゆこう。最初はこの歌である。

a みるめなきわが身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆくくる

（古今）

〔古今集〕恋三⁶²³小町／唐草4、神宮6、静嘉³⁸、承空²³・27、書乙²³、正保²³

この歌の、第一句の「みるめ」の語は海藻の「海松布」と、「会う機会」の意の「見る目」の掛詞となっている。第二句の「うら」、第四句の「あま」は「みるめ」の縁語である。先に掲げた『古今集』七五五番歌と同様、「うら」の語はは自分自身を譬えたもの、「あま」の語は相手の男を譬えたものである。先述した『万葉集』の譬喩歌や、それを女の立場から詠んだ「うきめのみ」歌の流れを継承した一首といえよう。また、「みるめ」という語は『万葉集』に見えず、『古今集』以降使用され始めた語で、『古今集』の詠人不知歌に以下のような例を見る。

大方はわが名もみなと漕ぎいでなむ世をうみべたに見るめ少なし

〔古今集〕詠人不知

伊勢のあまの朝な夕なに潜くてふ見るめに人を飽くよしも哉

〔古今集〕恋四⁶⁸³詠人不知

a 歌の「みるめなき」は六六九番歌の「見るめ少なし」、「離れなであまの足たゆく来る」は、六八三番歌の「朝な夕なに潜く」を想起させる語である。a 歌に、これらの『古今集』詠人不知歌の表現が参考とされている可能性を考察とされていることができる。

さて、この a 歌の上二句は難解であり、二句目の「わが身」の語については古来様々な解釈がなされてきた。竹岡正夫氏は諸注釈書にみえるこの歌の解釈について、以下の四種に分類している(注一五)。

A 相手の男の身とするもの……頭註密勘・頭昭注頭書・両度問書・栄雅
B 作者自身の身とするもの

- (a) 見どころもなきみにくきわが身とするもの……統万葉集秘説・正義・至文・全書
(b) わが身をみるめなき浦と知らねばや、の順序が正しいとするもの……遠鏡・鄙言
(c) このままで解そうとするもの……金子評釈・窪田評釈・大系

竹岡氏自身の解釈は、

海松藻みるめのない浦と知らないから、それでうとくもならず漁師が足もだるいほど来るのかしら―何度来たって見る目(私に逢えると)
き)のないおのが身をつらいと感じないから、それでうとくもならずにあの人が足もだるいほど通って来るのかしら。

というもので右の分類においてはAの解釈であり、その理由として『後撰集』の、

幾度か生田の浦に立帰浪にわが身を打濡らすらん

〔後撰集〕恋一 532 詠人不知

かけてだに我が身の上と思ひきや来む年春の花を見じとは

(同、哀傷 1422 伊勢)

の二首を挙げている(注一六)が、片桐洋一氏も指摘するように『古今集』の「我が身」の用例の中に相手の身を「我が身」と詠んだ例はない(注一七)。また、ここでは海辺の情景と自分たちの関係が掛詞によって二重写しとなるように詠まれているのであるから、「あま」を相手の男と考えると、足たゆく通う対象である「わが身」とは詠み手の小町を指していると考えるのが自然であろう。以上のことから論者はB(c)の解釈を取りたい。

そしてその「わが身」は「うら」であるという。「うら」に「憂」が響かせられていると考えると、この歌の解釈は、「貴方にお会いする機会が無い私のこの身の憂さを貴方はご存知ないのでしようか、海人が海藻さえも生えていない浦に足がだるくなる程通って来るように、貴方は私の元へ足がだるくなる程に通っていらっしやいます」となる。するとこれは恋人との間に何らかの障害があり、逢うことが出来ない状況であるにも関わらず、男が熱心に通ってくることを詠んでいることになろう。ここに登場してくる海辺の景は「あま」の獲物に恵まれていな

い不毛の地であり、それが「我が身」と二重写しにされているところに、成就しない恋を目の前にして孤独を噛みしめている小町の悲しみを読み取ることができる。

しかし相手が足しげく通ってくることを「足たゆく来る」と表現したところには、自分の元に通いつづける相手の情熱を揶揄したような姿勢も読み取れる。鈴木日出男氏（注一八）が指摘するように、女性の歌——いわゆる「女歌」には「恋に対する否定的契機」が含有されているのではあるが、a歌を贈答歌と解すると、小町は相手の男の気持ちに踏みにじる驕慢な女であった、という解釈も生じてこよう。

また、『古今集』の「あま」を詠むもう一首の小町詠、

b 海人のすむ里のしるべにあらなくにうら見むとのみ人のいふらん

（古今）

にも、同様の姿勢が読み取れる。

このb歌では、第四句の「うらみむ」に「浦見む」と「恨みむ」が掛けられている。「私は漁師の住む里の案内人ではないのに、どうしてあの方は「うらみむ」とばかり言うのでしょうか」という内容であり、言葉遊びの感が強い。そこに自分を恨んでいる相手へのはぐらかしや揶揄、a歌同様の驕慢な態度をも読み取ることができる。

②真情か虚構か

ただし、a歌は本来、真情の吐露ではなかった可能性がある。「あま」もしくは「みるめ」の題詠や、屏風に描かれた海辺の景を題材とした屏風歌とも考えられるのである。小町より一時代後の、宇多朝の女流歌人である伊勢の家集『伊勢集』には次のように、「あま」が描かれた屏風の絵を見て詠まれた歌が載せられている。

五条の内侍のかみ御四十賀をきよつらのみぶ卿のつかまつりたる屏風のゑに

（中略）

もかりたるあま

心してたまもはかれどそでごとひかりみえぬはあまにざりける

（中略）

あまのうへよりけぶりたつ

（西本願寺本『伊勢集』70）

そでぬれてあまのたくひはもえねばや雲とけぶりのたちのぼるらん

(同73)

あるいは、食用の海藻である「海松」が朝廷に献上された際に詠まれたものとも考えられる。『大和物語』三〇段に「亭子の帝に、紀伊国より石つきたる海松をなむ奉りけるを題にて、人々歌よみけるに」という記述がある。宇多天皇に「石つきたる」珍しい海松が献上されたというのである。そのような遊戯的な場を、a歌の成立背景として考えることもできる。またb歌についても、宮中や宴席などで「つれないあなたを恨みます」という旨の歌を詠みかけられたさいに即興で詠んだ戯れの歌と見ることも可能であろう。

しかしながらa歌は、『伊勢物語』一五段に以下のように位置付けられている。

むかし、おとこ有けり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞひちまさりける

色好みなる女、返し、

見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る

この中の「男」の歌は、『古今集』においてa歌の直前に位置する題不知の在原業平の歌である。よってこの『伊勢物語』一五段は、『古今集』に業平の歌と小町の歌が連続して載せられているのを利用して一つの章段としたもので、虚構的な性格が強いことが知られる。しかしここには、平安中期ごろのa歌の解釈のひとつがあらわれているといつてよい。すなわち、男の熱烈な求愛を受け入れることなく、相手を拒否、揶揄する「色好みなる女」の歌、という解釈である。今関敏子氏(注一九)が指摘するように、ここでの「色好みなる女」とは「待つ身で選ぶ女／拒む女」である。そして『伊勢物語』は平安期から中世にかけて「男」のモデルとなった業平の実際の事跡として享受され、各章段に登場する女たちにも実際人物の名前が当て嵌められてゆくのであるが、そこにおいてa歌は、業平を選ばずに拒絶し、しかもその求愛を揶揄する小町の詠ということになる。a歌は謡曲『通小町』などに見られる、深草少将に百夜通いを強いる驕慢な小町像の源流とも考えられてきたが(注二〇)、首肯すべき見解であろう。a歌のはらむ「色好み」性の中の、男に対する否定的、揶揄的なまなざしに焦点が当てられ、このような説話が形成されていったものと見られるのである。

五、「あま」の歌の増補

①『後撰集』の「あま」の歌

しかし『後撰集』に小町作として入れられている以下の一首から浮かび上がるのは、『古今集』のa・bの歌から読み取れる情景や、そこ

から派生した驕慢な小町像とは異なった心象である。

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

c あまの住む浦漕ぐ舟のかちをなみ世を海わたる我ぞ悲き

〔後撰集〕雑一 1090 小町／唐草なし、神宮 52、静嘉 48、承空 34、書乙 33、正保 33

(後撰)

この c 歌は、先に見た『古今集』の b 歌「海人のすむ里のしるべにあらなくにうら見むとのみ人のいふらん」と類似した表現を持っている。この二首は第一句が共通し、また、共に「うら」の語が詠み込まれているのである。

だが c 歌の第四句「うみ」には「海」と「憂み」が掛けられており、「漁師が住むその浦を漕いでゆく舟が漕ぐ舟の櫂を無くして為す術が無いように、どうすることも出来ず頼りなく悲しい思いで世間という海を渡る私は悲しいことです」という内容である。ここから読みとれるのは a・b 歌に見える揶揄的な姿勢ではなく、弱く、悲しみに沈んでいる小町の姿であり、むしろ以下のような『古今集』の、相手の心変わりを嘆く小町詠との共通性が強い。

今はとてわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり

〔古今集〕恋五 782 小町／唐草 6、神宮 32、静嘉 42、承空 32、書乙 31、正保 31

(古今)

色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞありける

〔古今集〕恋五 797 小町／唐草 31、神宮 35、静嘉 32、承空 20、書乙 20、正保 20

(古今)

秋風にあふたのみこそ悲しけれわが身むなしくなりぬとおもへば

〔古今集〕恋五 822 小町／唐草なし、神宮 41、静嘉 21、書乙 21、正保 21

また、この c 歌で詠作主体である「我」をよそえた「かち」を失った「舟」は、次の『古今集』所収の小町歌においてわが身のたとえとして出てくる、「根」をたえた「うき草」を連想させる。

文屋康秀が、三河掾になりて、県見には、え出で立たじやと、言ひ遣れりける返事に、よめる

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思

〔古今集〕雑下 938 小町／唐草 2、神宮 31、静嘉なし、承空 39、書乙 38、正保 38

(古今)

つらい思いをしているので、浮き草が根を絶えて水に流れてゆくように、この身もあなたの誘いに流されて三河に行ってしまうでしょう、という歌である。そして、ここに詠まれた「根」を離れて流れてゆく「草」も、c 歌に詠まれたコントロールを失った舟も、いずれも平安期

には頼りない身の上をたとえるものであった。『和漢朗詠集』の「無常」項に掲げられた漢詩では、根を離れた川岸の草と、c歌に詠まれた舵を失った舟のイメージに極めて近い、繋がれていない舟の二つが、はかない身や命のたとえとして用いられている。

観身岸額離根草 論命江頭不繫舟

羅維

『和漢朗詠集』「無常」789

以上のことから、c歌が小町の真作であるとすれば、これは小町が年齢を重ね、男の心変わりや離別を経験して自らの寄る辺なき身を嘆みしめていたさいの詠ということになる。そして他人の歌が結び付けられたのだとすれば、b歌と共通した表現を用いており、また「今はとて」歌や「色みえで」歌、「秋風に」歌同様に心変わりや離別に翻弄される身を詠んだものであること、「わびぬれば」歌同様に水上によるべくなく浮かび、流されてゆく物体に我が身をよそえていることが、小町の作と見なされた理由ということになる。

②『小町集』「基幹部分」の歌

そして『小町集』の「基幹部分」に増補された「出所不明歌」も、このc歌と同じ調子を帯びている。『古今集』の「あま」を詠む小町詠と共通する表現を持ちながらも、その中で小町は「あま」によそえられた恋の相手に否定的、揶揄的な態度を示すのではなく、むしろ来ぬ「あま」を待っているであった。以下、具体的に見てゆこう。

まず、諸本が共通して掲げている以下の二首である。これらの歌は『後撰集』の歌を載せていない唐草装飾本にも見られることから、『後撰集』以前か、これと同時期ごろから小町に結び付けられた可能性が高い。

d みるめあらばうらみむやはとあまとはどうかびてまたむうたかたのみも (唐草)

e みるめかるあまのゆきかふみなどちなこそそのせきも我はすゑぬに (唐草)

(唐草 35、神宮 60、静嘉 5、承空 5、書乙 5、正保 5)

d歌にはa歌に用いられた「みるめ」「あま」とb歌に用いられた「うらみむ」、e歌にはa歌に用いられた「みるめ」「あま」が詠み込まれている。またこの二首はa歌同様、「あま」を相手の男の比喩とし、「みるめ」に「見る目」と「海松布」を掛ける。またd歌の「うらみ」は『古今集』の「あまの住む」歌と同じように「恨み」と「浦見」の掛詞となっている。これらは表現の上でa、b歌と共通するところが多

い歌で、ことにd歌についてはa、b歌の後日談的な歌としての趣さえある。

ただしd歌の下句は、「うかびてまたむうたかたのみも」である。第四句「うかびてまたむ」の「う」には、海の上に浮かんでという意の「浮」と、憂いてと言う意の「憂」が掛けられており、逢瀬を待つ女の憂愁が表現されている。「みるめあらば」、すなわち逢う機会があるならば貴方を怨みなどしましうか、と言って男が訪れてくれるならば、苦しいながらも海の上に浮かんであなたを待ちましよう、泡沫のように儚いこの身ではあるけれど、と詠んでいるのである。

次に、^e歌においては第一句「みるめかる」に、「海松布刈る」と「見る目離る」を掛ける。海藻を刈ることと、逢う機会がなくなつて相手との間に距離ができることが掛けられているのである。そして第四句では「なこそせき(勿来の関)」に「な来そ」を掛け、自分は「あま」の行き交う「みなとぢ」に「なこそせき」など据えて「な来そ」と相手を拒んでいるわけではないのに、「あま」はやつてこない、と詠む。

「なこそせき」の所在は、『和歌初学抄』『五代集歌枕』『八雲御抄』は共に陸奥とするが、『能因歌枕』によれば遠江である。しかし『海人手子良集』の次の歌において「なこそ」が陸奥の地名として詠まれていることから、陸奥と解してよいであろう。

〔海人手子良集〕⁴¹

78

そして^e歌における「なこそせき」の用法は、以下の『後撰集』の歌に近い。

寛平のみかど御ぐしおろさせたまうての頃、御帳のめぐりにのみ人はさぶらはせたまうて、近う寄せられざりければ、書きて御帳に結びつけ
ける

小八条御息所

立ち寄らば影踏む許近けれど誰かなこそその関をすへけん

〔後撰集〕恋二⁶⁸²、小八条御息所

この歌では出家落飾した宇多天皇に側近く寄ることが叶わない嘆きが「なこそその関」に託され、「なこそその関」を誰が「すえ」たのか、と詠んでいるのである。^e歌はこの歌の表現に学んだものとも考えられる。

また唐草装飾本以外の諸伝本に見える「あま」の歌として、以下の一首がある。

f かざまゝつあましかづかばあふ事のみるめなしとは思はざらまし

(神宮)

(唐草なし、神宮⁴²、静嘉⁴⁰、承空²⁶、書乙²⁶、正保²⁶)

この歌にも『古今集』の a 歌同様に、「あま」のほか、「みるめ」が「な」といって表現が見られるが、その姿勢は来ぬ相手を「待つ」方向に傾斜している。ここに登場する「あま」は、海に潜るために風間、つまり風の絶え間を待っている。そのあまが潜ってくれるならば、「みるめもなし」、すなわち逢う機会がないとは思わないだろうに、というのである。潜って「みるめ」を採らない「あま」の態度を嘆く歌で、前の二首同様、来ぬ男を待つ女の悲哀が詠まれているといつてよい。

なお歌仙家集本系統では、この f 歌の下旬が「たよりになみはうみとなりなん」となっている。第四句「なみ」には海の「波」と「たよ」るものが「な」といって、第五句「うみ」には「海」と「憂」が掛けられている。こちらの場合、「風間」を待つ「あま」はほんのかりそめに詠者のもとにいるだけで、ほかに「かづ」く海、すなわち目当ての女性がいることになる。男がその女性の元に行ってしまったら、誰も頼みできない憂愁を抱えてしまう、というのである。男の心変わりを題材にした歌ということになる。

ところで、この「たよりになみはうみとなりなん」は、『後撰集』所載の c 歌「あまの住む浦漕ぐ舟のかちをなみ世をうみわたる我ぞ悲き」と、「波」と「無み」、「海」と「憂」を掛ける点で共通している。f 歌については神宮文庫本系統の本文が本来的なものであり、享受の過程で c 歌の表現を利用して本文が改変された可能性も考えられるのではないか。第一章でも長歌に「浦こぐ舟のぬれわたり」という『後撰集』の小町詠由来の歌句が挿入されたことを見てきたが、「出所不明歌」の中には、このような語の改変によって『古今集』『後撰集』の小町歌との「表現の共通性」を獲得し、より小町の歌らしさを深めていったものも存在すると思われる。

③『小町集』における a・b 歌の位置付け

さて、こうした『小町集』の「基幹部分」の中で、前掲した『古今集』の小町の「あま」の歌二首（a、b 歌）がどのように扱われているのかについても見ておこう。この二首には以下のような詞書が附されている。

- ・ a 歌：唐草裝飾本詞書なし、神宮文庫本系統「つねにうらむる人に」、静嘉堂文庫本「常にみれどもあはぬよしうらむる人に」、歌仙家集本系統の承空本「ツネニクレドエアハヌラムナノ、ウラムル人ニ」
 - ・ b 歌：唐草裝飾本詞書なし、神宮文庫本系統「おなじころ」（その前に位置する「みるめなき」の歌と同じ時期に作られたということである）、静嘉堂文庫本「つらかりしといひたる人に」、歌仙家集本系統の承空本「ツネニクレトエアハヌラムナノウラムル人ニ」
- 唐草裝飾本以外の『小町集』は、この a・b 歌を何らかの事情で小町と夜を過すことができないことを恨む相手に贈った歌としているの

である。そこに抑揄や驕慢という姿勢を見ることが可能だろうが、注意すべきは『小町集』基幹部分の中に、小町のこうした姿勢の理由を説明するような歌が存在しているということだ。

むすびきといひけるものをむすびまついかでか人にとけてみゆべき

(唐草)

(唐草 19、神宮 45、静嘉 7、承空 8、書乙 8、正保 8)

この歌は、すでに別の相手と結ばれ、その相手を「まつ」現状において、どうして他の人に逢うことができようか、と詠むものである。この一首の存在により、懸想に否定的な態度を取る理由は明確化される。小町は別の相手を一途に思い、「ま」っているゆえに、求愛者に応えることがないというのだ。なお歌仙家集本系統はこの歌を、第一部の冒頭近く、a・b歌や、前掲した相手を拒絶する内容の「出所不明歌」の前に置いている。このような配列上の操作により、『小町集』所載の恋に否定的な歌々は、相手の心変わりを嘆く、相手を待つという小町の姿勢の中に包含されることになる。

④小町のイメージとの関係

以上見てきたことを纏めると、『後撰集』のc歌、『小町集』の「基幹部分」所載のd・f歌は、『古今集』の小町の「あま」の歌であるa、b歌の表現を継承しつつも、それとは反対の姿勢を前面に押し出した、男に見捨てられたことを嘆く女、来ぬ男を待つ女の歌となっていることが知られる。これらの歌々は田中氏が指摘するように『古今集』との「表現の類似性」を有しており、場合によっては『後撰集』の小町詠の表現を用いて本文が改変されている。そして歌の世界からは片桐氏が指摘するような「弱い小町、哀れな小町」のイメージが浮かび上がってくる。

また『小町集』の諸本は、別に思う相手がいるので、他の男の懸想には応えられない、という内容の「むすびきと」歌をも取り入れ、「来ぬ男を待つ女」という小町像の中にa・b歌から浮かび上がる「拒む・抑揄する」小町像をも包含しようとしているのである。このような『小町集』の「基幹部分」と、男を拒絶する態度に焦点を当てた『伊勢物語』二五段は、ともに十世紀、十一世紀のa歌の享受のありようを示しているのだろうが、この二つは方向性が異なるといつてよい。

そして十一世紀には『小町集』の撰歌意識と共通する「来ぬ男を待つ女」という小町像に少なからず焦点が当てられていたようである。藤原公任はその秀歌撰である『前十五番歌合』において一首、『三十六人撰』において三首、小町の歌を挙げているが、そこに引かれた歌は以

下の通りである。

色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にぞ有りける

〔前十五番歌合〕 15、〔古今集〕小町

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

〔三十六人撰〕 62、〔古今集〕春下 113 小町

思ひつゝ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを

(同 63、〔古今集〕恋二 552、小町)

色見えで移ろふものは世の中の人の心の花にざりける

(同 64、〔古今集〕恋五 797)

『前十五番歌合』『三十六人撰』ともに、相手の心変わりを題材に取った「色見えで」歌を採歌しており、公任がこの一首を小町の詠として高く評価していたことがうかがえる。『三十六人撰』ではほかに、「花の色」のうつろいを嘆く「花の色は」歌、夢に恋人を見て、夢と知っていたら覚めなかったのに、と詠む「思ひつゝ」歌の二首が選ばれている。

「花の色は」歌は『古今集』では春下に見える一首である。だがその内容は純粋な叙景歌ではなく、閨怨詩に見える、待つ女の容色を花にたとえてその衰えを嘆いた、以下のような表現の影響が指摘されている(注二二)。

南国有佳人 栄華若桃李(…) 俛仰歳将暮 栄耀難久恃

(卷二、曹植「南国有佳人」)

形迫杼煎絲 顔落風催電 容華一朝盡 唯餘心不變

(卷四、鮑令暉「古意 今贈人」)

また「思ひつゝ」歌は夢にしか逢えない関係を想像させる一首である。いずれも現実世界の恋の不如意を嘆く女の歌として捉えられる歌々で、『古今集』の「あま」の歌に見られるような恋に否定的な姿勢は見られない。

なお、興味深いのは第一章で『小町集』を享受している可能性を示した能因法師、相模も、こうした小町像を共有している可能性があることだ。能因法師はその家集『能因法師集』において、小町が夢の中で「わかをかたつ」たさいに詠んだ歌として「まてといひしときよりかねてあかなくにかへらん君となげきしものを(榊原家蔵『能因法師集』⁶³)」を挙げる。これは男が逢瀬のあと、帰っていつてしまうのを嘆く歌である。

また『小町集』の「出所不明歌」撰取が見られる相模も、以下のように「つつむことありてたまさかに見ゆる人」との関係において我が身を小町に進えている。

つつむことありてたまさかに見ゆる人、しづ心なくてあはただしき心地のみすれば、思ひたらむもうるさうて、小町が言ひけむやうに

あふことぞやがても憂きあかつきの夜深き別れ思ひ出づれば

(浅野家本『相模集』²⁰⁰)

ここで「小町が言ひけむやうに」とされている歌が具体的に何を指しているのかは明らかでない。だが、「夜ぶかき別れ」を予期してしまふと、逢瀬が億劫で苦しいもの感じられる、という内容の歌を「こまち」の詠に重ねている点、注意される。これらの例から分かるのは、平安中期において、公任や能因法師、相模が注目していた小町像が「来ぬ男を待つ」方向に傾斜していたということだ。『小町集』の撰集、増補に関わった人々もこのような小町像を共有し、それに沿って『古今集』の小町詠を再解釈しつつ家集を編もうとしていることを窺わせるのである。

六、歌仙家集本系統における展開

①「コギ、ヌヤ」歌と「スマノアマノ」歌

次に、歌仙家集本系統においてはじめて現れてくる歌を見てみたい。これらの歌は、「あま」の語を詠み込んではいないものの、『古今集』の小町の「あま」の歌（a、b歌）の表現世界からは、c、f歌よりもさらにかき離れている。まずは以下の二首を見よう。これらは歌仙歌集本系統においてはじめて取り上げられた歌である。

g コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ

（承空）

（唐草、神宮、静嘉なし、承空⁴⁶、書乙⁴⁵、正保⁴⁴）

h ^{アマノスム}スマノアマノウラコグフネノカヂヨリモヨルベナキミゾカナシカリケル

（承

空）

（唐草、神宮、静嘉なし、承空⁷⁹、書乙⁷⁸、正保⁷⁷）

まず「コギ、ヌヤ」歌は、まず「フネ」が漕いで来るといふ表現が『後撰集』のc歌と共通し、また「アマ」が「カゼマ」を待つという表現が、唐草裝飾本以外の『小町集』に見え、古くから『小町集』に存在していたと見られるf歌と共通する。以下に二首を併記してみよう。

コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ

c あまの住む浦漕ぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲き

f かぎまゝつあましかづかばあふ事のみるめもなしとは思はざらまし

また、この歌の第四句「ニクサミカケル」が『小町集』諸本に共通して見える長歌の「みくさみ」を「かけ」る、という表現に拠っている

ことは第一章で述べた。f歌も長歌も「出所不明歌」であり、小町の真作とは考えにくい。しかしそうした歌々が小町の歌として伝来し、『小町集』に収められることで、それらと共通した表現を有する新たな歌が『小町集』に収められることとなったのであろう。

その内容は単純に「アマ」の働く海辺の景を詠んだものとも取れるが、「アマ」を相手の男と取って、逢瀬の障害がある中で、舟に波よけの覆いである「ニクサミ」をかけて、よくもまあ自分の元に通ってきたものだ、と解釈することも可能であろう。

次に「スマノアマノ」歌であるが、この歌もまた『後撰集』のc歌と表現が近似している。
スマノアマノウラコグフネノカチヨリモヨルベナキミヅカナシカリケル

c あまの住む浦漕ぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲き 承空本の第一句には「アマノスム」という異文が注記されているが、この異文を有する本文では、第一句、第二句と第三句の「カチ」までがc歌と一致し、下二句で「あまの住む」歌同様に、我が身の悲しさを詠んでいることになる。これはc歌を踏まえて作られた歌、あるいは異伝歌と見るべきであろう。こちらのほうが、舟によそえられた寄る辺なき我が身の姿がいつそう明確に浮かび上がってくる。

これまで見てきた「あま」の歌は、いずれも『古今集』のa、b歌の表現を踏襲したものであった。しかし歌仙歌集本系統に初出の歌では、その中に『後撰集』のc歌や、『小町集』「基幹部分」のf歌とも共通する表現が見出せる。『小町集』に増補された歌が、それと表現が共通する歌をさらに結び付けてゆく、連鎖的な増補とでもいうべきものを、ここに見ることができよう。

②詠者自身を「あま」とする歌

また、歌仙歌集本系統にのみ見られる歌の中には、「あま」を相手の男ではなく、出家し「尼」となった詠者自身をさす語として用いているものが以下のように見られる。

i ヨノナカライトヒテアマノスムカタハウキメノミコソミエワタリケレ

(承空)

〔後撰集〕雑四¹²⁹⁰小町が姉／唐草、神宮、静嘉なし、承空⁹、書乙⁹⁰、正保⁸⁹

j ハルノヒノウラク／ゴトライデ、ミヨナニワザシテカアマハスグスト

(承空)

〔重之集〕²²⁹／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹¹¹、書乙¹⁰⁵、正保¹⁰⁴

i 歌は本来『後撰集』の小町姉の歌であり、「アマ」に「海人」と「尼」、「ウキメ」に浮かんた海藻という意の「浮き布」と、辛いさま、惨めなさまをあらわす「憂き目」が掛けられている。『古今集』の詠人不知歌「うきめのみおひてなぐる、浦なればかりにのみこそ海人は寄

るらめ『古今集』恋五¹⁵⁵、詠人不知」同様の「うきめ」の用法であり、世を厭い出家、閑居しているものの、辛さや惨めさばかりが目に入ってくる、という。また『古今集』雑下には、「あま（海人／尼）」と「うきめ（浮き布／憂き目）」を詠んだ以下のような贈答も見える。

題しらず

我をきみなにはのうらにありしかばうきめをみつにあまとなりにき

〔古今集〕雑下⁹⁷³、詠人不知

この歌は、ある人、昔、男ありける女の、男訪はずなりにければ、難波なる三津寺にまかりて、尼になりて、よみて、男に遣はせりけるとなむ言へる

返し

なには鴻うらむべき間も思はずいづこをみつにあまとかはなる

（同⁹⁷⁴、詠人不知）

男に忘れられた女が「うきめ」を「み」て「あま」になったというストーリーを付随させるこの贈答に、i歌との関係を見てよいだろう。なお静嘉堂文庫本系統はi歌を持たないが、この「我を君」歌を出家した小町の詠として載せ、返歌である「なには鴻」歌をも記している。次にi歌は『重之集』において、百首歌の「春」廿首の中の一首として載るもので、第二句「ウラ／＼ゴトヲ」には、幾つもの浦という意の「浦々」と、うららかに、のどかに、という意の「うらうらに」が掛けられている。その内容は「麗らかな春の日に浦々ごとを出て見てください、どのようにして海人は暮らしているかを」というものであるから、本来は屏風に描かれた海人の営みから着想を得た歌であったのではないか。しかし『小町集』の一首として考える場合、「あま」は詠者とイコールで結ばれるとも解釈できる。その場合、i歌同様に、「海人」と「尼」が掛けられており、自分の出家を信用しない男に対して、信用出来ないならば私がどの様に暮らしているかを見に来てくさい、と述べたものとも解釈しうるだろう。

するとこの二首では、海辺の景が「基幹部分」の歌々のように「男を待つ」女の心情描写に用いられるのではなく、「尼となって世を離れ閑居する」女の姿を浮かび上がらせるものとなっている。このような小町像は、『源氏物語』の雨夜の品定めにおいて左馬頭が語った、恋の不如意に苦しんだ「物語」の女が「世離れたる海づら」に隠遁する、というエピソードをも連想させるものである。

（前略）艶にものはぢして、うらみ言ふべきことを見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心ひとつに思あまる時は、言はん方なくすぎ言の葉、あはれなる歌を詠みをき、しのばるべき形見をとめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるおりかし。童に侍しとき、女房などの物語読みしを聞きて、（後略）……

〔源氏物語〕帚木卷、依拠本①四一頁

こうした「物語」のイメージで小町の晩年を捉えることが行われ、若い頃にさまざま恋とその苦悩を体験した小町は、老境にさしかかっ

て「世離れたる海づら」に閑居したと考えられるようになったのではないか。

おわりに

以上、『古今集』の a、b、『後撰集』の c、『小町集』の「基幹部分」の歌である d、e、f、歌仙歌集本系統の『小町集』独自の増補歌である g、h、i、j、という順番で「あま」を詠む歌々を見てきた。『古今集』の小町の「あま」の歌二首（a、b）は、恋に対して否定的な態度を取っている。いっぽう『後撰集』や『小町集』の「基幹部分」に存する c、d、e、f 歌は、『古今集』の a、b 歌を表現の上で継承しつつも、その内容面ではそれ以外の『古今集』から読み取れる、夢の逢瀬を求め、我が身の容色や人の心の移ろいを嘆く小町像に近いものとなっている。あたかも、a、b 歌における態度を修正し、本来在るべき姿を詠み込んでいるかのようである。そして歌仙歌集本系統ではそこに、i、j 歌という、小町自身が出家遁世したことを暗示するような歌々を置いている。『小町集』の「基幹部分」と歌仙歌集本系統の独自増補において、それぞれに一定の方向性を見ることができるのである。

しかし、なぜこのように「あま」の歌が多く増補されたのであろうか。「あま」から離れて水辺の景を詠む歌に広げてみると、『後撰集』所載の小町歌四首中、c 歌を含む三首がそうした歌として該当する点も注意される。

男の気色をやうくつらげに見えければ

心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞなき

〔『後撰集』恋三 77、小町／唐草なし、神宮 4、静嘉 2、承空 2、書乙 2、正保 2〕

定めたる男もなくて、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のかちをなみ世を海わたる我ぞ悲き

〔『後撰集』雜一 1090、小町／唐草なし、神宮 5、静嘉 4、承空 3、書乙 3、正保 3〕

海のとりにて、これかれ逍遥し侍けるついでに

花咲きて実ならぬ物はわたつうみのかざしにさせる沖つ白波

〔『後撰集』離別羈旅 1360、小町／唐草、神宮、静嘉なし、承空 12、書乙 11、正保 11〕

『古今集』成立以降、平安中期にかけての小町のイメージが、水辺の世界と密接に結びついていたことを知るのである。

その理由のひとつとして考えられるのは、『古今集』仮名序の小町評「小野小町は、古の衣通姫の流なり」である。次章で詳述するが、この「衣通姫」は允恭天皇の皇后の妹、弟姫をさす。そして『古今集』の伝本の中には、『日本書紀』允恭天皇条が伝える、衣通姫が河内の茅渟で天皇の稀な訪れを待つ境遇にあつて詠んだ「衣通姫の帝に献歌」とこしへにきみもあへむやいさなとるおきの玉もよる時々に（元永本恋五 761 の次にあり）を載せているものが見受けられる。『古今集』の「あま」を詠む a、b 歌に、衣通姫の歌と共通する要素が読み取られた可能性も考えられよう。

また、「あま」及び海辺の情景に対する、当時の認識の反映を考へることできる。海辺の景は屏風絵に描かれ、恋の歌にも少なからず詠まれたが、そこで働く「あま」たちは生命の危険を冒しながら海に入ってゆく存在であった。『枕草子』「うちとくまじき物」において、清少納言は海辺の「あま」のいとなみを以下のように綴っている。

海は猶ゆゝしとおもふに、まいて、海女のかづきしに入るは、うきわざなり。腰につきたる緒の、絶えもしなばいかにせんとならん。男だにせましかばさてもありぬべきを、女は猶おぼろげの心ならじ。舟に男は乗りて、歌などうちうたひて、この桡繩を海に浮けてありく。あやうく、うしろめたくはあらぬにやあらん。のぼらんとて、その繩をなんひくとか。惑ひくり入るゝさまぞ、ことわりなるや。舟の縁をおさへてはなちたる息などこそ、まことにたゞ見る人だにしほたるゝに、落しいれてたゞよひありく男は、めもあやにあさましかし。

（「うちとくまじき物」の段、依拠本三二六～三二八頁）

c 歌やh 歌に詠まれた「あま」の生活空間を漕いでゆく「舟」とはこのようなものであり、そこに乗っている女たちは腰の繩だけを頼りに水底に潜ってゆく、きわめて不安定な存在であった。c 歌、h 歌で作者が寄る辺なき身をよそえているのがただの舟でなく、「あまの住む」浦の舟として表現された背景には、こうした「あま」の「舟」観が介在していたのではないか。それは来ぬ男を「あま」によそえる歌々（d、e、f）でも同じである。こうした寄る辺なき「あま」の生活空間のイメージを導入することで、そこに詠み込まれた恋の不如意はきわめて不穏な印象を帯びて立ち上がってくる。

また注目したいのは、『新撰朗詠集』が『後撰集』の小町詠、「心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞなき」を遊女が口ずさんだとしていることである。

遊女欲乗商人船船人以梶打懸水以袖掩而泣唱此哥云作者小野小町

心からうきたる舟に乗初てひと日も浪に濡ぬ日ぞなき

（『新撰朗詠集』、遊女）

ここから浅見和彦氏（注二二）は、小町の漂泊的な歌が遊女たちにうたわれ、そして遊女たちの歌が「小町的なるもの」を造成して家集に流入していった可能性を指摘しており、興味深い。歌に水辺の光景や舟というものを詠みこんでいるからといって、必ずしも遊女の関与を見るべきではないのは確かである。だが水辺で「待つ」女であった遊女たちが、『古今集』『後撰集』の小町詠に見える「うらみむ」「浮き」「舟」「なみ」「世をうみわたる」といったことばの持つ寄る辺のない女の哀愁に共感し、その変奏歌を詠み出だした可能性は高いと言えよう。ことにg 歌に詠まれた「ニクサミ」の用例は極めて少ないことを第一章で見えてきたが、そのような特異な語が『小町集』に存しているのは、その作者が中央の貴族ではなく、舟上で生活する者であったためとも考えられる。

注

注一…片桐洋一『小野小町追跡』(笠間書房、一九七五年)

注二…田中喜美春『小町時雨』(風間書房、一九八四年)

注三…黒岩周六『小野小町論』(一九一三年、朝報社)

注四…大西貞治「小野小町に就て」(『国語と国文学』一九二六年八月)

注五…関谷真可禰『小野小町秘考』(一九三三年、雄山閣)

注六…前田善子『小野小町』(三省堂、一九五三年)

注七…注一片桐氏前掲書。

注八…藤平春男「はかなさ」(『国文学 解釈と鑑賞』四一・一、一九七二年一月)

注九…武田早苗『小町集』管見—唐草装飾本の位置—伊藤博、宮崎莊平編『王朝女流文学の新展望』(竹林舎、二〇〇三年)

注一〇…島田良二『平安前期私家集の研究』(桜楓社、一九六八年)

注一一…このように同様の題材、表現を有する歌を小町に結び付けた例は、十世紀後半の『古今和歌六帖』にも見出せる。『古今和歌六帖』は、『拾遺集』詠人不知歌である以下の一首を小町の詠として載せている。

たらちねのおやのいさめしうたゝねはものおもふときのわざにざりける

〔古今和歌六帖〕第四、うたゝね、
(こまちある本)

この歌は「うたゝね」を詠む点で、先に見た『古今集』の「うたゝねに」歌と共通している。

注一二…注一〇島田氏前掲書。

注一三…久保田淳「海人」久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店、一九九九年)

注一四…明川忠夫 近畿民俗叢書第七卷『小町伝説—聖視と賤視—』(現代創造社、一九八七年)

注一五…竹岡正夫『古今和歌集全評釈』下(右文書院、一九七六年)

注一六…注一五竹岡氏前掲書。

注一七…片桐洋一『古今和歌集全評釈』中(講談社、一九九八年)

注一八：鈴木日出男「女歌の本性」 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会、一九九〇年）

注一九：今関敏子『色好み』の系譜―女たちのゆくえ』（世界思想社、一九九六年）

注二〇：小沢正夫、松田成穂校注 新編日本古典文学全集 11 『古今和歌集』（小学館、一九九四年）は、「小町にこのような歌があるので、深草少将の百夜通いの説話が生まれたのだろうか。」とする。また木戸久二子「伊勢物語の古注における小野小町」『中古文学論攷』第十一号、一九九〇年）は、a 歌と『壮衰書』の主人公の驕慢な姿勢とが結合したところに百夜通い説話の成立を見ている。

注二一：山口博『閨怨の詩人 小野小町』（三省堂、一九七九年）

注二二：浅見和彦「小町変貌」『成蹊国文』九、一九七六年一月）

第三章 『小町集』における「山里」——屏風絵の「山里の女」との関わりから——

はじめに

『古今集』及び『後撰集』の小町歌に「山里」の語を詠んだものは存在しない。だが、『小町集』には「山里」を詠んだ歌三首が見える。

秋の月のあはれなるを

a 山ざとのあれたるやどをてらしつゝいくよへぬらんあきのよのつき

(唐草)

b ヒグラシノナク山里ノユフグレハカゼヨリホカニトフ人モナシ

(『古今集』秋上 20⁵、詠人不知／唐草、神宮、静嘉なし、承空 4⁴、書乙 4³、正保 4²)

c ヤマザトハ物サミシカル事ノワビシキトキコソアレノウキヨリハスミヨカリケリ

(『古今集』雑下 9⁴⁴、詠人不知／唐草、神宮、静嘉なし、承空 11⁸、書乙 11¹、正保 11⁰)

その中でも本章でことに注目したいのは、最初に掲げた a 歌である(注一)。b、c の歌が歌仙家集本系統にしか見られない『古今集』の詠人不知歌で、小町の真作とは認めがたいものであるのに対し、この歌は『小町集』四系統六類のすべてに見える「出所不明歌」であり、『小町集』の基幹部分をなすものといえる。仮に真作ではなくとも、比較的早い段階から小町の作として伝来していた可能性が高い一首なのである。以下では、この歌が『小町集』において、いかなる状況に置かれた小町の詠として位置付けられているのか、という点を明らかにする。そして『小町集』における山里の位相と、『小町集』の撰者によって小町と「山里」という場所が結びつけられた理由についても考察を加えてみたい。

一、閑居する小町——歌仙家集本系統の『小町集』——

a 歌は従来、老残の小町が厭世の念を起こして山里に閑居した際の詠と解されてきた。前田善子氏は a 歌を、『平家物語』の大原行幸の一節を偲ばせる「侘しさに徹した老年の心境」が詠まれた歌であると述べ(注二)、片桐洋一氏は『小町集』では小町が「憂き世を捨てて山里に隠れ住んだという設定」の元に、a 歌を始めたとした「山里」の歌々が収められたとする(注三)。いっぽう角田宏子氏は「小町伝説に見

る零落したなれの果ての姿」として解することを否定しながらも「晩年の歌のような静けさ」「人生の時間と時代を経て来たがゆえの心の安らかさ」をa歌の中に読み取っている（注四）。こうした解釈は島内景二氏（注五）も指摘するように、歌仙家集本系統でa歌の二首前に置かれている歌に由来しているよう。

ヤヨヤマテヤマホト、ギスコトツテンワレヨノナカニスミワビヌトヨ

（承空）

（『古今集』夏、15²、三国町／唐草、神宮、静嘉なし、承空7、書乙7、正保7）

これは『古今集』夏部に三国町の歌として収められており、明らかな他人歌である。この歌では山から来て山へ帰る存在である山ほととぎすに対して、山に隠棲する人に私が世中にすみわびていることを伝えて欲しい、と詠む。『小町集』においては「世の中」の苦しみから逃れて「山」に住むことを望んだ小町の詠として読めるものである。そして「ヤヨヤマテ」歌とa歌に関係を見た場合、a歌は恋愛遍歴の果てに隠棲した小町が月を眺め、物思いに耽っているものとして理解される。そのような所からc歌も『小町集』に収められたのだろう。

そして、このような山里に隠棲する老小町像は中世以降も継承された。謡曲『通小町』では「八瀬の山里」の西方の地である「市原野」に、御伽草子『小町草紙』では小野の里に、老小町が閑居している。

さて、「山里」の語は『萬葉集』に見えず『古今集』に初出であり、「平安京周辺の郊外の山中の人里、山村、山家」（注六）をさす。『古今集』における山里は華やかな都と対比される、物寂しい不毛の地であるが、それゆえに都の価値観や煩わしさから離脱を図ることが可能であり、都に比べれば「かえって住みよいかもれない地」（注七）であった。ただし斎藤由紀子氏（注八）が指摘するように、「山林・野山に入る・まじる」は出家の表現として用いられるが、山里は「宗教的空間への過渡的な場としてもちこされ」る「不本意ながらの生活の場」である。都人の山里住みは厭世によってなされるが、山里住みと出家は同義ではない。

そして『源氏物語』帚木卷、雨夜の品定めにおける以下の左馬頭の発言は、女がこのような山里に住むということが、彼女たちを圍繞する「世の中」——すなわち男との関係性からの離脱を試みるという意味を持つていたことを示すものとして注目される。

艶にものはぢして、うらみ言ふべきことも見知らぬさまに忍びて、上はつれなくみさをづくり、心ひとつに思あまる時は、言はん方なくすごき言の葉、あはれなる歌を詠みおき、しのばるべき形見をとどめて、深き山里、世離れたる海づらなどにはひ隠れぬるをりかし。

（『源氏物語』帚木卷、依拠本①四一頁）

その具体例としては『後撰集』の「山里」に籠もる女の詠（雑二、一一七四・一一七五）、『伊勢物語』一〇二段の尼となり山里に籠もった「あてなる女」、『宇津保物語』の実忠北の方と袖君、そして『源氏物語』の夕顔が挙げられる。「世の中」の煩わしさを厭い、恋愛を拒否して隠棲するのが彼女たちの取った方法であった。

このような「山里の女」像は、歌仙家集本系統の『小町集』における、a歌をはじめとした山里の歌の理解と重なるものである。しかもそれは、第二章において見た、歌仙家集本系統にのみ存在する以下のような歌々と響き合いもする。

ヨノナカライトヒテアマノスムカタハウキメノミコソミエワタリケレ

〔後撰集〕雑四¹²⁹⁰小町が姉／唐草、神宮、静嘉なし、承空⁹¹、書乙⁹⁰、正保⁸⁹）

（承空）

ハルノヒノウラク／ゴトヲイデ、ミヨナニワザシテカアマハスグスト（承空）

〔重之集〕²²⁹／唐草、神宮、静嘉なし、承空¹¹¹、書乙¹⁰⁵、正保¹⁰⁴）

この二首が、海辺に「あま」となって閑居する小町の姿、そして帚木卷の左馬頭が語る女の姿を連想させることは先述した。これらの例から、歌仙家集本系統が増補を重ね、成長してゆくにあたり、「晩年、世を遁れて人里離れた山里や海づらに閑居する小町」というイメージが意識されていたことが浮かび上がってくるのである。

二、屏風絵の「山里の女」

しかし、『小町集』の古い形を留めていると考えられる唐草裝飾本をはじめとする他系統の伝本は、山里を詠むa c歌のうちa歌以外を収載しておらず、山里での閑居を希求する「ヤヨヤマテ」歌も見えない。山住みを希求し、そこに安住する老小町の姿は、歌仙家集本系統以外の『小町集』においては前面に押し出されていないのである（注九）。

それでは本来、a歌はどのような状況に置かれた小町の詠として収められたものであったのか。この問題を考えるうえで注目すべきは、神宮文庫本系統の諸本が伝えるa歌の詞書が「山ざとにて、秋の月のおほりに、むつれしに」となっていることである。慣れ親しむという意の動詞「むつる」は以下のように、男女の逢瀬の様子を表現する語として用いられることがある。

恋のごとわりなき物はなかりけりかつ睦れつゝかつぞ恋しき

〔後撰集〕恋一⁵⁸³、詠人不知

わがせことさよのねごろもかさねきてはだへをちかみむつれてぞぬる

〔好忠集〕²⁷²

この詞書は、a歌が恋を放棄した老小町の詠ではなく、山里で恋人と逢う小町の詠として解釈されていたことを示している。十一世紀には成立していたであろう『小町集』の始発の段階におけるa歌の解釈は、このようなものだったのではないか。

この問題と関わって注目すべきは、平安期の文芸作品に見られる「山里の女」が一樣に「世の中」を通れた存在として捉えられる訳ではないということである。山里を詠んだ屏風絵は『貫之集』をはじめとした『古今集』撰者時代以降の私家集に散見され、山里の様子を大和絵に描くことが好まれたことが分かるが、その中には山里に住む「女」を描いたものも少なくない。以下に、そのような絵を見て詠まれた屏風歌を掲出する。

やまざとなるをんなに、をとこきてものいふ

ゆふぐれになれはきこゆるすむしをおもふはかりのたよりなりせば

やまざとなるをんな、しかのねをきよて

つまこふとしかなくときになりけりわがひとりねをたれにきかせむ

ゑのところに、やまざとにながめたるをんなあり

ほとゝぎすなくに

宮こ人ねでまつらめやほとゝぎすいまぞやまべをなきてすぐなる

ゑに、やまざとなるをんなの、つらつえをつきて、人まつかた、かきて侍しところに

すみしれる月とみつるにことゝはん人まつよひの秋の山かぜ

このような「山里の女」は、隠遁者ではなく「人まつ」存在として捉えられる。『古今集』撰者時代以降の山里の景を詠む屏風歌の隆盛

や、『拾遺集』時代に貴族の山荘が「山里」と称されて積極的に山里の自然美が見出されるようになったことは山里観を大きく変化させ、

『拾遺集』時代の山里は物寂しい不毛の地から、風流を楽しむ非日常の空間へと変質した（注一〇）。

亭子院歌合の時、よめる

見る人もなき山里のさくらばなほかのちりなんのちぞさかまし

この歌にあるように、觀賞する人もなく季節が終わることが惜しまれていた山里の自然美は、かえって他人が賞翫しないゆえに独占可能なものとなる。そして山里の「美」は、山里に隠れ住む「女」と重ねられ、山里で美女を見、独占することが中央の貴族たちによって夢想

されたのである。一人の男を待つ女とは、その男に独占されている女に他ならない。そして女が、他にその価値を見出す者がいない「見る人もなき山里」に在ることにより、男の独占は強固なものとなる。このような独占への欲求が「山里」の恋、そして「人まつ」女という

画像を作り上げたのである。

なお『後撰集』には次のような恋歌が見え、この頃には「山里」が隠遁の場のみならず、男を待つ空間として認識されていたことが分かる。

男の「来む」とて来ざりければ

山里の真木の板戸も鎖さざりきたのめし人を待ちし宵より

そして「山里で男を待つ」という屏風絵の女の系譜を引く物語の女君としては、『源氏物語』の明石君、及び浮舟が挙げられる。源氏はその「山里のつれづれ」

を慮るものの、宮仕えや紫の上の存在といった公私の憚りゆえに訪れは間遠となり、彼女は「おぼつかなき」我が身の憂さを嘆く。

また浮舟は父親である八の宮に認知されず、受領の後妻となった母、中将の君と共に東国へ下る。その後、薫により宇治という「山里」

（『後撰集』恋一⁵⁸、詠人不知）

（西本願寺本『忠見集』47）

（同、57）

（書陵部蔵（五〇一・一一二）本『道綱母集』38）

（島原松平文庫蔵『兼澄集』134）

伊勢

『古今集』春68）

92

に隠されるのである。『更級日記』で少女時代の菅原孝標女はどのような浮舟に憧憬を抱き、以下のように述べている。

物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑら
れて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時々／＼見などこそせめ、（『更級日記』三九八頁）
菅原孝標女もその幼少時を東国で過ごした受領の娘で、浮舟と近い出自の人物であったことに注意しておきたい。このようなことから、
身分が低い、もしくは「鄙」の育ちであることが「山里の女」を構成する要素と想定される。身分や出自故に正式な妻とは認められず、山
里に隠されて高貴な男性と密かに逢瀬をもつ女が「山里の女」であり、身分差と「山里」の都からの距離ゆえに、男の訪れは間遠であつた
のである。

三、小町と「山里の女」の接点

そして、実はこのような「山里の女」は、平安中後期において共有されていた小町のイメージと重なり合う部分が大き。まず『古今集』
の仮名序は、小町をはじめとする六歌仙を「古の事をも、歌をも知れる人、詠む人」の中でも、「官、位、高き人」以外で「近き世に、そ
の名聞えたる人」とする。小町の実際の出自はともかくとして、貫之は六歌仙を、官位は高くないが和歌に優れている者たちとして認識し
ていた。それはこの時代の小町の身分についての理解をそのまま反映している。そして平安後期になると、『三十六人歌仙伝』や『古今
集目録』といった歌人伝が小町を「出羽郡司女」とする。小町は、浮舟などと同じ東国に出自をもつ「鄙」の女として想像され、語られて
いたのである。こうした小町の出自についての理解は先に述べた「山里の女」のそれと重なる。

また『古今集』仮名序の小町評を見ると、小町の歌は「古の衣通姫の流」とされている。ここでいう「衣通姫」はその詠が『古今集』
墨滅歌や異本歌に見出せる、允恭天皇の皇后の妹、弟姫である。藤原宮や河内の茅渟に住み、天皇の訪れを待っていた衣通姫の歌として『古
今集』の墨滅歌や異本歌に見えるのは、以下の二首である。

思ふてふ言のはのみや秋を経て下

衣通姫の、独り居て、帝を恋ひ奉りて

わが背子が来べき宵也さゝがにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも

衣通姫の帝に猷歌

とこしへにきみもあへむやいさなとるおきの玉もよる時々に

これらの歌々は天皇の訪れを待ちわびる内容で、また「わが背子が」歌は「蜘蛛の振舞ひ」をもとに待ち人の来訪を占う俗信を背景とし
た歌だが、蜘蛛じたいは六朝期の『玉台新詠』などに多く収められている閨怨詩、すなわち愛を失って嘆く閨中の美女を歌った詩にも散見

されることが山口博氏(注一一)によって指摘されている。この二首から浮かび上がってくるのは、天皇との「空間的隔絶」によって齎された「時間的隔絶」(注一二)の中で「時々」しか来ぬ帝を待ち、「独り居」る衣通姫の姿である。このような衣通姫の姿は、閨怨詩に描かれる、寵を失った宮女や、遠方に旅立ったまま帰らぬ夫を待つ女の姿をも連想させる。

そして後藤祥子氏(注一三)や山口氏が指摘するように、『古今集』所収の小町歌の発想、表現にも閨怨詩の影響が強く見られるのだが、そのような『古今集』所収の小町歌十八首中、六首が夢の逢瀬と関わる内容である点は注目してよい。和歌において、これは二人の間に障害が存在するために、現実の代替として希求されるもので、『玉台新詠』所載の閨怨詩の中にも巻五「夢見美人」、巻六「為人述夢」など、夢を題材にしたものが少なくない。そして以下に掲げる小町の夢の歌からは、空間的、時間的な相手との隔絶により、現実の訪れは稀であり、僅かに「夢」でしか逢うことが望めないという恋のありようが読み取れる。

思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを

〔古今集〕恋二 552

現にはさもこそあらめ夢にさへ人目を守ると見るがわびしき

(恋三) 656

ゆめぢには足もやすめず通へども現にひとめ見しごとはあらず

(恋三) 658

後藤氏はこうした歌を虚構的な性格のものと考えているが、それが真情を詠んだものかどうかという問題はさておき、これらの「独り居」て相手を「恋」うような歌、ことに「思つゝ」歌のような、自ら相手を思つて夢に見、その世界に沈滞してゆくようなたまたまの歌が、衣通姫の詠作に通じることは確かである。それが、小町が「衣通姫の流」と呼ばれた原因であろう。そして歌の内容から、小町の実人生も「衣通姫的」であり、現実世界で恋人と自由に逢うことが出来なかつた、と想定された可能性は高い(注一四)。

そのような想定をもとに小町の生を想像してゆきたい、肉付けに用いられたのが、『古今集』撰者の時代から屏風絵に描かれていた「山里の女」ではなかつたか。そして衣通姫が宮廷から離れた場所で天皇の僅かな訪れを待ったように、小町もまた都から離れた「山里」に隠され、来ぬ人を待っていた、と考えられたのではないか。

四、「荒れたる宿」と「山里」と「月」

さて、このような視点からa歌を捉えるとき、第二句の「荒れたる宿」という表現が注意される。これは一見、老年期の隠棲の場の表現と捉えられそうだが、中野方子氏(注一五)によればこの語は蜘蛛の巣が張り、寝所に塵が積もり、庭に草が繁るといふ、閨怨詩の「来ぬ人を待つ女」の邸宅の形象に由来する歌語であった。平安前、中期には、荒廃した邸宅は男の来訪が途絶えた為に精神的、物質的な抛り所を持たない女の住居として、そして男女の出会いの場として、漢文、和文を問わず以下のように描かれてゆく。その中に「荒れたる宿」の語が見出せるのである。

守空閨 妾獨啼 虚座塵暗 空階草萋(…) 丈夫何時凱歌歸 不堪獨見落花飛 落花飛盡顔欲老 早返應見片時好

(『文華秀麗集』²、朝野鹿取「奉和春閨怨」)

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、(…)階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿をうぐひすの人來と鳴くやたれとか待たむとひとりごつ。

(『大和物語』一七三段)

築地など崩れたるが、さすがに葎など上げて、簾かけ渡してある人の家あり。簾のもとに、女どもあまた見えたれば、この男、ただにも過ぎで、「なかその庭は心すごげに荒れたる」などいひ入れたれば、「誰ぞ、かういふは」など問ひければ、「なほ、道ゆく人ぞ」といひ入る。築地の崩れより見いだして、この女、

人のあきに庭さへ荒れて道もなくよもぎしげれる宿とやは見ぬと書きて、いだしけれど、もの書くべき具、さらになかりければ、ただ、口移しに、男、

誰があきにあひてあれたる宿ならむわれだに庭の草は生さじ

(『平中物語』三六段)

また、a歌の第五句には秋の「月」が詠み込まれているが、中国六朝の閨怨詩にも、平安初期のそれにも「明月」が「空閨」を照らすという類型が存在しており(注一六)、「月」と荒廢した邸宅の女の組み合わせは以下の例のように、来ぬ男を待つ女性が独り寝をかこち、月を眺める様の表現となる。

此日愁思春草萎 階前花積妾不掃(…)愁向高樓明月孤 片時枕上夢中意 幾度往還塞外途

(『文華秀麗集』53、巨勢識人「奉和春閨怨」)

(同、57、巨勢識人「奉和長門怨」)

日夕君門閉 孤思不暫安 塵生秋帳滿 月向夜床寒
なお「月」と「荒れたる宿」の女の取り合わせを詠んだ歌も以下のようにあり、十世紀後半から十一世紀前半に活躍した『輔尹集』の例は屏風歌である。

かくて、のちもなほ間遠なり。月の明き夜、うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

(『和泉式部日記』三七頁)

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと

あれたるやとに月みる女あり、水にかけうつりたるに、また人なし

(彰考館文庫蔵(巳・八)『輔尹集』58)

いかにすむ水にかゝけのかよふらんとしくることにくる人もなし
そして注目したいのが、以下に掲げる『源氏物語』の箇所である。ここでは荒廢し、雪の積もった末摘花の屋敷が「山里の心ち」と表現されている。

御車寄せたる中門の、いといたうゆがみよるぼひて、夜目にこそしるきながらもよろず隠ろへたる事多かりけれ、いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみ暖たかげに降りつめる、山里の心ちしてもあはれなるを、かの人くの言ひし律の門は、かうやうな

る所なりけむかし、げに心ぐるしくらうたげならん人をこゝに据ゑて、うしろめたう恋しと思はばや、…

(『源氏物語』末摘花巻、依拠本①二二六頁)

末摘花の屋敷は、「山里の女」が男を待つ屋敷と、「荒れたる宿」の二重写しになるように描かれているのである。この光景を目にした源氏は「かの人々の言ひし葎の門」はこのような場所だろう、と考へ、「げに心ぐるしくらうたげならん」女性をこうした屋敷に「据えることを思っている」。

ここで源氏が回想するのは、雨夜の品定めにおける「世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかにらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおぼえめ」(『源氏物語』帚木巻、依拠本①三七頁)という発言であった。「世にありと人に知られ」ぬ場所での、理想の女性の占有への欲求が語られる場面といえる。山里も「荒れたる宿」も、そのようなことを可能としてくれる場であり、そこに隠される女性は男以外に頼る相手もなく、不安と希望との間で揺曳しながら相手を待ち続けることとなるだろう。

こうした十一世紀ごろまでの「荒れたる宿」をめぐる用例から、「山里」の「荒れたる宿」で「月」を眺める女の姿が読み取れるa歌についても、その始発の段階では小町が己の意志で遁世した際の詠ではなく、山里に「閉ぢ」られ、荒れ果てた家で男を待ち、月を眺める小町の詠として理解されていたと考へるべきではないか。

するとa歌の下二句「いくよへぬらんあきのよのつき」は、「月」の光が荒れ果てた空闇を照らす長い年月への詠嘆と解せるであろう。「いくよ」には「幾世」と「幾夜」が掛けられている。月夜には男の来訪が期待されるが、相手が来ない場合、都と隔絶した物寂しい「山里」に在る小町は月を眺めて心を慰めるしかない。そのような日々が続く中で相手に逢わないまま年月は「経」り、小町は日々満ち欠ける月を眺め、時間の推移と、訪れないその月日の長さを実感する。それがa歌の本来の内容なのではないか。

なお、次に掲げる『古今集』の小町歌二首は、小野小町という人物が時間の経過、則ち「経」ることによる「花の色」や相手の「言の葉」の「うつろひ」を注視し、詠嘆していたことを窺わせる。

(『古今集』春下¹¹³)

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

(同、恋五⁷⁸²)

今ほとわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり

a歌は、この「うつろひ」への注視の姿勢をも受け継いでいよう。月日が経つにつれ荒廃してゆく家は、〈小町〉の容色や恋人の心の衰えをも暗示している。相手の訪れと経済的な援助があれば、住まいが「荒れたる宿」となることはない。そのような中で変わらず自分の元を訪れるのは、「幾世」も前からこの山里を訪れ続けていた「月」のみだというのである。不変の存在である「月」と対比することにより、「荒れたる宿」の語から喚起される相手の恋心の「うつろひ」はより鮮明になる。この歌が独詠か男への贈歌かは不明であるが、神宮文庫本系統の詞書を採用するならば、相手の男と「むつれ」ている際に、長い間訪れの無かったことを恨んで詠み掛けたものと解されよう。

なお、笹川博司氏(注一七)は、「山里」と「月」を詠み込んだ歌が勅撰集では『後拾遺集』に初出であり、そこで「月」は仏道修行の場としての山里を照らす「宗教的象徴」として詠まれていると指摘する。このような『後拾遺集』以降の価値観に則ってa歌が再解釈され

た結果、これは山里で男を待つ小町の歌から、山里で仏道修行をする老境の小町の歌へと変化を遂げたのではないか。

五、「出所不明歌」の内の山里関係歌

そして特筆すべきは『小町集』基幹部分の「出所不明歌」の中にはa歌の他にも、山里で待つ小町の姿を浮かび上がらせる歌々が存在しているということである。

つまこふるさをしかのねぞさよふけて我がたぐひはありとしるなり

(唐草)

この歌の上二句で詠まれているのは、妻を求める牡鹿の物悲しい鳴き声である。その声を聞いた詠者は、牡鹿と自分は夜が更けても恋人に逢えず思いを募らせている点で「たぐひ」即ち、同類だ(注一八)と感じる。

ここに「山里」の語は直接詠み込まれていないが、「鹿」は秋の山、もしくは山里の景物として詠まれるものである。前掲した『忠見集』五七番歌はその一例であり、他にも次のような用例が見られる。

是貞親王家歌合の歌

忠岑

山里は秋こそことにわびしけれしかのなく音に目をさましつゝ

(『古今集』秋上、214)

奥山に紅葉ふみわけ 鳴鹿のこゑきく時ぞ秋はかなしき

(同、215、詠人不知)

次の歌を見よう。

秋の田のかりほにきあるいなかたのいなとも人にいはましものを

(神宮)

(唐草 16、神宮 44、静嘉 56、承空 62、書乙 61、正保 60)

この歌は第三句「いなかたの」までが「否」を導き出す序詞であり、「否」と相手を拒絶していたならば、と仮想している。詠者は、現実には相手の男を拒絶できず、辛い思いに苛まれているのであろう。「いなかた」の語は未詳であるが、唐草装飾本ではこの部分が「いなごまろ」となっていること、「きある」という行為を行うものであることから、虫か鳥であろうと想定される。なお、『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の虫から取られた童の名に「いなかた」とあり、これが「いなかた」に由来する名であるとすれば虫ということになる。

さて、この「いなかた」の語は『小町集』の他には、十一世紀の半ばごろに活躍した藤原経信の家集『経信集』に一例見られるのみである。

見秋田

きりはるゝかどたのうへのいなかたのあらはれわたるあきのゆふぐれ

(書陵部蔵(五〇一・二〇六)本『経信集』10)

これは「桂」の田を詠んだ歌である。「桂」は貴族の別荘地であり、『金葉集』や『散木奇歌集』には「桂の山里」の語も見出せる。そこ

で詠まれた「田」の歌に「いなかた」が詠み込まれているということは、「いなかた」は「山里」特有の風物であった可能性が高い。
また『源氏物語』の郊外の自然描写に屏風絵の影響が見られることについては片野達郎氏の指摘がある(注一九)が、「山里」である小野の描写に、秋の「田」が登場することは注目すべきである。

人のけはひいと少なう、木枯らしの吹き払ひたるに、鹿はたゞまがきのもとにたゞずみつゝ、山田の引板にもおどろかず、色濃き稲ともの中にまじりてうち鳴くも、愁へ顔なり。
(「夕霧」④二二六～二七頁)

門田の稲刈るとて、所につけたる物まねびしつゝ、若き女どもは歌うたひけうじあへり。引板ひき鳴らすおともをかしく、見し東路のことなども思ひ出でられて：
(『源氏物語』手習巻、依拠本⑤三三九～三四〇頁)

これらは夕霧が落葉宮を得ようとする箇所と、中将が出家前の浮舟の姿を見る直前の箇所、小野の風景描写である。この二つの部分は「思ひのほかにはらうたげならん人」との山里での出会いを描いており、屏風絵や和歌の「山里の女」の影響が考えられるが、そこに「田」の風景が描かれていることは、絵や歌の享受によって人々の中に形成された「山里」像の中に「田」の光景も含まれていた可能性を示唆する。「秋のたの」歌の上三句が描くのも、秋の山里の光景なのではないか。

次の歌を見よう。先の二首は現存伝本四系統六類のすべてに存在していたが、この歌は唐草裝飾本には見えない。先の二首よりも後で小町に結び付けられた歌であろうが、神宮文庫本系統などの他の系統の伝本には存在しており、『小町集』基幹部分に位置する歌といえる。

卯の花のさける垣ねは時ならぬ我ごとぞなく鶯の声
(神宮)
(唐草なし、神宮 36、静嘉 55、承空 61、書乙 60、正保 59)

ここでは第一句「卯」に「憂」、第四句「なく」に鶯が「鳴く」とことと詠者が「泣く」こと、第五句「鶯」に「憂く干ず」が掛けられており、卯の花が咲く夏になっても鳴き続ける春の鳥、鶯に、憂きが絶えることが無く泣き続ける自分自身を重ね合わせている。そしてこの「卯の花」は、以下のように「山」や「山里」の景として詠まれることが多い。

山里の卯花に鶯の鳴き侍けるを
平公誠
卯花を散りにし梅にまがへてや夏の垣根に鶯の鳴く
(拾遺集』夏、8)

題知らず
よみ人知らず
山がつの垣根に咲ける卯花は誰が白妙の衣かけしぞ
(同、9)

山里の卯花をよめる
跡絶えて来る人もなき山里にわれのみ見よと咲ける卯の花
藤原通宗朝臣
すると「卯の花」と「鶯」の語に「憂」を掛けて、憂愁を強調するこの歌も、『小町集』においては「山里」に在る女の嘆きを詠んだもの

として解することができるのではないか。
(後拾遺集』夏、17)

六、井手の歌

また、第一章で相模が撰取していた可能性を示した井手の山吹を詠んだ歌も「山里」で待つ小町の詠として解されていた可能性が考えられる。

あでのやまぶき

色も香もなつかしきかなかはづ鳴あでのわたりの山吹の花

(神宮)

(唐草なし、神宮 40、静嘉 57、承空 63、書乙 62、正保 61)

この歌も「卯の花の」歌同様に唐草裝飾本以外の全ての伝本が伝えているもので、その大意は、「色も香りも何と慕わしいことだ、蛙が鳴いている井出の渡りの山吹の花は」というものであり、『古今集』の次の歌を本歌として見られる。

春雨にはほへる色もあかなくに香さへなつかし山ぶきのはな

(『古今集』春下 122、詠人不知)

さて、井手は『八雲御抄』によれば山城にあり、家永香織氏(注二〇)によれば現在の京都府綴喜郡井手町である。この地には橘諸兄の円提寺や山荘である相楽別業があり、橘氏の本拠地として早くから栄えていた。この地で詠まれたと考えられるのが『萬葉集』卷十九の「十一月八日在於左大臣橘朝臣宅肆宴歌四首」であり(注二一)、橘諸兄、聖武天皇、母が諸兄の妹である藤原八束、大伴家持が諸兄の家で開かれた宴席に集い、和歌を詠んでいる。しかし『萬葉集』に「井手」の地名を詠み込んだ和歌はない。この地が歌枕として和歌に詠まれるようになるのは、次に掲げる『古今和歌集』の詠人不知歌が発端と見られる。

題しらず

蛙なく井手の山ぶきちりにけり花のさかりに逢はましものを

詠人しらず

この歌は、ある人の曰く、橘清友が歌也

(『古今集』春下 125)

ここでは「蛙」及び「山吹」が井手の景物として詠まれている。井手が山吹の名所であったことは、

井手といふ所に、山吹の花のおもしろく咲きたるを見て

恵慶法師

山吹の花の盛りに井手に来てこの里人になりぬべき哉

(『拾遺集』春 69)

から窺える。そして山吹は時に、蛙との取り合わせで詠まれるものであった。

ゆかりとも聞えぬ物を山吹のかはづの声に、ほひけるかな

(正保版歌仙家集本『貫之集』 254)

山ぶき

やまぶきのはなのみぎはに、ほへばやさはにかはづのこゑきこゆらん

(西本願寺本『忠見集』 78)

この取り合わせは早く『萬葉集』に見られるが、

厚見王歌一首

河津鳴かわづなく 甘南備河かむなびがほに 陰所見かげのみみえて 今香開いまかきくらむ 良武やまぶきの 山振はな 乃花

(『萬葉集』

卷八
143⁵)

と、「甘南備河」のものとして詠まれていることから、「蛙」及び「山吹」が井手に限った景物ではなかったことが知られる。しかし十二世紀半ばの『袋草紙』は数奇者である藤原節信と能因法師が井手の蛙の死骸と長柄の橋の匏屑を見せ合ったという説話を載せており、また十三世紀の『無名抄』にも、

ヨノ人思ヒテ侍ハ、タゞカヘルヲバミナカハツト云ゾト思テ侍メリ。ソレモタガヒ侍ラズ。サレドカハツト申カヘルハホカニハ侍ラズ、タゞキデ河ニノミ侍也。色クロキ様ニテ、イトオホキニモアラヌヨノツネノカヘルノ様ニ、アラハニヲドリアリク事ナドモイトシ侍ラズ。ツネニハ水ニノミスミテ夜フルホドニカレガナキタルイミジク心スミ物アハレナル聲ニテナム侍ナリ。

とあり、「井手」の蛙が和歌世界に於いて他の蛙と一線を画した位置付けがなされていたと考えられる。その初発は前掲の「蛙なく」歌である。本章で扱う「色も香も」歌も、「井手」という歌枕と「蛙」及び「山吹」が共に詠まれていることから、「蛙なく」歌の影響下にある歌であることが知られる。

これらの井手の地を詠んだ歌について明川忠夫氏(注二二)は、「体制の軌道から逸れた中・下級貴族たち」の「山里へのあこがれ」によって多く詠まれたものと述べている。井手は橘氏の本拠地であった故に厳密な意味では山里とは言えないが、橘氏の没落により平安期以降の井手は、嘗て栄華を極めた頃よりも遙かに衰微してしまっていたであろう。よって「山里」的な地と見られていた可能性はあるのではないか。

この歌を先行研究(注二三)は、次に掲げる『冷泉家流伊勢物語抄』六二段との関わりから、老境に有る小町が井手の里で仏道修行をし乍ら閑居していた際の詠であると見る。

(筆者注・小町は)仁明の御子もとかげの親王にツカハ仕れて住吉にいたり。(中略)彼親王かうじ給ひける後は尼に成て井出寺のべつたうのつまとなりて、(中略)六十九にて彼井出寺にてそしたりといへり。(『冷泉家流伊勢物語抄』六二段)

同様の記述は『謡曲拾葉抄』『光広卿百人一首抄』に見え、また『山城名勝志』に井手の里が小野小町終焉の地と記され、現在でも小町塚が存在することから、小町がその晩年、井手に居住したという伝説は人口に膾炙したものであったと考えられる。

但し、井手の地に纏わる歌物語として人口に膾炙したものは、『大和物語』一六九段に見える下帯伝説であることに注目したい。これは、内舎人であった色好みの男が大三輪神社の御幣使として大和国に下った際、井手の里で顔かたちの良い六、七歳の子供に出会ったので、結婚の約束をして帯を交換した。その子供はそれを忘れずに心に留めていたが、男の方は忘れてしまっていた。七、八年の後に男がまた御幣使に命ぜられて井手に来た所、井戸で水を汲む女達が居て、言うことには：と、いうもので、話の結末を示さずに終わっている。この話に森本茂氏（注二四）は『古事記』下巻の雄略天皇と引田部の赤猪子説話の影響を見る。赤猪子は天皇の口約束を忘れず、老婆になる迄待ち続けた女であった。しかし彼女が天皇の后として迎えられることはなく、すると一六九段の少女も、幸福な結末を迎えることはなかったであろう。『袖中抄』は、この一六九段の描かれなかった結末を『伊勢物語』一二二段に求めている。

むかし、男、ちぎれることあやまれる人に、

山城の井出の玉水手にむすびたのみしかひもなき世なりけり

といひやれど、いらへもせず。

男は、夫婦となる約束を破った女に「頼みにした甲斐もない二人の間柄だ」と詠んだが、女は返事もしなかったというのである。

さて、『大和物語』に、井手が舞台になるのではないが、登場人物の詠歌の中に「井手」という歌枕が詠み込まれる話として、五八段と一三二段がある。まず五八段では、陸奥において兼盛が源重之の娘を得ようとするが、年が若すぎるので親は反対する。都に行くこととなった兼盛は山吹につけて、次のような歌を贈る。

花ざかりすぎもやするとかはらずなく井手の山吹うしろめたしも

ここでは女性の盛りを形容する為に『古今集』一二五番歌（「蛙なく」歌）を利用してはいるのであるが、これから都に上る男が陸奥の女を、井手の山吹という山城の景物に譬喩しており、少々唐突な印象を受ける。この兼盛の恋は実らず、娘は別の男と一緒に上京し、「花ざかり」歌を陸奥の土産と言って返して来る。

次に一三二段では、公平の女が兵衛の尉もろただと恋仲になるが疎遠になってしまふ。兵衛の尉が臨時の祭の舞人に指名されたので女はそれを見物に行き、昔着ていたのと同じ摺衣の袖を今は別の女性のものとして見るのが辛い、という内容の歌を贈る。それに対して、男は、もろともに井手の里こそ恋しけれひとりをり憂き山吹の花

と返したという。

この二段では「井手の山吹」及び「井手の里」が女性の譬喩として和歌に詠まれているが、「井手の山吹」に譬えられた重之の娘は兼盛ではなく別の男と結ばれ、また「井手の里」に譬えられた公平の娘は兵衛の尉と疎遠になっていた。そして先に述べたように、一六九段では男は結婚の約束をして帯を交換したことを忘れてしまっている。

このようなことから、今井源衛氏（注二五）が述べているように、「井手」の歌枕が男女の仲の頼み難さを暗示するものとして享受されていた可能性がある。すると「色も香も」歌は元々閑居した老女の感慨と見るのではなく、むしろ井手で男を待つ女が、山吹という花の「色」に相手の自分を思う心を譬え、それを慕わしいと詠んでいると解するのが自然なのではないか。花の「色」に相手の心を譬える例は以下のように『萬葉集』以来少なくない。

月草之 徒 安久 念可母 我念人之 事毛告 不来

（『萬葉集』卷

四 583）

内日刺 宮庭有跡 鴨頭草乃 移情 吾思名國

（『萬葉集』卷十

二 3058）

世中の人の心は花染めのうつろひやすき色にぞ有ける

（『古今集』恋五 795、詠人不知）

先に見てきた三首とこの「色も香も」歌は、「山里」の語こそ詠み込まれていないが、歌語から「山里」の光景が想起される歌といえよう。そして「つまこふる」歌では相手の訪れない嘆きが、「秋のたの」歌では相手を受け入れてしまったことへの後悔が、「卯の花の」歌では絶えることなき「憂さ」に泣き続けねばならない苦悩が、そして「色も香も」歌では相手の心が慕わしいと詠まれている。これら四首がa歌と合わせて『小町集』の中で享受されることで、山里で来ぬ人を待つ（小町）像がより鮮明に浮かび上がるのである。

おわりに

以上、歌仙家集本系統の『小町集』では小町の厭世と閑居を詠んだものとして位置付けられているa歌が、本来は山里で男を待つ境遇にあった小町の歌として『小町集』に収められたのではないかと述べてきた。また、『小町集』の「基幹部分」にはa歌の他に、「山里」の語は詠み込まれていないものの、山里で男を待つ小町の姿を浮かび上がらせる歌々が存在すると指摘した。

a歌とこれらの歌々からは歌仙家集本系統にのみ収められているc歌のような遁世の感慨は読み取れず、寧ろ山里において「世の中」の

憂さに苦しむ女の姿がありありと浮かび上がる。山里の持つ隔絶の機能は遁世を望む女を「世の中」から隠してくれるものであったが、待つ女にとつてその機能は負の方向に働く。『小町集』の初発段階に於ける「山里」は決して「世のうきよりは住み良」い空間ではなく、寧ろ「世の中」の憂さがその俣に持ち込まれる空間であったといえよう。

なお、『小町集』が増補・展開を遂げてゆく中で、「山里」の歌の描き出す世界が第二章でみた「あま（海人）」の歌と同様の推移を辿っていることは注意すべきであろう。『小町集』基幹部分の「あま」の歌は、基本的に「あま」にたとえた男を待つ姿勢を、海辺の景と重ね合わせながら描き出していた。しかし歌仙家集本系統が独自に増補した歌々の中でも、特に第三部、第四部に存する「ヨノナカヲ」歌や「ハルノヒノ」歌は、「あま」を出家した自身の姿に重ね合わせている。歌仙家集本系統の第三部以降は、「基幹部分」において恋歌に利用された題材を、小町の出家・遁世を描写するために用いているようである。『小町集』の増補の過程で、恋する小町よりも晩年の閑居する小町に焦点が当てられてゆく、その様相を、「あま」や「山里」を題材にした歌々から見て取ることができるのである。

注

注一…この歌は、『雲葉集』秋歌中 月部、506に「秋の山里にて」、『続後拾遺集』雑上、1029に「山里にて月をみてよめる」として入集する。また『小町集』諸本における本文異同は第一部第一章において示したが、『続後拾遺集』では第一句が「山ざとに」、第五句が「秋の月影」となっており、『雲葉集』でも第五句が「秋の月影」である。いずれも歌仙家集本系統と共通する本文を有している。なお『続後拾遺集』でa歌は月を見て時間の経過を詠嘆する歌の中に位置付けられている。

注二…前田善子『小野小町』(三省堂、一九四三年)

注三…片桐洋一『小野小町追跡』(笠間書院、一九七五年)

注四…角田宏子『流布本『小町集』(一一六首)の全歌考』(『小町集』の研究)笠間書院、二〇〇九年)

注五…島内景二「歌の論理と家集の論理―小野小町と菅原道真―」(『電気通信大学紀要』第一巻第一号、一九八七年六月)

注六…笹川博司「「山里」の自然美の形成」(和泉選書14『隠遁の憧憬―平安文学論考―』和泉書院、二〇〇四年)。但し『後撰集』雑二、117は「人の国」を「山里」と表記する。

注七…小島孝之「「山里」の系譜」(『国語と国文学』七二・一二、一九九五年十二月)

注八…斎藤由紀子「源氏物語宇治十帖における「山里」」(『国文目白』四二、二〇〇三年三月)

注九：静嘉堂文庫本ではa歌の四首前に小町が「尼」になった、という詞書と共に『古今集』雑下の詠人不知の贈答（973、974）を掲げるが、第一章で見たように静嘉堂文庫本には錯簡があり、後に位置する歌がここに紛れ込んだ可能性が高い。この二首は他の系統の『小町集』に見えないことから、本来は巻末増補であつたのかもしれない。

注一〇：今西祐一郎「山里」（『国文学』二八卷一六号、一九八三年十二月）、小町谷照彦「美的空間としての山里―藤原公任」（『古今和歌集と歌ことば表現』岩波書店、一九九四年）等に指摘あり。

注一一：山口博「小町閨怨」（『中古文学』二二号、一九七八年九月）、山口博「閨怨の詩人 小野小町」（三省堂、一九七九年）

注一二：清水文雄「衣通姫の流」（『比治山女子短期大学紀要』第十号、一九七六年三月）

注一三：後藤祥子「小野小町試論」（『日本女子大学紀要』二七号、一九七八年三月）及び、注一一前掲論文に指摘あり。

注一四：歌仙家集本系統の『小町集』は「うつゝには」歌の詞書を「やんことなき人のしのひ給に」とし、秋山虔「小野小町的なるもの」（『塙選書』57『王朝女流文学の形成』塙書房、一九六七年）は『小町集』の詞書や所収歌を資料とせず、純粹に『古今集』の小町詠を読み解いた結果、身分の高い男性との叶わぬ恋が小町の詠歌の契機になった可能性を示す。また山口博「閨怨の詩人 小野小町」（三省堂、一九七九年）では小町が、結婚を禁じられた「氏女」である事が詠作に影響を及ぼしていると述べる。

注一五：中野方子「思婦と宮怨―閨怨詩における類型素材と類型表現―」（『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』（笠間書院、二〇〇五年）

注一六：中野方子「麿屋と琴―『古今集』の歌語と閨怨詩―」（『平安前期歌語の和漢比較文学的研究』笠間書院、二〇〇五年）

注一七：笹川博司「源氏物語「山里」の風景」（和泉選書14『隠遁の憧憬―平安文学論考―』和泉書院、二〇〇四年）

注一八：書陵部乙本系統系及び正保版本系統では本文が「我かた恋をあかしかねつる」となっており、自分だけが激しく相手を恋い慕っている故に眠れない、という意味となる。

注一九：片野達郎「源氏物語における絵画性の一考察―屏風絵による自然描写について―」（『文芸研究』二三、一九五六年七月）

注二〇：家永香織「井手」久保田淳、馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店、一九九九年）

注二一：石井庄司「井手左大臣邸の歌群」（『解釈』三十九卷三号、一九九三年三月）

注二二：明川忠夫「近畿民俗叢書第七卷『小町伝説―聖視と賤視―』（現代創造社、一九八七年）

注二三：前田善子『小野小町』（三省堂、一九五三年）及び明川忠夫「近畿民俗叢書第七卷『小町伝説―聖視と賤視―』（現代創造社、一九八七年）

注二四：森本茂「大和物語「井手の下帯」の段の生成―神婚説話の影―」（『解釈』三十四卷一号、一九八八年一月）

注二五：今井源衛「井手の下帯（大和物語評釈・56）」（『国文学』十二卷五号、一九六七年四月）

第二部第一章 『住吉物語』と小野小町 — 引用された小町詠のはたす機能を中心に —

はじめに

『住吉物語』は『源氏物語』以前に成立した継子物語であるが、成立当初の姿である「古本」は早くに散逸し、書陵部蔵(五一〇・一一二)本『能宣集』の住吉絵の記述から断片的にその内容が知られるに過ぎない(注一)。古本の改作によって成立した現存本はいずれも鎌倉期より後の書写である。諸本は、王統を引く姫君が継母に虐待されて住吉流離を余儀なくされるが、長谷寺の靈験によって男君に救出され、数年後に父との再会も叶って大団円となる、という大筋を共通してもち、共通祖本の存在が考えられる。しかし本文、ことに和歌の数は大きく異なる。享受の過程においてさまざまに増補改変や削除が行われた結果、現存諸本が分岐したことを窺わせるのである。

さて、こうした流動的なテキストにおける諸本同文率の高い記述とは、改作祖本、そして古本に遡る可能性をもつとともに、物語の大筋をささえる箇所であるはずだ。本稿ではそのような観点から、落丁や本文の乱れこそあるものの、改作本の祖本にもっとも近いとされる(注二)成田図書館蔵本『住吉物語』(以下、成田本)がもつ、三例の小町詠引歌(注三)に注目したい。友久武文氏(注四)の掲げる代表本文―流布本・略本・中間本・広本の四類十八系統を見るに、この三例の同文率は高い。その理由を、引歌部分の表現が固定しやすいことに求めるむきもある(注五)。しかし、十八系統に共通してその詠作が二首以上引かれる歌人は小町のみである。小町詠が、そして小町という歌人が物語内で果たす役割は大きいのではなからうか。以下、小町詠の引用が物語の構造、展開の中で担う機能と、小町の歌が物語によびこまれた背景について考えてゆく。

なお、引用本文としては基本的に成田本を用いるが、小町詠引歌部分(二重傍線部)については代表本文十八系統における異同を掲出し、小町詠引歌が多くの本文に引き継がれていることを確認するとともに、諸本を対照することで改作祖本への肉迫をはかりたい(注六)。

一、長歌における小町引用―父を恋う表現として―

それでは、小町詠引用三例を順に検討してゆこう。最初の小町詠引用は、継母の姦計を逃れて住吉に暮らす姫君が無事を知らせるべく、

実家の中納言邸に贈った長歌のなかにある。

(a) 夜の衣を返しつゝ寝る夜の夢のゆめならで恋しき人にみちのくのあぶくまがはをわたるべきわが身ならねば

(「校本」成田「五四頁」)

【本文異同】

○夜るの衣をかへしつゝ、すくせなければ たちちをの 思ひかねてや ㊦

○よるのころもをかへしつゝーナシ ㊧

傍線部は以下の小町詠を下敷きにした表現であり、白峯本、多和本系統以外に大きな異同はない。

いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る

(『古今集』恋二554)

「夜の衣を返す」とは『萬葉集』の「袖を返す」と同種の招魂の呪術と考えられている。相手と現実に出会うことをその目的とみる解釈もあるが(注七)、和歌においては夢の逢瀬をもたらすものとして詠まれることが多い。当該長歌においてもそのような解釈のもと「いとせめて」歌を用いており、「恋しき人」の語に続く「みちのく」に「見」、「あぶくま川」に「逢ふ」を響かせ、夢のなかで「恋しき人に見逢ふ…」という流れとなっている。夜の衣を返して眠った夢のほかには、恋しい人とその姿を見せ、逢うことの叶わない我が身である、というのである。

しかし、「いとせめて」歌は『古今集』恋二に収められていることから恋歌と解しうるが、長歌において姫君が思慕する対象は誰なのか。新全集頭注(注八)は姫君の求婚者とみているようだが、姫君の父である中納言とする説もある(注九)。平安期の物語に目を向ければ、『うつほ物語』楼上下巻のいぬ宮は離れた母宮を、『源氏物語』蓬生巻の末摘花は亡くなった父宮を思つて「恋」の語を詠んでいる。肉親への慕情を「恋」の語で表現することは、さほど突飛ではないといえよう。しかも長歌は家族のなかでも、特に父中納言に向けられている。姫君が長歌を贈ることを思い立つ場面を掲げよう。

住の江には、霜枯れの芦こほりにむすぼれたる中に、水鳥の上毛の霜払ひもあへず鳴く音につけても、思ひ残すことなかりけり。

「中納言殿よりはじめて、かたへの人々、いかに思し嘆くらん。親にもを思はせ奉るは、罪深きことにこそ。生きてありとばかりは知らせ奉らむ」

(「校本」成田「五二頁」)

ここに登場する上毛の霜を払ってくれるつがいをもたない水鳥は、以下のように恋人と逢えずに独り寝る姿と重ねられることが多い。

をし

羽の上の霜打ち払ふ人もなし鴛鴦のひとりね今朝ぞかなしき

(『古今和歌六帖』「をし」147)

冬比、人の「来む」といひて、見えずなりにしつとめて

おきながら明かしつるかな共寝せぬ鴨の上毛の霜ならなくに

(『和泉式部集続集』238)

だが、姫君がこのような孤独な水鳥の声に誘発されて思いやるのは、彼女に懸想する男君や結婚が決まっていた左兵衛督ではなく、父をはじめとした「かたへの人々」である。そして、特に父への罪悪感から消息を知らせることを決意するのであった。彼女が父を第一に思うのは、継母とは対照的に、姫君に限りない愛情を注ぐ存在であったからだろう。そして長歌の(a)の直前には、「たらちをの なかを離れて 鶴の子の くもゐはるかに 立ちわかれ 行方もしらず」と、このような父の元から離れてさすらう身の上が表示されている。このような流れからすると、「恋しき人」も父の中納言をさすことばと考えるのが妥当ではないか。

「衣(袖)を返す」という行為の恋歌以外の用例としては『栄花物語』二九「たまのかざり」所載の妍子哀傷歌「藤衣かへすがへすも悲しきは涙のかかるみゆきなりけり」、『六条院宣旨集』一一一番歌「母うせて、またの年のはてのころ／押さへかね涙にくれし衣手をひきかへしてもなほぞ悲しき」がある。これらはいずれも哀傷の歌で、姫君の立場と完全に重なるものではないが、会うことが叶わない恋人以外の存在への想いを、「衣(袖)を返す」という行為によって表現する例が他にもある点、注意される。

さて、長歌においてゆいいつ「恋しき人」にまみえることが可能な場とされる「夢」は、現実に出会うことが叶わない存在との交感を可能にする異界であり(注一〇)、物理的な障害や人目といった「隔て」を無化する場であった。そして、長歌を詠んだ時点での姫君もまた「隔て」のなかにいるとあってよい。家を出た姫君は住吉に隠棲する尼君を頼るが、その庵は海のすぐそばに作られ、「人目もわざと訪はれずは見るべくもなく、あはれなるすみかにぞ侍りける」(「校本」成田「五〇夏」という場所として描写されているのだった。『源氏物語』帚木巻で左馬頭は、物語において出奔した女が「深き山里、世離れたる海づらなど」に隠れることを述べていたが、住吉はまさしく姫君の隠れ家にふさわしい「海づら」であったといえよう。

しかしこの隠れ家は継母の悪意から姫君を隔て、守りはするが、継母のそばに在中納言や彼女に好意的であった人々からも姫君を隔離

してしまう。中納言との再会を可能とする場合はもはや、現実の障害がすべて取り払われた「夢」のほかにはない。その中で姫君が父に向ける感情は、「恋」の語の古代的な意味である「目の前にない相手を求める心の働きであり所有欲」（注一一）に他なるまい。

近藤みゆき氏（注一二）によれば、『古今集』以降、恋歌において「恋」を核とした語を男性のものとする観念が和歌の世界を規制するのであり、女の身で恋愛感情を「恋しき」とうたいあげる「いとせめて」歌は例外的な存在であった。そこに男性的な主体が仮構されているといってしまうばそれまでだが、自らの「恋しき」思いを表出せずにはいられない切実さを読み取ることも可能であろう。そのような歌のことばによって姫君の父への思慕が表現されることで、その思いの強さと、不可能とは知りながらも再会を求めずにはいられない心を浮き彫りにされているのではないか。

二、「照応」する小町詠引用

いっぽう、女君のゆくえを求める男君は長谷寺に参籠し、その霊夢のなかで彼女の姿を見た。その夢がさめたのちの男君のつぶやきにも、小町詠のことばが踏まえられている。

(b) 春夏もすぎ、九月ばかりに長谷に籠りて祈り給ひけり。二七といふ夜、夜もすがら行ひて、暁がたにちとまどろみたる御夢に、やむごとなき女房のうちそばむきてゐたるを、つくぐと見給へば、わが思ふ人なり。∴袖をひかへて、「おはしましどころ知らせさせ給へ」とのたまへば、

わたつうみのそこもしらずわびぬればすみよしとこそあまはいふなれ

とのたまひて、帰り給ひぬ。うちおどろくままに、いよく、「夢と知りせばさめずこそ」とかなしみ給ひけり。

（「校本」 成田「五六〜五七頁」）

【本文異同】

○引歌なし ㉠ ㉡

○夢としりせばさめずこそ—夢としりせば ㉢ ㉣ / 夢としりなば ㉤

夢と知りたらばさめまじ物を ㉥ / ゆめとしりせばさめざらまし物を ㉦ / ゆめとしりせばさめざらまし ㉧ / 夢としるならばおどろかざらまし ㉨ / 夢と

せりせばさめまじ(機)／夢にしらせばさめざらまし(目)／夢と思はばさめざらまし(陽)／夢とおもはばさめざらましものを(眞)
夢としりせばしほしも事とはまほしかりし物をねざめいまさらうらめしく(多)／ゆめとしりなばいまをふもふことをいひてまし(筑)
二重傍線部は以下の小町詠を踏まえた発言である。

思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを

(『古今集』恋二五²)

三本には引歌部分がなく、また多和本系、筑波大本系では、第四句のあとに、夢に現れた姫君と話をしたかった、という内容が続く。しかし成田本同様、第四句、五句を引くものが九本あり、こちらを原型とみてよかろう。

ここで男君は、夢に姫君が見えたことへの感慨と目覚めた後の名残惜しさを表出する。「思つゝ」歌については現実以上の価値を、はかないはずの、しかし障害が無化された夢に求める姿勢(注一三)が指摘されているが、男君にもその姿勢に通じるものを見てよい。彼は長く行方が知れなかった姫君と漸く夢で邂逅したのであり、姫君との隔てが無化された「夢」に留まりたいと感ずるのは自然なことであつたらう。だが、ここで男君は姫君の歌によつてその居所を知らされている。夢において充たされなかつた思いは、住吉下向―すなわち現実における隔ての無化へと男君をつきうごかしてゆく。

ところでこの「思つゝ」歌は、(a)において姫君が引いた「いとせめて」歌と同様、『古今集』恋二巻頭に三首連続して置かれた小町詠のうちの歌である。この二首は『住吉物語』ではともに夢の逢いとのかつらひで用いられているが、さらに、この二首がともに籠もりの空間にあつて引かれているという共通項をも指摘することができよう。姫君の住吉隠棲が成女式の忌み籠もりの側面をもつことについては指摘があるが(注一四)、いっぽう男君の長谷寺参籠も霊夢を得るための忌み籠もりなのである(注一五)。この二場面に特に因果関係はなく、思慕の方向や籠もりの動機も対応していないが、諸本を見わたせば、男君と姫君の間には他にもこうした共通項を見出すことができる。

三角洋一氏(注一六)は、広本系の一部において、男君も姫君も枯れた芦の絶え間に浮かんでいる水鳥に目をとめ歌を詠む場面が存することについて、「姫君の行方を案じる男君と、都の父や妹たちを恋慕う姫君とでは、それぞれの孤愁の思いが正しく向きあっているわけではない」が、「場面の照応を読むべきところ」と指摘している。そして、このような男君と姫君のあいだの「照応」は、一部の本文に限定されるものではない。たとえば諸本が共通してもつ、男君が姫君を垣間見する場面。成田本ではこの部分が落丁しているので、藤井本の本文を掲出しよう(注一七)。

いま少しのびたる声にて、琴かきならして、「かひの白嶺をおもひこそやれ」と言ひてけり。これなむ姫君はと、胸うちさわぎてし

のびかねつつ、葎をうち叩けば、「あやし、誰ならむ」と見れば、少将立ち給へり。…いかなる文かと見れば、

しらゆきのよにふるかひはなけれどもおもひきえなむことぞかなしき

とて、さまぐること書き給へり。

(『鎌倉時代物語集成』④一六一〜一六二頁)

姫君が琴をかきならしてうたう『好忠集』の歌と、男君の文に記された歌は、雪のほかに「かひ」「おもひ」の語が共通するが、男君の文は姫君の歌を聴く前に準備されたものである。

また、男君が初瀬に籠もって霊夢を受け、姫君の姿を見たその夜、姫君も夢に男君の姿を見ているのであった。この箇所は成田本も保有しているので、成田本の本文を掲げよう。

住吉にはその暁、姫君、あとにふしたる侍従に聞こゆるやう、「まどろみたりつる夢に、少将の心細かりつる山の中にただひとり草枕して、泣きふし給へるところに行きたれば、我を見つけて袖をひかへて、

たづねかね深き山路にまよふかな君がすみかをそことしらねば

となむありつる」

(『校本』 成田一五七〜五八頁)

男君の夢と姫君の夢の描写は一致しない。先に(b)として掲げた男君の夢には、姫君の詠んだ「わたつうみの」しか歌がない。対して姫君の夢には男君の「たづねかね」の歌があるが、男君はじしんの夢の中では「おはしましどころ知らせさせ給へ」と言っただけであった。しかし男君が姫君の「袖をひかえ」る点、暁に「まどろ」んだ夢において相手を見ている点は一致し、双方の歌に「そこ」と「しら」ない、という共通の表現が見られる。

こうした、恋のはじまりの場面から姫君と男君の再会前夜まで続くふたりの「照応」は『住吉物語』の恋物語としての側面を支えるものと言えようが、その中に(a)(b)の場面を位置づけることができるのではないか。この二場面には特に因果関係などなく、男君と姫君の思いは水鳥の場面同様「正しく向きあっているわけではない」。しかし姫君は、「いとせめて」歌を用いて「恋しき人」と夢で逢うことを求め、それに応えるかのように男君は姫君の夢を見て「思つゝ」歌を引く。現実とはうらはらに、ふたりは深い部分で繋がっているかのようだ。小町詠引歌は個人の心情表出の枠を超えて、本人たちの意志を越えたところでの男君と姫君の結びつきを示しているのである。

三、「心から」歌と姫君の流離

さて、男君は霊夢を受けて住吉に下り、姫君と再会する。そして彼女を都に伴い、上京の途につくのであった。三例目の小町詠引用が見られるのは、上京一行の船が「河尻」の地にさしかかった場面である。

(c) 河尻を過ぐれば、その日人どもあまた舟につきて、

心からうきたるふねにのりそめてひといと浪にぬれぬ日ぞなき

なんどうたひて、淀までぞ送りける。

(「校本」 成田「六七頁」)

【本文異同】

○歌なし (横) (陽) (真)

○心からうきたるふねをしてこゑく／にうたひてくるまでかゝりたまつるおくりたてまつる (筑)

○のりそめて／のりもせで／のりぬれば (鈴)／のりをして (田)

○ひといとなみに／ひとひもなみに (藤) (徳) (鈴) (田) (多) (鼎) (筑) (小) (契) (田) (十) (白)／なみにもそでの (田)／ひとひもそでの (大)／一にちなみに (京)

○ぬれぬ日ぞなき／ぬれ日そなき (田)／ぬれぬ日はなし (小)／ぬれぬ間ぞなき (田)

成田本と十五本の本文では、以下の『後撰集』の小町詠がそのまま物語中に持ち込まれている。

男の気色をやうく／つらげに見えければ

心からうきたる舟に乗りそめて一日も浪に濡れぬ日ぞなき

(『後撰集』恋三二七)

詠者や歌の位置づけは本によって相違をみせる。成田本では本文が乱れているものの、「人ども」の歌謡とするようである。千種本系は尼君詠、徳川本系、白峯本系は姫君詠としており、登場人物の詠として物語に組み込む理解もあったことが窺われるが、歌謡とする本文のほうが多い。京都本系、晶州本系、住吉本系の四系統では舟歌、藤井本のほか七本では船に乗った遊女の歌謡とする(注一八)。

「河尻」の地は『大和物語』『新猿楽記』に遊女の居所として記され、平安・中世に遊女の拠点の一つであった神崎川の両岸と推定される(注一九)。また『栄花物語』の記述から、十一世紀には遊女が住吉へ往還する都人の舟につき、歌舞音曲を披露していたことが知られるが、「心から」歌じたい、舟の上の遊女と無縁ではない。藤原基俊の『新撰朗詠集』遊女項には、商人の舟に乗ることを拒絶された遊女の謡ったものとして「心から」歌が収められている。

心からうきたる舟に乗初てひと日も浪に濡ぬ日そなき

遊女欲乗商人、船々人以梶打懸水、反袖掩而泣啼此歌去

小野小

町

(『新撰朗詠集』遊女項⁶⁷⁴)

『住吉物語』に「心から」歌が引用された時期と、この乗船拒否のエピソードの先後関係は不明である。しかし「心から」歌の第二句に詠まれた「うきたる舟」とは、小町谷照彦氏(注二〇)が「漂流・漂泊を表象する歌ことばであり、掛詞的に憂愁を想起させる」とする「うき舟」と同趣の歌語であった。また第四句の「浪」には「涙」が響かされ、みずから不安定な恋に身を投じたゆえに、日々涙に濡れなければならぬ女の姿が、あやうい舟に乗って波に濡れる舟人と二重写しにされている。ここから立ち上がってくる形象は船上に生活して客を取る遊女にきわめて近く、遊女が身の上の憂愁を表出するものとして「心から」歌を愛唱していた可能性が考えられる。以上のことから、改作祖本の段階では「心から」歌は遊女の歌謡と位置づけられており、それを踏襲する本文、登場人物の詠とする本文に分岐したと見られるよう。

さて、先行研究はこの場面や「心から」歌を、男君に迎え取られるまでの姫君の生と関連させて解してきた。友久武文氏(注二一)は姫君の住吉下向の際にも「河尻」の情景が描写され、しかも船人によって歌謡がうたわれていることに注目する。

河尻を過ぐれば、をかしく行きかよふ船に乗りたるものども、あやしき声して、「つまもさだめぬ岸の姫松」とうたひてこぎゆくも、見ならはぬ心地してあはれなり。
(「校本」 成田「四八頁」)

友久氏はこの「つまもさだめぬ岸の姫松」という舟歌を「不安な流離の姫君の心象描写」とし、対して(c)の場面では「遊君の歎きをきいて、姫君が住吉に下った淋しさも思い出され、それと対照的に現在の仕合せが浮び上る」として、二場面の対応をみている。また三角洋一氏(注二二)はそれに加えて、「心から」歌が成田本には収載されていない姫君失踪の折の書き置き「わが身こそながれもゆかめみづくきの跡はとどめむ形見ともみよ」(注二三)、住吉行の際の尼君の同情の歌「すみよしのあまとなりてはすぎしかどかばかり袖を濡らしやはせし」(「校本」 成田「四九頁」)とも呼応し、姫君の「受苦の日々をすすぎ浄める」と解する。なお、伊東祐子氏(注二四)も、この歌に姫君の「涙で過ごした住吉での日々がオーバードラップされている」として、「心から」歌の下二句「ひとひもなみにぬれぬひぞなき」が、住吉で冬を過ごす女君の様子を描く藤井本の一節「わが身のうへに浪立ちかゝるこゝちしてける」(『鎌倉時代物語集成』④一七九頁)に響か

せられている可能性を示している。

「心から」歌のことばと、指摘されている箇所に対応関係についての個別の指摘には議論の余地がある。しかし、「心から」歌が姫君の流離の描写と連関させられていることは確かであろう。『後撰集』の詞書をはなれて歌だけを取り出してみれば、「心から」歌の上三句「心からうきたる舟に乗りそめて」からして、姫君が舟に乗って住吉に下ったことを想起させる。『住吉物語』現存諸本に共通する姫君の乗船は、他者の意志によって舟に乗せられた『源氏物語』の浮舟や『狭衣物語』の飛鳥井姫君とは違い、継母の虐待に耐えかねた彼女じしんの意志によるのだから。なお、「心から」歌の第二句「うきたる舟」には、以下のような旅と関わる用例もある。

行く人

かねてより泪ぞ袖をうちぬらすうきたる舟の来んと思へば

(正保版本『伊勢集』414)

夕立しぬべしとて、空の曇りてひらめくに

かきくもり夕立つ浪の荒ければうきたる舟ぞ静心なき

(陽明文庫本『紫式部集』22)

『伊勢集』の例は都を出る際の、『紫式部集』の例は越前への旅の途中での詠だが、いずれも異郷への不安や憂愁の表出である。舟で住吉に下る姫君の心情も、こうした例と同質のものであったはずだ。上京場面でうたわれる「心から」歌は、みずから舟に乗りこんで不安定な立場に身を落とし、憂愁に沈む、姫君の漂泊の生を照射するのではないか。

四、同化と差異化

ただしここでうたわれている「心から」歌から、先行論がいうような「現在の仕合せが浮び上る」「受苦の日々をすすぎ浄める」という肯定的な意味までも読み取ってよいかどうか。

この時点での姫君は、うわべは幸福に見えるが、寄る辺なき身の上から完全に脱したわけではない。継母やその娘で男君の妻となつていゝる三の君を憚り、その貴種性を一時的に剥奪されて「田舎人のむすめ」と偽られていることに留意したい。この偽装は、男君が姫君との関係を歪曲し、自分を追つて「住の江」にやってきた貴公子たちに「思ひがけずこのわたりに住む人に見つきて」と語った(「校本」成田「六五頁」ことにはじまる。「住の江」は海が間近な地で、このあと貴公子たちは「あま人も召して」その漁を見物した(「校本」成田「六

六頁)ともあることから、「このわたりに住む人」「田舎人」とは海人を意味しているとも考えられよう。

『源氏物語』以前の成立と考えられる散逸物語『あま入』は、海人の娘を偶然通りがかった貴公子が見染める、という筋をもち、主な舞台は住吉と限定されてはいないものの難波の海辺であった(注二五)。『住吉物語』はここで、『あま入』の内容や、その元となった説話伝承を意識していた可能性がある。そして『風葉和歌集』には『あま入』の女主人公の詠として、以下の一首がある。

難波わたりにて見あひける人の宿をとひ侍りければよめる

あま入のむすめ

白浪のよするなぎさに世をへつゝあまの子なれば宿もさだめず

〔風葉和歌集〕雑三 1353

この歌は『和漢朗詠集』遊女項¹²¹番歌にも「海人詠」として収められており、海浜で、そして船の上であてどなく生きる『あま入』の女主人公が、そして海人じたいが、遊女ときわめて近い存在として認識されていたことを窺わせよう。そうした女性に偽装される姫君も、一時的にせよ、遊女と重なる存在といつてよい。漂泊民であり、男の愛に縋るほか生きてゆく術を知らない遊女たちの抱える寄る辺なき不安は、姫君のそれに極めて類似している。彼女は住吉での漂泊の日々からは脱したものの、彼女を籠らせ、隠してくれた住吉を離れなければならぬのだ。家も血も住吉の地も失った姫君がゆいいつ頼りにできるのは男君の愛情のほかにない。しかし男君は、姫君の継母の娘である三の君と結婚しており、姫君を一心に愛してくれる保証などどこにもないのである。しかも事情を知る男君と侍従以外から見た彼女は、男君が「思いがけず」出会った「海人」の娘にすぎない。

物理的な流離こそ終焉を迎えたが、彼女の上に今度は心理的な流離への苦悩が重く押し掛かってくる。男君は姫君を守るために彼女の身分を偽るが、それはかえって彼女を遊女に近い存在に貶め、彼女に不安定と苦悩を齎すのではないか。しかも彼女はそのとき遊女と同様、舟の上に在った。そこで姫君が感じているのは、「心から」歌の第二句「う(浮/憂)きたる舟」に表象された存在感に他ならないだろう。「心から」歌は過去のみならず、姫君の不安な現在をも照射する。

しかし、改作祖本では先にみたように、「心から」歌を姫君に口ずさませるのではなく、「河尻」で行き合った遊女の歌謡と位置づけていた可能性が高い。歌謡をうたうとは、声を伸ばし、周囲の空間に「心から」歌を満たすということだ。しかも遊女は舟に乗り、「淀」まで上京の一行を送る。その道行きでは、遊女たちとともにその歌声が姫君につきまとう。表面的には遊興の色合いが強いが、それは姫君の「う(浮/憂)き」属性の暗喩であり、また姫君がそれを聴くことで、自身の不安定な立場を自覚させつづけることになるう。

だが、「淀」で姫君は舟を降り、陸に上がる。そして入京し、男君の家である関白邸、しかも「北の対」に住むのだった(六六頁)。こ

れは浅井峯治氏（注二六）のいうように息子の妻として処遇する意とみてよい。姫君は偽りの属性に貶められながらも、ここで父の邸に在ったときと同じように、地位と帰属する場をもつことになる。それは流離の対極にある境遇であった。

遊女のうたう「心から」歌は、姫君の漂泊性を印象付けると同時に、さすらう女との差異化を可能とするのではないか。遊女は淀まで一行を送ったあと、都の中まで付いてくることはない。姫君の漂泊性は小町詠をうたう遊女の姿に具現して淀まで同行し、そこで切り離される。それこそが、姫君の生が漂泊から安定に転換してゆくポイントであろう。

なお、徳川本系、白峯本系のような「心から」歌を姫君の詠とする本文は姫君の寄る辺なきイメージを強く押し出すが、この場合姫君と「う（浮／憂）き」は明確に淀で切り離されない。こうした本文は、安定や大団円との結びつきが弱くなってしまっているのではないか。

五、小町詠引用の背後―海辺に漂泊する小町のイメージ―

以上のように見てくると、『住吉物語』の小町詠引歌はいずれも、姫君が住吉に流離している期間に集中する。物語の舞台は都から住吉へ、そしてまた都へと、姫君の移動にあわせて転換してゆくが、姫君が都にいる間、小町詠は物語に姿を現さない。しかも（a）では小町詠が姫君によって引かれ、（c）では、姫君の心理的・物理的な流離を象徴しているのであった。小町詠と、流離の境遇にある姫君との結びつきは強い。

この問題を考えるさいに注目されるのは、小町の住吉流離説話の存在である。中世の『伊勢物語』古注のなかには、六〇段、六二段を小町が住吉に流離し、そこでかつての夫であった業平と再会する、という物語として読み解くものがある。本文には住吉の地名が登場せず、小峯和明氏（注二七）がいうように「本文に即した忠実な注釈というより、すでにそうした小町の異伝があり、その伝承をかぶせて読みとっていった」と見るべきだろう。このうち、室町期成立の『伊勢物語難儀注』天理本・東海大本の六〇段注は『住吉物語』の展開とさわめて似通った内容となっている。菊地仁氏（注二八）はそこに『住吉物語』との「双方向的」な影響関係を想定しており、室町以降の書写である『住吉物語』の現存諸本の多くに小町引用が引き継がれている問題とかわって興味深い。

だが、姫君の流離の背後に小町説話の投影を考えるならば、『住吉物語』と小町詠の最初の接点は、古本『住吉物語』成立の時代、すなわち十世紀の半ばから後半（注二九）にさかのぼる可能性がある。この時代に成立した『後撰集』の小町詠四首は説話化された小町像の影

響下にあり、真作とは疑わしいものともされるが（注三〇）、特筆すべきは、そのうち三首に水辺の景が詠み込まれているということだ。前掲した「心から」歌以外の二首を掲げよう。

定めたる男もなく、物思侍ける頃

あまの住む浦漕ぐ舟のかぢをなみ世を海わたる我ぞ悲き

（『後撰集』雜一 1090）

海のほとりにて、これかれ逍遙し侍けるついでに

花咲きて実ならぬ物はわたつうみのかざしにさせる沖つ白波

（『後撰集』離別 羈旅 1360）

「あまの住む」歌では、男性に継ることが叶わない不安定な境遇がコントロールを失ったまま海をゆく舟と重ねられている。「花咲きて」歌は「逍遙」のついでに詠だとするが、『萬葉集』譬喩歌以来の表現伝統に照らせば結実は恋の成就・結婚の象徴であり（注三一）、これははかない男女関係しかもちえない境遇をよそえた歌と解せよう。『後撰集』の小町詠撰歌には、漂泊と水（海）辺のイメージがつよく働いていたことを知る。そしてこれらの歌に詠まれている女の生の頼りなさは、継母によって入内も縁談も妨害されて家を出、住吉に流れる姫君の境遇と重なりをみせはしないだろうか。なお、『古今集』成立以降増補成長をつづけ、十一世紀ごろにはある程度形になっていたと見られる小町の他撰家集『小町集』も、その時代の小町のイメージを多分に反映した作品であることは先にみてきたが、第二章で述べたようにそこにも水（海）辺の景に漂泊の苦悩を重ねた歌が少なくない。そこから住吉流離説話のような、海辺に流離する小町の説話が存在していた可能性をみることも可能であろう。

しかしこの時代が過ぎると、小町と海を結びつける発想がさほど見られなくなる。『後撰集』や『小町集』はむろん、中世にも書写され、享受されてきた。また、平安後期から中世における小野小町の説話的イメージは、「貴種流離譚」に対応する、「貴女遊行」の物語（注三二）として語られ、それが流離の女の造型に援用されることも少なくない（注三三）。しかし、中世の小町説話や、文芸作品にみられる小町的な人物は、おおむね平安後期までには成立していたとおぼしい漢詩文『玉造小町子壮衰書』（注三四）の描く、みじめな姿でさすらう老婆・小町のイメージを継承する。ここにおいて、小町と海辺との関係性は希薄である。『新古今集』以下の中世の勅撰集にも小町の名を冠した歌々が採歌されているが、そこに『後撰集』のような海辺の景をよみこむ歌への偏りは見出せない。『伊勢物語』の注釈世界に残る住吉流離説話はむしろ例外なのだ。海辺に流離する姫君の物語に小町のイメージを投影する発想は、小町と寄る辺なき女の生と水（海）辺を関連付ける、古本の成立時代のものである可能性が高い。

おわりに

以上、引用された小町詠が『住吉物語』内で果たす機能をみてきた。小町詠は姫君の住吉籠もりから都への帰還までの場面に引かれ、姫君の流離の日々に陰翳を加えている。しかしその一方で、小町詠は彼女を求める男君によつても引かれ、姫君の引用と「照応」をみせるのであった。これは物語が恋の成就の方向へ進んでいることを暗示する。また、(c)の場面の「心から」歌は姫君の生と重なりをみせながらも距離を保ち、最終的には姫君から切り離される。

『住吉物語』に、おそらくは古本の段階から引かれた小町詠は、姫君に小町の抱える水(海)辺の漂泊のイメージを付与しながらもその境遇から離脱させる要素としても用いられ、姫君を幸福の方向へ導くのである。そして流離の終焉とともに姫君は完全に小町のイメージから解き放たれ、物語は都を舞台として父との再会、大団円に向けての新たな展開を見せるといえよう。

注

注一：『能宣集』では現存諸本が「少将」とする男君の官職を「侍従」、女君の乳母子である「侍従」の呼称を「右近」としており、少なくとも人物呼称については古本と現存諸本とのあいだに差異が認められる。また『能宣集』の記述から、石川徹「古本住吉物語の内容に関する憶説」(『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九年)は古本の後半のストーリー展開が現存諸本と大きく異なる可能性を考えるが、それを物語の絵画化に際する原本との乖離とする解釈もある。

山口博「異本能宣集の住吉物語」(『王朝歌壇の研究 村上・冷泉・円融朝編』一九六七年、桜楓社)三谷邦明「屏風絵と物語―異本能宣集の解釈あるいは物語の絵画化」(『物語文学の方法』有精堂出版、一九八九年)など。

注二：村井順「成田図書館本『住吉物語』について」(『淑徳国文』九、一九六九年)に詳しい。

注三：成田本には冬の住吉で姫君が「にくさびかける」という舟歌を聞く場面があり、武山隆昭「住吉物語の引歌」(『住吉物語の基礎的研究』勉誠社、一九九七年)は歌仙家集本系統の『小町集』にのみ見える「コギ、ヌヤアマノカゼマモマタズシテニクサミカケルアマノツリブネ(承空⁴⁶、書乙⁴⁵、正保⁴⁴)」の引歌である可能性を示すが、異文が多く、この歌の引用と断定できないことから、本論では考察の対象から外した。

注四：友久武文氏「住吉物語の諸伝本について」(『伝承文学研究』二〇、一九七五年七月)

注五：武山隆昭「住吉物語の中古語彙と中世語彙」『住吉物語の引歌』（『住吉物語の基礎的研究』一九九七年、勉誠社）

注六：成田本の引用本文は武山隆昭「校本」成田」（『住吉物語の基礎的研究』一九九七年、勉誠社）により、適宜私に表記をあらためた。掲出するページ数も

同書による。なお、本文異同の箇所で使用する諸本略称は以下のとおり。藤井本：藤、京都本系：京、徳川本系：徳、鈴鹿本系：鈴、成田本系：成、白

田本系：白、多和本系：多、住吉本系：住、晶州本系：晶、筑波大本系：筑、小学館本系：小、契沖本系：契、横山本絵巻系：横、正慶本系：正、

千種本系：千、白峰寺本系：白、陽明本系：陽、大東急本系：大、真銅本系：真。

注七：毛利正守「『袖折り返し』考」（『萬葉』第七十八号、一九七二年二月）は、袖を折り返す行為について「相手を夢に見んため、又は相手の夢に現れんた

め」というよりむしろ「想ひをよせる人に直接逢ひたい、早く現実に逢ひたいと願ふ気持ち」に由来するという。松田武夫『新釈古今和歌集』下（風間書房、一九七五年）および田中喜美春「反衣の呪術」（『小町時雨』風間書房、一九八四年）は、この行為は本来、相手の所に行つてしまった自身の魂を呼び返し、

相手と現実に逢うべくなされたものとする。

注八：三角洋一、石埜敬子校注 新編日本古典文学全集三九『住吉物語』とりかへばや物語』（小学館、二〇〇二年）、三角洋一氏担当。

注九：管崎博道『住吉物語通釈全』（公論社、一九〇三年）、藤井乙男、有川武彦『註解新訳住吉物語』（東京成象堂、一九三二年）、浅井峯治『住吉物語詳解』

（大同館書店、一九三二年）。

注一〇：西郷信綱「長谷寺の夢」（『古代人と夢』平凡社、一九七二年）

注一一：伊藤博「萬葉の恋」（『万葉集相聞の世界』塙書房、一九五九年）

注一二：近藤みゆき「歌ことばとジェンダー」「恋」を核とする歌群の考察から」（『講座平安文学論究』一七、二〇〇三年五月）

注一三：前田善子『小野小町』（三省堂、一九四三年）、秋山虔「小野小町のなるもの」（塙選書⁵⁷『王朝女流文学の形成』所収、塙書房、一九六七年）

注一四：関敬吾「婚姻譚としての住吉物語」（関敬吾著作集四『日本昔話の比較研究』同朋社出版、一九八〇年）は姫君の流離と成女式とのかかわりを説き、これを受けた三谷邦明「継母子物語の系譜―受容と文学あるいは古『住吉』から『貝合』まで」（『物語文学の方法』有精堂出版、一九八九年）は、籠もる

モチーフの背景に、成女式と同時に行為される月経小屋への忌み籠もりのイメージがあることを指摘する。

注一五：長谷寺の忌み籠もりが霊夢を得るためのものであったことについては注一〇前掲書に詳しい。

注一六：三角洋一「住吉物語の本文のなりたち」（『物語の変貌』若草書房、一九九六年）

注一七：藤井本で成田本落丁部分を補うことの危険性は吉海直人「『住吉物語』再検討―藤と桜の揺れ」（『國學院雑誌』八七・一二、一九八六年十二月）が

指摘している。しかしこの箇所については、成田本以外の諸本が共通して『好忠集』の歌、男君の「しらゆきの」歌をもつことから、藤井本を用いても問題ないと判断した。

注一八…舟歌とする本文の歌い手の異同は、みなく(京)／海士人ども(品)／あき人ども(正)／たび人あまた(往)となつてゐる。対して遊女とする本文の異同は以下のとおり。あそびものども(藤)鈴(契)／あそび物も(白)／あそび物(小)／あそび人共(多)／ながれのきみども(翁)／きみ(大)

注一九…滝川政次郎『遊行女婦・遊女・傀儡女―江口・神崎の遊里―』「序説」(至文堂、一九六五年)

注二〇…小町谷照彦「『うき舟』考」(『むらさき』二八、一九九一年十二月)

注二一…友久武文「住吉物語の和歌・連歌・歌謡―原本性追究の試み―」(広島中世文芸研究会編 中世文芸叢書別巻1『連歌とその周辺』)(広島中世文芸研究会、一九六七年)

注二二…三角洋一「『住吉物語』おぼえがき」(『物語の変貌』若草書房、一九九六年)

注二三…この歌は『風葉集』に姫君詠として収められ、(徳)・(白)・(品)・(白)にもみられる。

注二四…伊東祐子「『藤の衣物語』の成立年代について」(『藤の衣物語絵巻(遊女物語絵巻) 影印・翻刻・研究』笠間書院、一九九六年)

注二五…三角洋一「『あまら』の成立と趣向」(『物語の変貌』若草書房、一九九六年)、辛島正雄「『明石』巻の『海人の子』をめぐる覚書―散逸『あまら』物語のことなど―」(『文学研究』(九州大学) 九七、二〇〇〇年三月)

注二六…注九前掲浅井氏注釈書。

注二七…小峯和明「中世説話の小町」(『国文学解釈と鑑賞』六〇・八、一九九五年八月)

注二八…菊地仁「古典の再生、変容―(伊勢物語難儀注)を軸とする―」(『国文学』五〇・一〇、二〇〇五年十月)

注二九…『能宣集』に見える古本の男君の呼称が「侍従」であることから、注一前掲石川論文は「侍従くらいの地位年齢が姫の恋の相手としてふさわしかった時代」の成立であり、「遅くとも円融朝(論者注・九六九〜九八四)には出来ていた」とする。

注三〇…片桐洋一「『小野小町集』考」(『言語と文芸』四九、一九六六年五月)、『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇年)

注三一…小野寺静子「譬喩の歌―植物の寓喩―」(『札幌大学女子短期大学部紀要』二四、一九九五年三月)

注三二…馬場あき子「小野小町・恋する女」(『国文学解釈と鑑賞』四一・一、一九七六年一月)

注三三…先行論では『無名草子』の語り手の老尼、『平家物語』灌頂巻の建礼門院、『とはすがたり』の出家後の二条などが小町の説話的イメージを帯びる女性

として挙げられている。老尼については島内景二「『無名草子』の意義―再評価された王朝文学」（『源氏物語の影響史』笠間書院、二〇〇〇年）、建礼門院については水原一「建礼門院の侍尼」（『平家物語の形成』加藤中道館、一九七一年）、二条については寺尾美子「『とはがたり』の旅における小町幻想とその現実」（『日記文学研究』第一集、新典社、一九九三年）に詳しい。

注三四：『玉造小町子壮衰書』は空海著と伝えられるが、実際の成立時代は確定できない。しかし濟暹（一〇二五―一一一五）編の『弘法大師御作目録』に「玉造小町書一卷」、覚饒（一〇九五―一一四二）編の『高祖御製作書目録』に「玉造小町壮衰記一卷」とあり、一一世紀半ばには成立していたものであろう。

第二部第二章 小野小町髑髏説話の展開・変遷―『江家次第』を中心に―

はじめに

十二世紀以降の歌学書・説話集を中心に、眼窩を植物に貫かれた小野小町の野晒しの髑髏が「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ／小野とはならず薄生ひけり」という歌（以下、「あなめ」の歌）を詠み、それを聞きつけた人物に供養されるという説話（以下、髑髏説話）が散見される。

従来、この髑髏説話は老衰落魄した小町のさらなる末路として解釈されることが多く（注一）、十二世紀半ば以降積極的に小町に結び付けられるようになる、奢侈驕慢を極めた女の零落を主題とした漢詩文『玉造小町子壮衰書』（以下『壮衰書』）が説話の成立に影響を及ぼした可能性も説かれてきた（注二）。たしかに、そのような小町のイメージの萌芽は『古今集』の小町詠の段階から見出されるものであった。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに
今はとてわが身時雨にふりぬれば事の葉さへに移ろひにけり
（『古今集』春下113
同、恋五782）

文屋康秀が、三河掾になりて、県見には、え出で立たじやと、言ひ遣れりける返事に、よめる
わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらば去なむとぞ思
（同、雑下938）

「花の色は」歌は六朝閨怨詩などの漢籍の表現をふまえつつ、「花の色」が「うつ」るさまに自身の容色の衰えを重ね合わせたものであることが指摘されている（注三）。また「今はとて」歌は『古今集』によれば小野貞樹に贈った一首で、第三句「ふりぬれば」に「時雨」が「降る」ことと、わが身が「経る」の意を掛け、時雨が降ることと紅葉・落葉が進むように、自分の容色が衰えたため、永遠を誓った「事の葉」までも移ろってしまった、と詠む。そして「わびぬれば」歌は三河に赴任する康秀の誘いに応えてともに下向することを承諾するという内容で、これを真情の吐露と取るなら、都で暮らしていた小町はその苦悩や憂愁ゆえに、地方官―それも卑官である「掾」の妻として「県」へ下ろうとしていることになる。その原因として、経済的な窮乏や容色の衰えを考慮することが可能である。

小町の実際の事跡はほとんど不明であり、実像に肉薄しようとするれば『古今集』所収歌をはじめとするその詠作に拠るほかない。その結果これらの歌々から、年を重ねるごとに男性に顧みられなくなった小町、という説話的イメージが導き出されていったことは想像に難くない。片桐洋一氏（注四）は、十世紀後半の『古今和歌六帖』第二帖の森部に『古今集』雑上、八九二番歌として載る詠人不知歌「おほあらしのもりのした草おひぬればこまもすさめずかる人もなし」が小町の作として見えることに着目し、そうしたイメージがすでにこの時代において形成されていたと想定するが、首肯すべきだろう。馬にも人にも顧みられることのない「おひ」た森の下草を詠むこの歌は、「花の色は」歌や「今はとて」歌に詠まれた「わが身」の衰えへの嘆きと、それを原因とした恋人の心変わりを経験した老女・小町の詠としてふさわしい。そ

れは若き日に奢侈驕慢を恣にしていたものの両親兄弟の死によって零落し、身分の低い獵師の妻となることを余儀なくされた『壮衰書』の老婆の経歴にも響き合う。そして鬮體説話の内容もまた、このような女の生の延長上に位置付けられよう。

ただし資料の上であらわれている鬮體説話は前掲した大筋以外の部分において相違点が少なく、少しずつかたちを変えながら伝承されてきたことが窺われる。そしてその中では、説話の背後に置かれている小町の落魄のイメージも変化を遂げている可能性がある。以下では大江匡房（一〇四一—一一一一）の儀式次第書『江家次第』が伝える、成立年代が判明している中では最古の鬮體説話（注五）を中心に諸資料を検討し、この問題を考察したい。

一、『江家次第』の鬮體説話の内容

『江家次第』の伝える鬮體説話は以下のような内容である。

或云、在五中将為嫁件后出家相構、其後為生髮至陸奥国、向八十島求小野小町戸、夜宿伴島、終夜有声曰、秋風之吹仁付天毛阿那目阿那目、後朝求之、鬮體目中野蕨在五中将涕泣曰、小野止波不成薄生計里、即斂葬、

これは「后宮出車事」という項目に引かれた在原業平の説話的遍歴の一部であり、五条后順子の大原野行啓における業平の二条后高子への贈歌、二者の「密事」の噂につづけて記されたものである。その内容を見てみると以下の通りである。業平は「伴后」、すなわち高子との密通ゆえに「出家」を余儀なくされ、そのち髪の毛を生やすために陸奥国に向かった。そして陸奥国での業平は「小野小町戸」を求め、八十島に向かい、そこで「秋風の吹につけてもあなめあなめ」との声を聞く。翌朝、目の中に「野蕨」を生やした鬮體を見つけて業平は涙を流し、鬮體のうたう上句に「小野とはならず薄生けり」と下句を附して鬮體を葬ったというのである。

ここで説話の舞台となっている「八十島」は、『能因歌枕』や『和歌初学抄』などでは出羽、『夫木和歌抄』では陸奥ないし沓岐の歌枕とされるが、以下の『能因法師集』の例から現在の秋田県にかほ市の象潟に存する島と考えられる。

出羽の国にやそしまに行きて、三首

世の中はかくてもへけりひさかたやあまのとま屋をわが宿にして

嶋中有神、云蚶方

（榊原家本『能因法師集』113）

天にます豊岡姫に言問はむいく代になりぬきさかたの神

（同114）

その古い例としては、『後撰集』初出歌人である藤原元真の家集『元真集』に見える「いではのやそ島に、船にのりて人あそぶ」という絵に附された屏風歌「やそしまのうらのなぎさにかそつ」とまれるとしもあまたへぬべし（西本願寺本『元真集』30）がある。これは宮中の屏風に描かれた絵であった。また十二世紀半ばの藤原清輔による歌学書『袋草紙』は、能因法師はこの地を訪れた経験をもとに『八十島記』なる書を著したことを記しており、平安中後期には奥州の景勝地、歌枕として人口に膾炙していた地であったようだ。

十二世紀末の顕昭の歌学書『袖中抄』は、小町がこの地で遺骸を晒している理由を『古今集目録』が小町の出自を「出羽郡司女」と記していることと関連させて考え、小町は都で好色の生活を送ったのち故郷に戻り、この地で亡くなったと見ている。そのように、平安後期以降の歌人伝が伝える小町の出羽出身説話からこの「八十島」が導き出されてきたと考えることは十分可能であろうし、また小町の遺骸が「島」に野晒しとなっていることは、第一部第二章や第二部第一章で述べたような、「水辺に漂泊する小町」のイメージにも連なってくる。能因法師が詠んでいる「八十島」の「あまのとま屋」のような場所に閑居していた老年の小町が何らかの事情で亡くなり、遺骸がそのまま野晒しとなったのか、あるいはさすらいの果てにこの地で行き倒れたのか。

ただし『江家次第』の記事中に「水」のイメージはさほど顕著ではなく、むしろ前面に押し出されているのは遺骸の周辺の草の繁茂である。小町の髑髏の眼窩からは「野蕨」が生え、その有様を目の当たりにした業平は「薄生ひけり」と詠んでいる。

本文と短連歌に登場する植物の種類が異なる点は不審であり、そこに説話の形成・成長過程での何らかの混乱や、歌と説話本文との乖離が想定される。だが、この下句には小町の姓と重なる「小野」の語が詠み込まれている点、注意を要する。これは松井健児氏（注七）が指摘するように、髑髏の「名をあばく」ことよって鎮魂に導く行為と見るべきであろう。なお『萬葉集』には、小町の髑髏と同じような行路死者に手向けられた歌——いわゆる「行路死人歌」が見られるが、その中には以下のように、死者の国や家、名、両親や配偶者といった家族に言及するものが少なくない。

：荒床 自伏君之 家知者 往而毛将告 妻知者 来毛問益乎 玉梓之 道太尔 不知

（『萬葉集』卷二 220 讃岐狭岑嶋視石中死人柿本朝臣人麻呂作歌一首）

：邦問跡 國矣毛不告 家問跡 家矣毛不云：

（同、卷九 1800 過足柄坂見死人作

歌一首）

：思布 言傳人跡 家問者 家乎母不告 名問跡 名谷母不告 哭兒如 言谷不語：

（同、

卷十三 3336

行路死者との遭遇に際しては、歌によって死者の名や所属していた共同体の記憶を喚起しつつ、死者に寄り添う姿勢を見せることが重要であったことが知られる（注八）。死者の発する声を歌の上句に聞きなして唱和し、「小野」という小町の名、出自を喚起する業平の姿勢は、こうした古代の鎮魂の「うた」の水脈にもつながっているように。

だが「行路死人歌」の作者たちが旅の途中で偶然に行き合った死者たちの「名」を知らない、と述べているのに対し、『江家次第』の業平

は誰に教えられることもなく髑髏の正体を見破り、「小野」という名をあばいている。この説話の語り手が、業平と生前の小町に何らかの交渉があったことを前提としているかのような展開である。先行研究はこの記事に『伊勢物語』の享受世界において醸成された業平・小町の恋愛譚の影響を見ており（注九）、ことに小峯和明氏や錦仁氏は、かつての恋人との再会によって小町が救われる、という構造を読み取っているが（注一〇）、首肯すべきだろう。

業平・小町は『古今集』の仮名序に「近き世に、その名聞こえたる」六人の歌人、いわゆる六歌仙のひとりとして共に名が挙がっているが、実際の交渉を示す記録はない。ただし業平をモデルとした「男」を主人公とする『伊勢物語』には、「男」の相手の女の歌として『古今集』所載の小町詠を利用した章段が以下のように見受けられる。

むかし、をとこ有けり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はで寝る夜ぞひちまさりける
色好みなる女、返し、
見るめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海人の足たゆく来る

（『伊勢物語』二五段）

むかし、みちの国にて、おとこ女すみけり。おとこ、「宮こにいなん」といふ。この女いと悲しうて、馬のはなむけをだにせむとて、おきのあて、都島といふ所にて、酒飲ませてよめる。

おきのあて身を焼くよりも悲しきは宮こしまべの別れなりけり

（同一五段）

二五段については第一部第二章でもふれたが、『古今集』恋三に連続して配列された題不知の業平詠と小町詠（六二二・六二三番歌）を「男」と「色好み」の女との贈答として構成している。一一五段は『古今集』の巻末に墨滅歌（一一〇四番歌）として掲出された小町の「おきのあて、みやこしま」という地名を詠み込んだ物名歌を、陸奥国の女が上京する「男」との離別に際して贈った歌として利用している。いずれも小町詠を利用して生み出された虚構的な章段と見るべきものである。

だが平安期以降、『伊勢物語』は業平の実際の事跡として享受され、そこに登場する「男」の相手の「女」に具体的な名前を与えることも行われた。その中でこれらの小町詠利用章段は、業平と歌の作者である小町との関係を伝えるものと解釈されるようになる。時代は下るが、『和歌知頭集』や『冷泉家流伊勢物語抄』をはじめとする中世の『伊勢物語』注釈書は業平の恋の相手のひとりとして小町を挙げ、これらのほかにもいくつかの章段の「女」に小町の名を当てている。こうした『伊勢物語』を源泉とする業平・小町の恋愛譚が、匡房が生きた十一世紀半ばから十二世紀初頭にかけてある程度形を成しており、それが『江家次第』の記事に結実していったと考えられる。

二、独詠型から短連歌型へ

ただし注意しておかねばならないのは、『江家次第』が髑髏説話の原型をそのままに伝えている可能性は低いということだ。平安期から中世にかけて成立した諸資料が伝える髑髏説話の中には、『江家次第』同様に説話の舞台を陸奥国とし、「あなめ」の歌を小町の髑髏と業平によって為された短連歌と位置付けるもの（以下、短連歌型）のほか、「あなめ」の歌を小町の髑髏の独詠とするもの（以下、独詠型）も存在する。そして独詠型は短連歌型よりも簡素な構造を有しており、古い時代の記事には具体的な地名や発見者の名前が記されない。よって先行の諸研究が指摘するように、独詠型のほうが説話の原型に近く、短連歌型は独詠型から派生したものと見るのが妥当であろう。ただし独詠型がどの時点で短連歌型に展開したのかについては見解が分かれており、検討を要する。

前田善子氏（注一一）は髑髏説話の系譜を検討する中で、『江家次第』の伝える短連歌型髑髏説話を「範兼・清輔の引用した、この種の同じ伝説を、事後的根拠の有無は兎も角として、業平小町と結合潤色して一大展開せしめたもの」としている。十二世紀前半の藤原範兼『和歌童蒙抄』（注一二）、十二世紀半ばの藤原清輔『袋草紙』に掲げられている以下のような独詠型の説話を、匡房が脚色して『江家次第』の記事に仕立てたというのである。

あきかぜのふくたびごとにあなめくをのとはならじすきおひけり

小野小町集にあり。昔野中を行人あり。風の音のやうにて此歌を詠る声聞ゆ。立よりて尋きつけければ、白くされたる人のかしらの中より、すきおひ出たるが、ながめける也。そのすきをとりすて、其頭を清き所に置きて帰りぬ。其夜のゆめに、我はこれ昔小野小町といはれし者也。うれしく恩を蒙りぬると云へりけり。さて此歌をか集にいれるとぞ。あなめくとはあなめいたと云也。

『和歌童蒙抄』七、草部、秋草、薄 依拠本二四八頁

小野小町、

秋風のうちふくごとにあなめ小野とはいはじすき生ひたり

人の夢に、野の途に目より薄生ひたる人有り。小野と称し、この歌を詠ず。夢覚めて尋ね見るに、一の髑髏有り。目より薄生ひたり。その髑髏を取りて閑所にこれを置きぬと云々。小町の屍と知りぬと云々。

『袋草紙』下巻、亡者歌

これらの記事においては、髑髏の眼窩を貫く植物が「薄」となっており、「あなめ」の歌の下句との対応が見られる。また説話の舞台や発見者の名前は示されず、発見者と生前の小町の関係を示唆するような記述もない。発見者は野中、あるいは夢において「あなめ」の歌を聞きつけて髑髏を発見・供養して、その夜の夢ないし前夜の夢の記憶によって髑髏の正体を知る。なお『和歌童蒙抄』では最後に小町が発見者の夢の中で礼を述べており、『述異記』の「周氏婢」や『日本霊異記』の「髑髏目穴笋掲脱以祈之示霊表縁 第廿七」のような、髑髏の眼窩に生えた植物を抜いてやったことで富を得るといふ枯骨報恩譚の系譜に連なるものとなっている。こうした話が『伊勢物語』の享受世界で醸成された業平・小町の恋物語や業平の東下りと結び付き、業平・小町の恋の結末を語る説話に成長したと見ることも不可能ではないだろう。

だが、『和歌童蒙抄』が「あなめ」の歌の出典として挙げる「小野小町集」の伝本の存在が報告されると（注一三）、以降、そちらが『江家

次第』の原型として扱われることが増えてくる(注一四)。「小町集」の現存伝本については第一章でふれたが、「あなめ」の歌を掲出するのは全六九首からなる神宮文庫本系統の巻末、第三部である。「あなめ」の歌はこの第三部で馬内侍や齋宮女御といった『拾遺集』初出歌人の歌のあとに位置付けられており、十一世紀以降の増補と思われる。そして十二世紀前半の『和歌童蒙抄』にこの箇所についての言及があることから、遅くとも十二世紀初頭ごろには神宮文庫本系統の『小町集』か、その増補に用いられた現存しない系統の伝本に増補されていたと見られ、ことによると『江家次第』よりも先行する可能性も考えられる。

そして以下に掲げるその内容は、髑髏こそ登場しないものの『和歌童蒙抄』『袋草紙』よりも『江家次第』の内容と共通する部分が多い(注一五)。

おなじ比、みちの国へくだる人に、「いつばかり」ととひしかば、「けふあすものぼらん」といひしかば

みちのくはよもうき島も有といふを関こゆるぎのいそかざるらん

(唐草なし、神宮 67、静嘉 85、承空 78、書乙 77、正保 76)

などいひてうせにけり。のちを、いかにもする人やなかりけん、あやしくてまろびありきけり。あはでかたみにゆきてける人の、思ひもかけぬ所に、歌よむこゑのしければ、おそろしながら、より、きけば

秋風のふくたびことにあなめくをのとはなくて薄おひけり

(神宮 68/他本なし)

ときこえけるに、あやしとて、草の中をみれば、小野小町がすまきのいとをかしうまねきたてりける。それとみゆるしるしはいかゞ有けん。

まず六七番歌の詞書において、陸奥国で暮らす小町は、「みちの国にくだる人」に「いつばかり(いつ上京するか)」、と訊ねる。すると相手は、今日明日にも上京する、と答える。そこで小町は「みちのくは」歌(六七番歌)を詠んで姿を消し、その後世話をする者もないので「あやしくてまろびありきける」という身の上になったという。これは小町の「おきのあて」歌を用いて構成された『伊勢物語』一一五段同様の、陸奥国に住む小町が「みちの国にくだる人」、すなわち彼女と関係を持っていた都の男との離別を描いた話である。そしてその後日談として、誰にも顧みられることがない小町の「まろびあり」く、というさすらいの姿が語られてゆく。

「あなめ」の歌(六八番歌)はこのエピソードに連続するものとして置かれており、「あはでかたみにゆきてける人」がこの歌を聞きつけ、奇妙に思つて「草の中」を見るとそこには「小野小町がすまきのいとをかしうまねきたてりける」という情景があったとされる。「あはでかたみにゆきてける人」については「あがたみにゆきてける人」の誤写という説もあるが(注一六)、単純に解するならばこれは「会わないでお互いに行つてしまった人」となり、失踪した小町に会うことができず行き違いになった人物ということになる。これは小町を訪ねてきたが会うことのできなかつた別の男とも解釈しうるし、先に登場した「みちの国にくだる人」と同一の存在と見ることもできる。そのような男が、秋風が吹く中で小町の遺骸、あるいは墓所に生える薄が招くように揺れるさまを見出したというのである(注一七)。

すると、『小町集』と『江家次第』はともに説話の舞台を陸奥国に設定しており、小町は「あなめ」の歌を機縁として、かつての知己、おそらくは恋人との再会を遂げている。この二資料のあいだには、歌語りや時代の流れとともに散逸したテキストが介在しているであろうこと

は言うまでもないが、『小町集』六七・六八番歌の元となった話（あるいはそこから派生した話）が、小町詠を詠む女と上京する「男」との陸奥における離別を語った『伊勢物語』の一一五段あたりを接点として『伊勢物語』の世界、業平・小町の恋愛譚を取り込み、『江家次第』へと展開していった、というおおまかな流れを想定することができる。あるいは『小町集』と『江家次第』の中間に、中世の『伊勢物語』や『古今集』注釈に見られる以下のような髑髏説話の類話を置いてみることも可能ではないか。

又漢書云、涙雨漸々潤興芳七尺之盧橘纒伝古袖頭髓貫脉、菀蕉二丈之薄花速迷綾心といへり。……又菀蕉妻掇といふもの有。つまのえんしやう野に行て死たりけるを、野に行てたづぬるに、女のかばねより生とをれる薄二丈ばかりなるが男をまねきけるより薄の人まねくといふ。
〔冷泉家流伊勢物語抄』六〇段〕

漢書云、涙雨漸々潤興芳七尺之盧橘纒伝古袖、頭髓貫脉菀雀二丈薄花速迷後心矣。……又、菀雀・婁州トテ夫婦アリ。妻ノ菀雀、物ヲネタミテ野ニ行テ死ス。尋ネアリクニ、二丈バカリナル尾花、我ヲマネク。行テ見レバ、彼ノ妻ノカバネヨリ生タル薄也。是ヨリシテ尾花ノ人ヲ招クト云事ヲ云ヘリ。
〔弘安十年古今集歌注』¹³⁹番歌注、依拠本二、三六八頁〕

これは「薄」が「招」く、という和歌表現の本説として引かれたもので、小町ではなく唐土の女の遺骸についての説話である。その中には典拠が「漢書」と記されるが、『漢書』中に該当する記事は見られない。本説の権威化のために『漢書』を利用したものと考えられる。

この説話については西村聡氏（注一八）が小町の髑髏説話との近似性を指摘しているが、時代が下るものであるからか、髑髏説話の成長・展開との関係が論じられることはなかった。だが、妻が家を出て野で死に、夫が彼女の行方を尋ねると、女の遺骸から生えた薄が彼を招いたというその内容は『小町集』の六七・六八番歌詞書を連想させる。いっぽう『漢書』の引用とされる部分には「薄花」が「頭髓貫脉」とあることから、その薄は白骨化した遺骸の目の穴から生えていたと見られる。その点においてこの説話は、『江家次第』以降に言及されるようになる、眼窩を植物に貫かれた小町の髑髏のイメージをも備えている。髑髏説話の形成・展開過程で、小町ではなく別の女の話として伝えられるようになったそのヴァリアントが、中世にまでその命脈を保ち、『漢書』由来の説話として『伊勢物語』や『古今集』の注釈書に取り上げられた可能性が考えられるのである。

三、業平が小町の「薄」を「求」めるとして

ところで、『小町集』では「あはでかたみにゆきてける」人が偶然に「あなめ」の歌を聞きつけ、「草の中」にその声の主を見出してた。だが先に掲げた中世の『伊勢物語』・『古今集』注所載の類話では、夫が出奔した女を尋ね歩き、招く薄に導かれて野晒しとなった遺骸にたど

り着いている。そして『江家次第』になると、業平はすでに小町の「尸」が「八十島」に存在することを知っており、おそらくは鎮魂・供養のためにそれを「求」めている。このときの業平は、その理由はともかくとして「出家」の姿であり、そこに行路死者を回向する旅僧のおもかげを見ることが可能であろう。

しかし、業平が小町の「尸」を「求」めるといふ要素がここで鬻體説話に導入されたのは、おそらくそのような理由からだけではない。特筆すべきは、恋人の遺骸、ないし草の繁茂する終焉の地を尋ね求める、という行為が十世紀・十一世紀の物語を中心に少なからず確認されるということだ。従来『江家次第』の鬻體説話を論じるにあたり、この問題が着目されることはなかった。だが『江家次第』以前に見られるこれらの例を検討することで、業平の行為の意味するところが浮かび上がってくる。そしてそれは、鬻體説話の展開・変遷を考える上で重要な意味を持つてくるのである。

この行為を物語の主題にまで昇華した作品として、散逸物語『かばねたづぬる』がある。『更級日記』や『風葉和歌集』により断片的に知られるこの物語の内容は、『中世王朝物語・御伽草子辞典』によれば以下のとおりである（注一九）。

三宮はある女のもとに忍んで通っていたが、三宮の夜離れか、或いはこの関係を望まない親や北の方などの脅迫により、女は入水する。三宮は夢枕で、女が入水したこと、成仏できないことを知る。女をあわれんだ三宮は、供養するために女の屍を探し求めるが見つからず、自ら出家して勤行に励む（あるいは逆に、出家してから女の屍を探し求めるという順序も考えられる）。また現存する物語の中には、男が女の失われた遺骸の探索を幻想する例が以下のように見える。

すみよしのものがたり、多にかきたるを、うたなきところぐくにあるべしとて、あ（三字分空白）ころのおほせごとにてよめる、じ
うのひめぎみもとめに、ならびのいけのいひのつらにあたるところ
いりにしはそぞとだにもいひつげばたまもわけてもとふべきものを
（書陵部蔵（五一〇・一一二）本『能宣集』328）

骸をだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりけむなど、やる方なくおぼす。

（『源氏物語』蜻蛉巻、依拠本⑤二九〇～二九一頁）

韓泊底の水屑となりにしを瀬々の岩間も尋ねてしがな

「かひなくとも、かの跡の白波をだに見るわざもがな」とおぼせど、都の内の御歩きをだにも御心に任せたまはず、ところせくわりなき御もてなしなれば、まいておぼしかくべきことにもあらねば、いと口惜しくおぼしつづけらるるに、…

（『狭衣物語』巻二、依拠本上 二一一～二二二頁）

まず書陵部蔵（五一〇・一一二）本『能宣集』三二八番歌は、能宣が「あるところのおほせごと」により古本『住吉物語』の絵に附した歌のひとつで、失踪した姫君を探し求める男主人公「じかう（侍従）」の立場から詠まれている。姫君はこのとき継子いじめに苦しみ、住吉へと逃げだしているのだが、侍従はそれを知らない。ゆえに姫君が「ならびのいけ」に身を投げた可能性を思い、もしそこに身を投げたとしても言

つてくれたら、池の藻を分けても遺骸を探すものを、と言っているのである。

次に挙げた『源氏物語』の例は、浮舟の遺骸を思う薫の心内表現である。浮舟は薫と匂宮の間で揺動した結果、宇治川への入水を決めて出奔する。蜻蛉巻ではそのような浮舟の遺骸なき葬儀にさいして乳母や実母が悲嘆にくれるのであるが、薫もまた水底に沈んで失われた浮舟の遺骸を思い、それを探し求めることができなかつたことを悲しむ。

そして『狭衣物語』では、飛鳥井姫君が狭衣と関係を持つものの、乳母に謀られて大夫道成の筑紫行きに船に乗せられ、道成と夫婦になるよう求められる。狭衣だけをひたすらに思い続ける飛鳥井姫君は船が虫明の瀬戸に差し掛かったところで入水を試みる。道成から飛鳥井姫君の末路を知らされた狭衣は「韓泊」の歌を詠み、「底の水屑」となつた飛鳥井の遺骸を瀬々の岩間まで探し求めたい、と述べた上で、それが叶わなくてもせめて「跡の白波」だけでも目にしたい、と願うのである。

これらの例は、いずれも女のさすらいの果ての入水、あるいはそれを予感させる失踪にさいして、その恋人である男が希求するものとなっている。遺骸の搜索は実際には叶わず、また女たちも姿を隠しているだけで、その遺骸が本当に水底に沈んでいるわけではない。だが、遺骸の搜索を思い描くという行為は、その男が女につよい執着と恋情を向けていることを浮き彫りにする。『江家次第』で業平が八十島に足を運んで小町の「尸」を求めているところにも、かつての恋人である小町への並々ならぬ思いを読み取ることができるのではないか。

ここで薫や狭衣が思い描く水底に沈んだ女の遺骸は、『江家次第』に登場する、眼窩に「野蕨」を生やした野晒しの髑髏とはイメージの上で相違する。だが、より髑髏説話に近似した「遺骸を求める」行為の類型として、「草の原」を尋ねる、という行為が挙げられよう。

その現存する最も早い例は『源氏物語』花宴巻である。光源氏は逢瀬ののち朧月夜に「名のり」を求め、それに対して朧月夜は以下のように詠む。

うき身世にやがて消えなばたづねても草の原をば問はじと思ふ

『源氏物語』花宴巻、依拠本①二七七頁

第一句「うき身」は「憂き身」と「浮き身」の掛詞であろう。憂愁を抱えた寄る辺なきこの身がそのまま消えてしまったとして、あなたは「草の原」を尋ね当てて来てくれなどしないでしょうに、というのである。その第四句に詠み込まれた「草の原」の用例は『源氏物語』より前にほとんど見られないのだが、墓所、あるいは草の繁茂した死者の最期の地を求め、という行為が詠まれた和歌が以下のように見えることを考慮して、ここも墓所や最期の地と解するのが妥当であろう（注二〇）。

まかりいでゝ御ふみつかはしたりければ

中将更衣

けふすぎばしまし物を夢にてもいづこをはかと君がとほまし

『後撰集』恋二 640

女のもとに物をだにいはいはんとて、きたりける人、あしたに

消かえり有かなきかの我身かなうらみてかへる道芝の露

（正保版本『小大君集』59）

かへし

あはれとも草ばの露やとはれまし道の空にて消なましかば

(同60)

さて、先に見た例では、男は女を深く思うあまり、その失踪・死を嘆き悲しみ、「遺骸を求めろ」ことを希求していた。それに対して花宴巻では女が言い寄ってきた男の心を試すために、あなたは私が死んでも探してくれないでしょう、と詠んでいることになる。そのような歌を口にした朧月夜の様子は「艶になまめきたり」と表現されており、深刻性は希薄である。『源氏物語』におけるこのような表現は、この時代においてすでに恋人の遺骸や墓所、死地を探し求めるというイメージが死者への情愛の深さと結びついて人口に膾炙していたことを窺わせる。そして以降、吉野瑞恵氏（注二一）が指摘するように「草の原」の語は、「さすらい、あるいは失踪のすえ、悲惨な最期を迎えた者がこの世から姿を消した地」を想起させる語として用いられるようになる。その早い例として、『狭衣物語』において狭衣が失踪した飛鳥井を思つて詠んだ以下の一首が挙げられる。

尋ぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の露

(巻二、依拠本上 二二七頁)

この時点で狭衣は飛鳥井の入水の詳細を知らされていない。彼女が夢にあらわれた際に詠んだ歌をもって、その死を予感しているだけである。その飛鳥井の行き着いた先は「うき身世に」に詠まれた「草の原」と想像され、それを探し求めたいが霜枯れてしまい、飛鳥井に辿り着く手立てがない、と嘆いているのである。

これと同様の「草の原」の用例は『浜松中納言物語』にも見える。中納言のもとで暮らしていたものの式部卿宮に盗み出された吉野姫君は、以下のように考える。

かくてありと中納言のききつけ給はぬほどに亡くなり果てばや。さてのち、くさの原を尋ね給はんほどのあはれ、さりとも、あさくはおぼさじ。

こうした状況にあると中納言が知る前に自害してしまおう、中納言はその後で「草の原」を尋ねてくれるほどに、深く自分のことを思つてくれているだろう、というのである。

このような女の流離の果ての横死をめぐる物語的な想像力の世界が、『江家次第』の髑髏説話にも導入されているのではないか。そしてこのようなイメージにより、老いさらばえて人々に見捨てられ、氏族共同体からも切り離された場所で孤独に亡くなった小町を、かつての恋人であった業平だけは記憶している、ということが強調される。

最初に掲げた小町の「今はとて」歌、小町に結び付けられた「おほあらしの」歌から浮かび上がるのは、加齢と容色の衰えゆえに男性に顧みられなくなる小町の姿である。それは、『小町集』六八番歌詞書において小町が都の男と別れたのち「のちをいかにもする人やなかりけむ、あやしめてまろびありきける」という身の上となった、と記されているところにも繋がってゆく。

だが『小町集』はそれにつづけて、かつての恋人が偶然に「あなめ」の歌を聞きつけ、小町と再会を果たした、という話を記した。『江家次第』に引かれた説話はこの部分をより膨らませ、『伊勢物語』に語られている二者の関係の結末を、この時代の男の情愛の深さの表現であ

る「遺骸／草の原を尋ねる」という行為を利用して描き出しているであろう。それは、小町の孤独な魂が業平の想いとうたのことに触れ、その名を呼ばれることでようやく救われることができたという結末である。またこの結末は、『伊勢物語』六三段で「思ふをも、思はぬをも、けぢめ見せぬ心」と評された業平の、「心の深い色好み」という歌語的、説話的なイメージをも浮き彫りにするはずだ。

四、十三世紀以降の展開―「恋」の要素の希薄化―

だがこの後、小町の髑髏説話における「恋人との再会」の要素は希薄化、あるいは後景化してゆく。先に見たように、『和歌童蒙抄』『袋草紙』が伝える独詠型の説話にはそもそも「恋人との再会」という要素が含まれておらず、発見者は小町の遺骸を求めたのではなくて「あなめ」の歌を聞きつけて偶然に邂逅することになる。また、十三世紀の初頭において鴨長明の『無名抄』、源顕兼の『古事談』が取り上げている短連歌型の髑髏説話も、多くの点において『江家次第』と共通するものの、かつて男女関係にあった業平・小町の再会譚としての側面はかなり希薄になっている。

或人云、「業平朝臣、二條后の未だたゞ人にておはしましける時、盗み取りて行きけるを、兄人達に取返されたる由いへり。此事又日本紀にあり。事の様はかの物語にいへるがごとくなるにとりて、奪ひ返しける時、兄人達其憤り休め難くて、業平のもとを切りてけり。しかれば、誰がためにもよからぬ事なれば、人も知るべきにあらず。心一つにのみ思ひて過ぎけるに、業平朝臣、『髪を生さん』とて籠り居たりける程、『哥枕ども見ん』とて、数寄によせてあづまの方へ行きけり。陸奥国に至りてやそしまと云ふ所に宿りたりける夜、野の中に哥の上句を詠ずる聲有り。その詞にいはいはく、

秋風の吹くにつけてもあなめく

と云ふ。怪しく覚えて、聲を尋ねつゝ是を求むるに、さらに人なし。只死人の頭一あり。明くる朝猶これを見るに、彼のどくろ〔の目〕穴より薄なん一本生ひ出たりける。その薄風に靡く音のかく聞こえければ、怪しく覚えてあたりの人に此事を問ふ。或人語りて云、『小野小町この国に至りて、此所にて命終りにけり。則ち彼の頭是なり』と云ふ。こゝに業平、哀に哀しく覚えければ、涙を抑へて下句付けり。

小野とはいはじ薄生ひけり

とぞ付けたる。その野をば玉造りの小野といひける」とぞ侍る。玉造りの小町と小野小町と同人かあらぬ者かと、人々おぼつかなきことに申して争ひ侍し時、人の語り侍しなり。

〔無名抄〕小野とはいはじの事

業平朝臣、二条の後〔宮仕以前〕を盗み、将て去るの間、兄弟達〔昭宣公等〕追ひ至りて奪ひ返すの時、業平の本鳥を切ると云々。仍て髪を生ふすの程、歌枕を見ると称し関東に発向す〔伊勢物語に見ゆ〕。

奥州八十嶋に宿するの夜、野中に和歌の上の句を詠ずるの声有り。其の詞に曰く「秋風の吹く般毎に穴目穴目」と。音に就きて之を求む

るに人無し。只一つの髑髏有り。明且猶ほ之を見るに、件の髑髏の目の穴より薄生ひ出でたりけり。風吹く毎に薄のなびくおと、此くの如く聞こえけり。奇恠の思ひを為すの間、或る者の云く「小野小町、此の国に下向し、此の所にて逝去す。件の髑髏なり」と云々。爰に業平、哀憐を垂れ、下の句を付けて云く「小野とはいはじ薄生ひけり」と云々。件の所を小野と云ひけり。此の事、日本紀式に見ゆ。

〔古事談〕第二、臣節「業平、小野小町の髑髏と連歌する事」

このふたつの記事においては業平の東下りの事情もより詳細に説明され、髑髏の眼窩を貫く植物も業平の附した下句に詠み込まれている。「薄」とされる。より説明的で整合性の取れた話へと展開しているのである。だが業平は小町の「尸」を「求」めるためではなく、「歌枕」を見るために東国に下り、八十島に足を踏み入れている。『古事談』には、行成と口論の末にその冠を宮中の庭に投げ捨てた藤原実方が、天皇から「歌枕見て参れ」といつて陸奥に左遷される話も見えるが、業平の陸奥行の動機はこの話に共通するところがある。また、能因法師が陸奥国に下向し『八十島記』を著したことも、この業平像にいくばくかの影響を及ぼしていよう。だがいずれにせよ、ここに「遺骸／草の原」を尋ね求める物語の男たちに通う、小町への執着と情愛に突き動かされる業平の姿はもはや見られない。そしてそのような経緯で八十島を訪れているため、「あなめ」の歌の上句を聞きつけて髑髏を発見したさいにも奇妙に思うだけで、その正体を自らあばきだすことはない。第三者の教示によってそれを小町の成れの果てと知り、髑髏のうたう上句に「小野」の語を含んだ下句を附すこととなるのである。

また『無名抄』『古事談』と同時代に成立した物語評・女性評の書である『無名草子』は、その後半において小町を話題にし、『和歌童蒙抄』に近似した独詠型の髑髏説話にまで語り及んでゆく。そこにおいて髑髏の発見者は恋人ではなく、小町から百年ほど後に活躍した藤原道信(九七二―九九四)とされる。

「(小町の)老ひの果てこそ、いとうたてけれ。さしもなき人も、いとさまであることやはべる」と言ふ人あれば、「それにつけても、憂き世の定めなき思ひ知られて、あはれにこそはべれ。屍になりて後まで、

秋風の吹くたびごとにあな目あな目小野とは言はじ薄生ひけり

など詠みてはべるぞかし。広き野の中に薄の生ひてはべりける、かく聞こえたるなりけり。いとあはれにて、その薄を引き捨てはべりける夜の夢に、かの頭をば、『小野小町と申す者の頭なり。薄の、風に吹かるるたびごと、目の痛くはべるに、引き捨てたまひたるなむ、いとうれしき。この代はりには、歌をいみじく詠ませたまつらむ』と見えてはべりけるとかや。かの夢に見たる人は、道信中将と人の申しはべるはまことにや。誰かは、さることあるな。色をも香をも、心に染むとならば、かやうにこそあらまほしけれ」と言へば、…

〔無名草子〕依拠本二六五〜二六六頁

『無名草子』は髑髏になってまで歌を詠む小町の末路を「色をも香をも、心に染むとならば、かやうにこそあらまほしけれ」と理想化している点で特異だが、そこに伝えられている髑髏説話の内容に注目してみれば、それは従来の資料よりも悲惨なものへと変化している。小町は白骨となつてからも長い時間を荒野において過ごさねばならないのだ。

さらに注目されるのは、『無名抄』『無名草子』において髑髏説話の前段階に『壮衰書』が嵌め込まれ、老衰落魄譚の延長上にこの説話が存することが明確化されていることだ。『壮衰書』は駢儷体の序と長編の五言詩から成っており、以下のような内容である。すなわち、「予」と称する人物が路傍で疲弊、貧窮した惨めな姿の老婆に出会う。「予」が老婆に身の上を問うと、彼女は次のように語った。自分は倡家の子、良室の娘であり、若く美しかった時分には奢侈驕慢を極めた。家族の愛情を受けて大切にされ、錦の衣や宝玉に飾られた美しい姿で日々を送り、食卓には山海の珍味が並んだ。四季の風流を愉しみ、折に触れては和歌を詠じ、また管弦の遊びに興じた。そのような自分に多くの男たちが求婚したが、両親兄弟は王宮の妃に奉ろうと考えるばかりでそれを受け入れなかった。だが家族が相次いで亡くなり、家が没落して貧窮孤独の身の上となった。ある獵師の妻となり、先妻との諍いや夫の態度、貧しい生活やなまぐさもののばかりの食事に苦しみつつも一人の男の子を産み、育てた。そうした生活の中で出家の望みが強くなっていった。息子にも夫にも先立たれ、嘆きはますます強くなるばかり。今は仏に縋り、ただ極楽浄土に導かれることを願う、と。「予」は仏道を讃嘆するために筆を取り、彼女のことを詩に作った、というのである。

その作者は空海（七七四―八三五）と伝承されることが多いが、実際の作者は不明である。しかし濟暹（一〇二五―一一一五）の『弘法大師御作目録』ならびに覚鑿（一〇九五―一一四二）『高祖御製作書目録』に『壮衰書』の名が見えており、十一世紀の半ばまでには成立していたものであろう。そして藤原清輔の『袋草紙』（十二世紀半ば）や平康頼の『宝物集』（十二世紀後半）を皮切りに、『壮衰書』の老婆と小町を同一視する風潮が高まっていく。

そのような時代の中で語られた『無名抄』の短連歌型説話は、髑髏説話の舞台を「玉造りの小野」に設定し、「玉造りの小町と小野小町と同人かあらぬ者か」という議論のさいに語られた説話だと注記する。『無名抄』はこの時代の風潮を背景として『壮衰書』と短連歌型の髑髏説話を連関させ、「玉造りの小野」においてさすらう老残の小町―『壮衰書』に語られている老婆のさらなる末路として、髑髏説話を位置付けているのである。

また『壮衰書』の老婆のイメージは、『無名草子』所載の髑髏説話にも漂っている。その冒頭付近には、その筆録者として設定された八十三歳の老尼の身なりが若い女房によって「小野小町がひぢに掛けけむ篋よりはめでたし」と評される場面がある。これは『壮衰書』の老婆の描写「左臂懸破篋」を踏まえたものであり、作者が小町と『壮衰書』の老婆を同一視していることが知られる。『無名草子』において髑髏説話は小町の「老ひの果て」の凄絶さからの連想で語りだされているのだが、この「老ひの果て」という表現は、『壮衰書』を踏まえたものとするのが妥当である。

そしてさらに時代が下り、室町期に入ると、このような髑髏説話と『壮衰書』由来の老衰落魄譚を複合させる風潮はいっそう強まり、『三國伝記』『楊鳴暁筆』といった説話集が『壮衰書』由来の小町の老衰落魄譚と髑髏説話を接合させた小町説話を記すようになる。その中には、悲惨な最期を遂げた小町を憐れんだ空海が、その最期の地を人に訊ねて訪れたことが記される。これは発見者が自らの意志で小町の死地に赴いている点で、『江家次第』の系譜に連なるものといえよう。だがそれは恋人との再会ではなく、『壮衰書』の作者として伝承される高僧・空海が、哀れで罪深い女を回向するという話になっており、『江家次第』からは大きく隔たった内容へと変化している。

おわりに

以上、『江家次第』を中心に鬮髯説話の展開・変遷を概観してみた。その流れを振り返れば以下のようなようになる。すなわち、『小町集』『江家次第』が伝える十二世紀初頭までの記事は、孤独に朽ち果てた小町の恋人との再会に焦点を当てている。『江家次第』ではことにその点が顕著であり、『伊勢物語』の享受世界において小町の恋の相手とされる業平が、偶然に鬮髯と邂逅するのではなく、八十島に向かって小町の遺骸を求め、それを見出したとしている。この業平の行為は十一世紀の物語を中心に散見される、「遺骸／草の原を尋ねる」という表現の広がりの中に位置付けられるもので、かつての恋人である業平の、小町に対する強い思いを浮かび上がらせる。

だが以降、「恋」の要素は希薄化、後景化し、鬮髯の発見者は通りがかりの人物や、およそ百年後の人物である道信とも語られるようになる。そしてそのいっぽう、従来は説話中で明記されることがなかったその前日譚としての「老衰落魄」が、『壮衰書』の表現を用いて言及されるようになるのである。「あなめ」の歌を核とした小町の晩年と死をめぐるイメージが、時代と共に大きく変化を遂げてゆき、仏教的な女性観・罪障観を背景により悲惨な内容へと傾斜してゆくさまを、そこに見ることができるといえる。

さて、歌語りの場などで話題に挙がっていたこうした説話をテクストとして書き留めてきたのは、匡房、範兼、清輔、長明などの男性たちであった。また『吾妻鏡』によれば、建暦二（一一二二）年に御所で行われた絵合に、大江広元が「小野小町一期盛衰」を主題とした絵を提出した。そして時の将軍である源実朝はこの絵に関心をもったという。この時代には、文字テクストのみならず、鮮烈なヴィジュアル・イメージによって小町の老衰落魄と朽ち果ててゆく肉体のありさまが提示されているのだが、その担い手や享受者もまた男性であった。そのような説話であったからこそ、小町をより悲惨な境涯に追い込んでゆくことに躊躇いがなかったとも考えられる。そのような小町観を女性たちがどのように受け止めたのか、という問題については、今後の課題としたい。

注

注1：源義春「小町『あなめ』説話の形成について」（『国文学論集 浜口博章教授退職記念』和泉書院、一九九〇年二月）、小峯和明「ものいう鬮髯―魔の転生―」（『説話の声―中世世界の語り・歌・笑い』新曜社、二〇〇〇年）、錦仁「小町の老衰落魄譚」（『国文学 解釈と鑑賞』六九・六、二〇〇四年六月）、伊藤玉美『日本の作家百人 人と文学 小野小町』（勉誠出版、二〇〇七年）など。ことに源氏は、『枕草子』の「草の花は」段で「薄」が白髪の老人に準えられている点を重視し、そのような「薄」が小町を象徴するものとして用いられている鬮髯説話に「美女小町の老衰の嘆き」を読み取っている。

注2：石原昭平「小野小町説話の形成―業平との話をめぐって―」（『東横国文学』二、一九六九年二月）、伊藤孝子「小野小町説話の生成と伝承―歌語りと説話の関係を中心に―」（『国文学試論』一〇、一九七五年二月）。なお片桐洋一『小野小町追跡』（笠間書院、一九七五年）も、『小町集』六八番歌詞書のさすらう小町の描写に『壮衰書』との共通性を見ている。

注三…この問題については山口博『閨怨の詩人小野小町』（三省堂、一九七九年）に詳しい。

注四…注二片桐氏前掲書。

注五…本居内遠の『小野小町考』や目崎徳衛『日本詩人選6』在原著平、小野小町』（筑摩書房、一九七〇年）は儀式次第書にこのような説話が掲出されていることを不審とする。そして内遠は匡房が行った押紙などが本文転化したものと見、目崎氏は後人の書入れが同様の結果を迎えたものとする。ただし松本昭彦『江家次第』の説話的記事をめぐって（『国語国文』六五・四、一九九六年四月）が指摘するように、『江家次第』には話の面白さに重心を置いた「説話的記事」が散見され、その中には説話集と同・類話関係にあるものも少なくない。よって、匡房自身が『江家次第』に髑髏説話を記し留めたと見るべきなのではないか。あるいは十二世紀末に成立した顕昭の『袖中抄』が「江記曰」としてこの記事を引いていることから、現在そのほとんどが散逸した匡房の日記『江記』から増補された部分であるのかもしれない。しかしいずれにせよ、十一世紀半ばから十二世紀の初頭にかけて生きた匡房の周辺で語られていた髑髏説話を反映したものと考えられる。

注六…『江家次第』および顕昭の『袖中抄』（十二世紀末）に「江記曰」として掲出された、当該記事の本文異同は以下の通りである。

・在五中将——在中将（高松宮本『袖中抄』）

・至陸奥国——到陸奥国（内閣文庫本、高松宮本『袖中抄』、穂久邇文庫本『袖中抄』）

・向八十島——留八十島（高松宮本『袖中抄』、穂久邇文庫本『袖中抄』）

・髑髏目中野蕨——髑髏目中有野蕨（内閣文庫本）、髑髏目中有野蕨徹（陽明文庫本、高松宮本『袖中抄』）、「薄」に「ススキ」と傍記、野蕨に薇と傍記（大和文

華館本）

・薄生計里——薄出計里（高松宮本『袖中抄』、穂久邇文庫本『袖中抄』）

・即斂葬——即歿葬（穂久邇文庫本『袖中抄』）

注七…松井健児「小野小町髑髏詠歌考」（『昭和学院短期大学紀要』二五、一九八九年三月）

注八…なお伊澤正俊「行路死人歌唱和論—再死の呪歌—」（『上代文学』六二、一九八九年四月）は、行路死者が今際の際にこれらの語を含む歌を詠んだ可能性を想定し、「行路死人歌」はそれに唱和したものと考えている。そして行路死者は歌を聞かれる、唱和されることによって再演された死の儀式を通じて「再死」させられ、慰撫、鎮魂されるとする。「行路死人歌」がこうしたものであったとすれば、死者と生者による唱和を記した短連歌型の髑髏説話の構造は、「行路死人歌」の表現伝統にそのまま連なることになる。

注九…二五段の影響をみるものとして注一錦氏前掲論文があり、一一五段の影響をみるものとして、前田善子『小野小町』（三省堂、一九四三年）、石原昭平「小野小町説話の形成—業平との話をめぐって—」（『東横国文学』二、一九六九年二月）・小野小町の説話—生成と展開—」（『日本の説話』二、一九七三年）・「歌学書に見る小町—「あなめの薄」を中心に—」（『国文学 解釈と鑑賞』六〇・八、一九九五年八月）、伊藤孝子「小野小町説話の生成と伝承—歌語りと説話の関係を中心に—」（『国文学試論』一〇、一九七五年二月）がある。

注一〇…小峯和明「ものいう髑髏—魔の転生—」（『説話の声—中世世界の語り・歌・笑い』新曜社、二〇〇〇年）、錦仁「業平と小町—髑髏遭遇譚から—」（『解釈と鑑賞』

六九・一二、二〇〇四年一二月)。二者はともに中世の『伊勢物語』や『古今集』注に見られる業平・小町の関係を『江家次第』以降つづく短連歌型の髑髏説話の前提に置いており、小峯氏は「二人(論者注・小町と業平)は愛し合って結婚までするが互いに色好みで破局を迎える、再会してももとはもどりにえない、というがおよそ中世の『古今集』や『伊勢物語』注積のうみだした展開である。落ちぶれて行き倒れになった小町を当の業平が見つけ、供養したとするなら、小町にとってこれ以上の供養はない。小町は救われたというべきだろう。」とする。そして錦氏は鎌倉期の『伊勢物語』注積書である『和歌知頭集』などに存する、小町は業平と和歌を詠み合ったことにより、「菩提の門」を通り、往生を遂げたという発想が『江家次第』にも「色濃く流れている」と見、小町と業平によって為される短連歌は「生前になされるべき愛の成就」で、業平と一首の歌を生終えたとき、小町はようやく成仏できたと考えている。そして「小町の過去を知る生存者」である業平が小町を救済するという行為には、「かつて小町と交渉をもった業平自身の贖罪」という側面があるとする。

注一：前田善子『小野小町』(三省堂、一九四三年)

注二：福田秀一「和歌童蒙抄」(『和歌大事典』明治書院)。いっぽう日本歌学大系第一巻の久曾神昇氏による『和歌童蒙抄』解題は、書陵部の識語に「仁平以往所抄也」とあることを根拠にその成立時代を久安、仁平年間と見ており、この場合『袋草紙』とさほど変わらない時代の成立ということになる。

注三：前田善子「異本小町家集について―神宮文庫所蔵異本三十六人家集・及び架蔵異本三十六人家集」・『中の小町集について』(『国語と国文学』二三・八、一九四六年八月)

注四：出雲路修「秋風のふくたびごと―小野小町説話考―」(『国語国文』四九・六、一九八〇年六月)『説話集の世界』岩波書店、一九八八年)、注二伊藤氏論文、注一・注一〇錦氏前掲論文。

注一五：注一四出雲路論文や、それをふまえた上岡勇司「小町歌の伝承」(『説話伝承研究』二五、一九八一年四月)『和歌説話の研究 中古篇』笠間書院、一九八六年)はこの時点で小町がまだ死んでいないと考えている。その理由は神宮文庫本系統の『小町集』が「あなめ」の歌のあとに「冬、みちゆくひとの、いとさむげにてもあるかな、よこそはかなけれといふをきゝて、ふと／手枕のひまの風だにさむかりき身はならはしものにぞざり(あり歎)ける(『拾遺集』91詠人不知／神宮6、他本なし)」という落魄の小町の歌を記しているからである。だが角田宏子『小町集』の研究』(笠間書院、二〇〇九年)は神宮文庫本系統の諸本を精査した上で、書陵部(五一・二)本がその古態を残しているものと見る。そしてこの書陵部(五一・二)本では、「冬みちゆくひとの」以下はそれ以前の部分と一行空けて、独立したかたちで記されていることを指摘している。本来、この「冬みちゆくひとの」以下の部分は髑髏説話とは無関係に、小町の晩年の老衰落魄のひとつの展開として『小町集』に記されたものであったのだろう。

注一六：注二片桐氏前掲書。

注一七：植物が繁茂する荒廃した墓所の例は『白氏文集』『新楽府』などの漢籍に少なからず見られる。また第四節において詳述したように、十一世紀以降の物語を中心に「草の原」の語が墓所ないし終焉の地の意で用いられている。なお、上野英二「長恨歌から源氏物語へ」(『国語国文』五〇・九、一九八一年九月)『源氏物語序説』平凡社、一九九五年)が指摘するように、こうした墓所・終焉の地と草の繁茂をめぐる表現は十一世紀以降、『長恨歌』を題材にした和歌、説話におい

て、『長恨歌』中で「泥土」と形容された馬嵬の楊貴妃の墓所が「秋風」の吹く「浅茅が原」として描写されることへと繋がっていったという。小町の墓所・終焉の地もまた、同時代に楊貴妃のそれと同じようなイメージで捉えられていたのだろう。

注一八…西村聡「花橋と花すすき―『通小町』における『あなめ』説話の背景―」（『観世』五一・八、一九八四年六月）

注一九…神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子辞典』（勉誠出版、二〇〇二年）「散逸物語事典」の「かばねたづぬる」項（足立繭子氏担当）。

注二〇…賀茂真淵の『源氏物語新釈』がこの点について指摘し、「草の原」を墓所と解している。

注二一…吉野瑞恵「朧月夜物語の深層」（『国語と国文学』六六・一〇、一九八九年十月）『王朝文学の生成―『源氏物語』の発想・「日記文学」の形態』笠間書院、二〇一一年）

結語

以上、第一部では『小町集』の成立と歌の増益の方法、「出所不明歌」や他人歌を含めた歌々が織りなす世界を見てゆき、第二部では『小町集』以外のテキストにおける平安期の小町享受のありようについて検討した。

具体的にはまず第一部の第一章で一九九九年に公開された、従来知られていたものとは大きく構成の異なる唐草装飾本を中心として『小町集』の成立とその早い時代における享受について検討した。唐草装飾本の書写年代は十二世紀の後半であり、現存諸本の中では成立が最も古い。そして歌数も計四五首と少なく、その編集意識や配列に神宮文庫本系統と共通するところが少なくないことから、神宮文庫本系統の原型とも考えられてきた。またその巻末付近には、『小町集』伝本の中ではほかに静嘉堂文庫本系統にしか見えない歌や詞書が存在しており、静嘉堂文庫本系統の原本ないし撰歌資料との関係も考えられる。そして注意されるのは、他系統の伝本がいずれも収載している『後撰集』の小町歌をいっさい有していないということであった。

本章ではこの問題を、『小町集』所収歌の歌語という側面から論じた。具体的には、『小町集』の大半を占める、他の平安期の資料に見えず、小町の歌ともそうでないともにはわかに判断がつかない「出所不明歌」や他人歌の中に、『古今集』『後撰集』の小町歌と表現や題材の上で共通する歌が少なくないという指摘に着目した。そのひとつが、『後撰集』に一〇九〇番歌として載る「あまの住む浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみわたる我ぞ悲き」に詠まれた「漕ぐ舟」を詠む歌々である。だが唐草装飾本は『後撰集』所載の小町歌のみならず、「漕ぐ舟」を詠む歌々もいっさい載せていない。しかも、『小町集』諸本が共通して有している長歌を見てみると、他の系統の伝本に存する「浦こぐ舟のぬれわたり」の二句が、唐草装飾本には見いだせないのである。

これは一見、唐草装飾本が書写過程で脱落させたもののように思える。だが、『小大君集』の巻末に存する神宮文庫本系統のより古態をとどめた逸文にも、この二句は存在しない。すると神宮文庫本系統の原本もまた、ある時点まで「浦こぐ舟のぬれわたり」の二句をもたない

長歌を伝えていたことになる。そのようなことから、唐草装飾本の伝える長歌の形はむしろ古態をとどめているのではないかと述べた。そして長歌に「浦こぐ舟のぬれわたり」の二句が挿入された理由を、その後に位置する「いつかうきみのみくさみのわがみにかけて」という表現と関連付けて論じ、この「みくさみの」が舟にかける筈である「みくさみ」と解された結果、『後撰集』所載の小町歌に見える「舟」にかかわる表現を用いた「浦こぐ舟のぬれわたり」の二句が挿入され、よりわかりやすく、小町らしい表現に改変された可能性を示した。そして唐草装飾本が『小町集』の古態を多分にとどめた集であることを示し、この唐草装飾本をはじめとする諸伝本に見える歌と、唐草装飾本には見えないが、これと近い関係にある神宮文庫本系統をはじめとする他の『小町集』伝本が共通して有する歌々を、古くから小町に結び付けられていたもの、『小町集』の「基幹部分」として重視すべきことを説いた。また『小町集』の「基幹部分」の歌々から成るテキストが十一世紀には成立し、貸借、書写が行われ、『後拾遺集』初出歌人である能因法師と相模にも享受されていた可能性が高いことを示した。

次に第一部第二章では、『小町集』に「あま(海人)」の歌が少なからず見られることに注目した。先にも述べたように、『小町集』には『古今集』や『後撰集』の小町詠と同様の題材や表現を用いた「出所不明歌」や他人歌が多く入っていることが指摘されている。その中でもことに「夢」と「あま(海人)」の歌が多い。しかし「夢」の語を詠みこみ、そこでの逢瀬を描いた歌が、『古今集』に五首、『小町集』の「出所不明歌」に七首見られるのに対し、「あま」を詠む歌は『古今集』に二首、『後撰集』に一首、そして『小町集』の「出所不明歌」や他人歌として九首を数える。『古今集』の小町詠十八首のうち、「夢」の逢瀬を詠む歌が三分の一近くを占めていることを考えれば、『小町集』において同様の題材の歌がほかに七首存在するのはさほど驚くべきことではない。だが「あま」の歌は『小町集』において『古今集』『後撰集』の歌数をはるかに超える増加をみせた。この章では、それらの歌々を①『古今集』の小町詠、②『後撰集』の小町詠や『小町集』「基幹部分」の歌々、③歌仙歌集本系統にしか見えない歌々に分けて段階的に検討し、『古今集』の小町歌においては、自分に懸想する相手を揶揄するような姿勢が見られるのに対して、『後撰集』や『小町集』「基幹部分」の歌は、そうした歌の表現を利用しながらむしろ、来ぬ男を待つ歌を詠んでいることを指摘した。また歌仙歌集本系統において独自に増補されている歌々は、『後撰集』や『小町集』「基幹部分」の歌と表現の上で共通性をもっており、ひとつの歌が小町に結び付けられ『小町集』に収められると、次にその歌に存する表現と共通する歌もまた小町のものとなされるという増補のプロセスが見られることを示した。また歌仙歌集本系統の末尾近くに存する「あま」の歌二首は、いずれも出家して「あま」になった小町の詠として読みうることを指摘した。

そして第一部第三章では、『小町集』の「山里」の歌に着目した。『古今集』の小町歌には「山里」の景を詠んだ歌が三首あり、これらは従来、山里に閑居する老小町の歌と解釈されてきた。しかしそのうち唐草装飾本をはじめとする諸伝本に存在する「山里にあれたる宿をてらし

つゝいくよへぬらん秋の夜の月」には、神宮文庫本系統では「山里にて、秋の月のおはりに、むつれしに」という詞書が附されていることに注目した。この詞書から浮かび上がってくるのは、むしろ山里で男と逢う小町の姿である。そしてそこから、『小町集』の始発の段階で「山里に」歌が、平安期に屏風絵の題材として少なからず描かれた「山里で男を待つ女」の歌として理解されていた可能性や、そのほかにも「山里で男を待つ」小町の姿を伝えるような歌々の存在について言及した。

さて、第二部であるが、ここには二本の論考を収めた。まず第二部第一章では、小町の歌の引用表現が三例見られる『住吉物語』を取り上げ、作中に引かれた小町詠の機能と、それが古本の時代から存在していた可能性、そしてなぜ小町詠が多く引かれるのか、という問題を扱った。『住吉物語』に三首引かれた小町詠のうち、姫君と男君によってそれぞれ別個になされた『古今集』の小町詠を用いた「夢」関係の表現は、『住吉物語』の中に他にも見られる姫君と男君の「照応」のひとつであり、個人の意思をこえたところでの二者の結びつきを示しているとした。また都に帰還する姫君を送る遊女の謡として引かれた『後撰集』の「心からうきたる舟にのりそめて一日も浪にぬれぬ日ぞなき」と姫君の漂泊性について考察するとともに、『住吉物語』にどの段階で小町詠が導入されたのかを考察し、小町と水辺のイメージが「あなめ」という特異な語を含む歌を詠み、それを聞きつけたという説話、いわゆる小町の鬮説話の変遷を、十二世紀初頭の『江家次第』に着目して論じた。神宮文庫本系統の『小町集』や『江家次第』においては、鬮説話の「かつての恋人との再会」という側面が前に押し出されており、ことに『江家次第』では、十一世紀の物語を中心に散見される、男が死んだ女の「戸」を「求」める、という要素を導入して業平の小町への想いの深さを演出している。しかし以降、恋の要素は後景化してゆき、かわりに『壮衰書』的な老衰落魄のイメージが鬮説話の前段階に位置付けられるようになることを示した。

これらの検討が明らかにしたのは、『小町集』の「あま」や「山里」の歌、そして鬮説話は、その始発の段階では「恋」の要素が色濃く、ときに物語文学の世界との接点も見られるものの、時代が下るにつれてそれが希薄化し、仏道に帰依する小町像が前面に押し出されてゆくということである。それを平安期と中世の差といってしまうとそれまでなのだが、小町の伝記の空白を埋めるための想像力が、その時代の文化、文芸につよく依拠していることが知られるのである。

『小町集』が成長をつづけてきた時代には、物語文化が花開き、『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』といった歌物語、歌物語的な家集である『篁集』、『一条摂政御集』などが成立したほか、古歌をストーリーの、あるいは場面の核として「作り物語」が生み出されていた。そうした、歌を核として「物語」を生み出す想像力、虚構の人物が生きる世界を思い描く想像力が、小野小町の伝記の空白を、その詠作をよす

がとして思い描くさいにも、深く関わっていたのではないか。